
思いついたはいいけど止まってる小説集

シロクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思いついたはいいけど止まってる小説集

【Nコード】

N3411W

【作者名】

シロクロ

【あらすじ】

いままで色々な小説に手を出してきましたが、思いつくままに書いてきたので書きかけの一話で止まっているのがたくさんあります。それをまとめて投稿することにしました。結構古いのが多いので書き方も異なります。もしその中で読みたいものがありましたら、リクエストしてくださいればその続き書きます。

俺、勇者（前書き）

異世界転移、主人公最強、鬼畜主人公の話。

俺、勇者

200×年、世界は核の光に包まれた。

嘘だ。真実はもっとタチが悪い。世界は、暗黒雲に包まれた。

暗黒雲から影響を受けて動物は狂暴凶悪化し、魔物になった。そして暗黒雲を発生させたという魔王が現れてその命令により、人間が襲われた。

ドラクエみたいになった世界を救うのはお約束通り勇者なんだが、何の因果かただの一般家庭に生まれた当時10歳の俺が選ばれた。一応理由はある。暗黒雲の影響で人々はみんな魔力を得て魔法を使えるようになった。魔力がなければ魔物は倒せない。単に魔物を殺すなら拳に魔力をこめて殴ってもことたりるが、それも質と量により威力が変わる。魔力が強いほど魔物に有効だ。それでもちろん魔力があるほど魔法が使い、魔物を効率よく殺せる。で、何故か俺の魔力は強く多く、最も上質な魔力を持つ人間だとして勇者に選ばれた。

色々ちよー大変だったけど、免許皆伝とかつて14で解放された。されたはいいけどGPSで場所監視されてんの。機械だから魔法でごまかせないし、仕方ないから魔王殺す旅にでた。

大変だったけど俺って勇者だし？ 無敵だし？ 魔王のどこまできた。あとちよつとだ。てか俺の前で虫の息だし（笑）

「死ねやこの蜥蜴野郎がああ！！！」

俺は渾身の力を込めて、二足歩行の偽ドラゴンみたいな蜥蜴野郎に剣をぶっ刺した。

「……………あ？」

気づいたら知らん森にいた。どこだここ。

今、魔王に最後のトドメを刺した瞬間、光ったな、あいつ。てことは魔王の最期の苦し紛れの魔法で転移させられたってところか。

まあいい。早く故郷に転移するか。

魔法はイメージだ。より強固なイメージがあるほど少ない魔力で行える。漫画みたいに魔法陣を書いたり長々と呪文を唱える必要はない。質が高い魔力ほどイメージの足りなさを自動的に補ってくれる、込める魔力が多いほど大掛かりなことができる。

「ルーラ」

俺のイメージはドラクエとかだ。簡単だし、勇者になる直前までやってたからまだ記憶に新しいからな。

「……………ん？」

あ？ 何で転移しないんだ？ イメージのせいで洞窟内では使えない仕様だが、ここは森だ。

「ルーラ」

…魔力も減ってない。何故だ？ ……もしかして魔王がいなくなっただけから魔法が使えなくなっただけか？

「ベホマ」

自分の胸に手をかざして呟くと、回復魔法はちゃんと発動した。少し楽になった。

だが余計にルーラだけ使えない理由がわからん。ま、できないものは仕方ない。とりあえず近くの街まで行くか。

「よつと」

手近な木の枝を降ってまたがる。

「フライ、ゴー」

浮遊魔法をかけ、そのまま箒にのる魔女みたいに森の中を進む。ちなみに直接乗ると痛いので空気のクッションをいれてる。

自分に飛ぶよう魔法をかけられれば手っ取り早いんだが、何もなくて自分だけ浮くイメージは俺には難しい。普段は小さい羽を生やすことで飛んでたが、今は魔力を温存するため簡単な方にした。

小一時間ほど飛ぶと崖についた。そこから見下ろすと地平線のあたりに城があつた。あといくつか集落のように町があるが、基本目に見えるのは森ばっかだ。

すっげえ田舎に飛ばされたのか？ 城があるから、周辺をあえて森なのか……まあ、とにかく一番近いあそこの町……村か？ 村に行ってみればわかるか。

俺は木の棒に乗ったまま、崖を降りた。

○

ただの木に乗つかるのもダサいので手前で捨てた。村はしょぼい木製の柵で囲ってあるが、まさか魔物対策か？

確かにあの森にいた何匹かは見たことないシヨボい種類だったが、これはねーよ。すつかすかだし。

村に入ると何人かがちらちらと俺のことを見てくる。

さて、どうするか。こいつら服は着てるが木の家だししょぼい服だしアマゾンの奥地か？ でもこいつら、普通に白人？だよな。

んー？ なんだこの感じ。なんか妙だな。つか、ここはマジでどこだ？

「おい、ちよつといいか」

「あん？ お前見ない顔だな」

自分には常に翻訳こんにやく的魔法をかけてるから言葉は通じるので、テキトーに前を通り過ぎようとしたおっさんに離しかけた。

「ああ、ちよつと遠くから来たんだが、ここはどこら辺だ？ 大陸名は？」

「は？ 大陸名い？ どんな規模で聞いてんだよ」

「転移魔法の失敗だな」

「ああ、あんた魔法使いか。ふーん？ よくわかんねえが、ここは中央大陸のディア王国の田舎だよ」

「…そうか、ありがとう」

にこー、と爽やかな笑みを浮かべておっさんから離れる。

そしてそのまま進み、適当な軒下に腰を降ろした。

中央大陸…か。中央大陸。中・央・大・陸！ …ありえねえ。

どんな教育だよ。いやそりゃ、俺だって小学校中退だし、勇者としての教育はされても7大陸だか全部言えないけどさ。

でも中央って…自分たち基準かよ。こっから出なきゃ困らないだろうけど、勝手に名前つけんなよ。

まだ大陸ってなんだ、って言われたなら教育がされてないか大陸って概念がない未開発の地なのかって思うけど、堂々と中央大陸とか。

ここマジどこだよ。ルーラできないってもしかして距離が遠すぎんのか？　ここは月かよ。こいつら宇宙人かよ。

……いや、待てよ？　あながち有り得くない、か？　魔王が宇宙人って説もあったし、何よりルーラできない理由がつく。惑星間、いやもしかしたら異世界の可能性もある。いくら俺でも普段の感覚でルーラして残りMP20くらいの今の状態で魔力が足りるわけがない。

もしも、もしもだ。まだ決定打はないが、ここが地球じゃないなら……俺は、自由か？

思わず頬がゆるむ。俺は急ぎ確認するため立ち上がり、テキトーなやつにまた声をかけて地図を見せてくれるよう頼む。

持ってないらしく村長なら持つてると家まで案内された。嘘の説明をすると普通に見せてくれた。ありがたいがこいつらには警戒心とかないのか。

魔法の失敗で飛んできたと言う俺を心配する村長と好青年スマイルで別れる。

結論、地球じゃない。

「いよっしゃあああああ！ー！！」

俺の突然の大声に回りのやつから変人を見る目を向けられたが知ったことか。

自由だ！ 俺は自由だ！ 魔王ありがとう！ 殺そうとしてごめんな！ もし生きてたら地球の人類皆殺しにしていいいからな！

「ああ…自由最高」

もう、あいつらの言うことを聞かないでいい。こうなるんなら、さつさとむかつくやつ殺しとけばよかった。今までの俺のチキン！でもこれからは違うぜ！ これから嫌いなやつは殺して、女は犯して、うまいもん食って、好き勝手に生きてやる！

「……さて」

とりあえず、きちがいを見る目を向けられるのも辛いしさつさと移動するか。

さよなら！ 奴隷の日々！ こんにちは！ 自由！ ヒャッハー！
テンションあがってきたぜえ。

復讐してやる！！（前書き）

死んだけど色々あつて記憶持ったまま転生。8年後の世界で自由に生きようと思つたら、自分を殺した相手を見つける話。

復讐してやる！！

いつもいつも窮屈だった。私は本当はスカートなんて大嫌いだし、女らしくなんて大嫌いだった。いつも男子と一緒に走りまわっていた。

だけど災難なことに我が家はちよつとはお金持ちで、地味に由緒ある家柄で、女らしくしないならと中学は山奥の女学園に無理矢理入れられてしまった。

最初はそれでも反発していたけど、あんまりに叱られて嫌になったから、いつそ女の自分という役を演じるつもりで行動したら、めちゃくちゃ褒められた。

私は基本的にやるとなったらとことんやるタイプで、自分の理想の女を演じた。昔から乱暴だのと怒られていたから、褒められて単に嬉しかったのもある。

演技だと割り切れば、女らしくするのもそこまで苦痛ではなかった。小さな妹に本を読んであげる時にも女言葉を平気で言えし、私はそういう演技なんかに向いているのかもしれない。

だけど演技を始めて、もう5年だ。最初こそ遊び気分だったけど、ずっと演技をするのは疲れる。

しかも私が本気で心を入れ替えたと回りは信じてるし、女の私を慕いだす連中まで出てきたからやめるわけにもいかなかった。

「これは内緒だけだな、本当は私は昔のまんまなんだぜ。どいつもこいつも騙されてやがんだ」

帰郷して妹にだけそう言って、手を叩いて喜ばれた時はなんだか苦勞が報われた気がしたが、やっぱり疲れる。

しかし妹のやつ、漫画を読んでこうしたらより女らしいのだと言
つてきて、思わずそれを実行して余計にお嬢さま然としなきゃなら
なくなつた。調子にのらなきゃよかった。

「お姉様っ」

そんな風に思っていたんだが、最近事情が変わつた。外面をよく
するついでに、どうせテレビもないので勉強もしていたら一番にな
つてしまつてますます引けなくなつて、素敵女性の道を突き進んで
いた私の前に、超可愛い女の子が現れた。

「お姉さま、ご機嫌よう」

「お姉さま、今日も素敵ですね」

「お姉さま、一緒にします」

と、なにくれと私を慕ってくれるので、女らしくするのも悪くな
いと思ひだした。

とはいえ、常にそれだと疲れるので妹への手紙だけ俺俺口調で書
いてストレス発散した。

ただ単に可愛いなあと気にいつてる、と自分でも思っていたのだ
けど、ある日自分の思いが恋であると気づいた。

昔から男に生まれたかつたと考えてはいたが、まさかガチでレズ
思考だったとは。悩んだが、妹に相談したらうじうじしてるのは私
らしくない、お姉ちゃんはお姉ちゃんでしょ、なんて嬉しい後押し
をしてくれたので告つた。

ら、拒否られて言い触らされて嫌がらせ受けた。おい…あの癒し
系美少女どこ行つた。

「てゆうか、あなたキモいと思ってたんですよえ」

漫画の悪役みたいになつてんじゃねえか。くそが。
もう女なんて知るか！ 私の味方は妹だけだ。ちくしょうが。大学
は絶対向こうに戻つてやる。

「あつ！？」

「あら、ごめんなさい。手が滑つ…あつ」

え？

○

ここまでがエピソード。17年の人生をエピソードなんかの一言で
片付けるのは業腹だが、死んで終わったしそうなる。

死んだあと、天国に行く前には役所みたいなとこに通された。
羽の生えた男か女かわからない子供が天使っぽい。カウンターの前
に行くところにも天使がいて、書類を見ながら声をだす。

「えー、たかとおも高遠智さん、男性ですね」

「…は？ いやいや天使さん？ んん、わたくしのどこが男に見え
ると言うのかしら？」

「……あれ？ でも書類には男つて…え？」

「え？」

そのあとバタバタして別室で待たされて、眠くてうつらうつらした頃、ドアが開いた。羽もないし大人だ。誰だ。

「お待たせしました」

「ん、あ…いえ、それで、私の手続きは？ 天国に行けるんでしょうか？」

「あ、いえいえ。天国や地獄と言ったものは人間が勝手に言ってるだけでして。人間は死んだ後は徳に応じて輪廻転成します。徳の低い、いわゆる悪人は虫などです。一応人間は最も徳の高い人になるものなんです」

「はあ…ではもしや、私の徳が高すぎるとか？」

「いえ、あなたは特に悪さをしたわけではありませんが同性愛がマインスポイントなので、順当にいけば来世は犬ですね」

「え」

「ただ、今回はこちらの不手際ですので」

説明を聞くと、どうやら私の魂には男としての性が与えられたのに、間違っただけで女にしまったらしい。だから実際には同性愛ではない上に、不手際により不当な人生を与えてしまったと謝られた。どうも彼は神様らしい。

「はあ…まあ、済んでしまったことは仕方ありません」

「お許しいただけますか？」

「はい。私を男として生まれ直していただければ」

「起こったことはなかったことにはできません。過去の時間軸に戻すのも同様です」

「……」

「もちろん、あなたには男性として人生を送る権利があります。なので今回は特例として記憶を保持したまま人間の男性として転生さ

せていただきます。なお、お詫びとして一つだけ、あなたが望むオプションをつけます」

「オプション？」

「はい。たとえばお金に不自由しない金運を付与するとか、異性にモテるようにするとか、そういうものです」

「……断つて許さないと喚いても、やり直しはできないんですよ？」

「その場合は申し訳ありませんが、あなたの記憶を消して男性として転生させます。特典として不自由のない程度の全般的幸運はつけさせていただきます」

「……わかりました。記憶はあるままをお願いします」

「ではオプションはどうしますか？」

ふむ……異性にもてるというのは魅力的だ。女の子にふられたあげく冗談で突き飛ばされた勢いで階段から落ちて死んだわけだし、復讐してやりたい。だからその能力で私に恋させてふってやるのは理想的だ。

でも他に好きな人ができた場合、やはり自分の魅力で相思相愛になりたいから却下だな。

「……親を選ぶというのは可能ですか？」

「特定の個人の場合難しいですが、優しい親、有名人の親、という条件なら可能です」

「なら、役者として成功している放任主義かつ甘い親で」

「役者？ 芸能人ということでもいいですか？」

「いえ。それでは範囲が広すぎます。わたくしは演技をするのが好きなので、親が俳優など役者であることが理想なのです。その職につくのを反対されないでしょうか」

「演技の才能が欲しい、ではなくてですか？」

「そんなもの、実力でなんとかしますわ」

「そうですか。わかりました。受理します。では、この度は申し訳
ありませんでした。よき来世を」

神様がそう言った瞬間、急に眠くなった。

○

コン、と恋に落ちた。(前書き)

前世女の記憶持ち主人公。幼馴染と付き合い出すけど、実はそいつは人間じゃなくて、前世での旦那が転生した女の子が現れたりする話。

コン、と恋に落ちた。

「本当に、君と一緒になれて嬉しいよ」

一回り上の、頼りない人。プロポーズされて、今は新婚旅行中だ。精力的な人で毎日体を重ねて、当然昨夜もして、まだ足りないらしくお尻を撫でてくる。

「いい台詞っぽいこと言いながら何をしているんですか。しませんよ」

「えー」

「えーじゃありません。朝からやめてください。今日は観光するんでしょう」

「それは明日にでも…」

「昨日そう言って、潰したじゃないですか。がつつきすぎです」

「そうは言いがねえ…」

「ねえもない。ほら、行きますよ」

「はああ」

「…そういうのは帰ってきてから、ね」

「よし、そうとなったら早く行こうすぐ行こう！」

単純な人だ。

結婚しておいてなんだけど、私はこの人のことよく知らないし、多分恋もしていない。愛してるというには足りない。

けど少なくとも彼は私を好きらしいし、私も嫌いか好きかなら好きだ。一緒にいて楽しいし、肌を重ねる相手としても抵抗はない。それで十分だと思う。

「いやあ、いい天気だ。絶好の観光日和だね」

「そうですね、…?」

「ん? どうかしたかい?」

「部長、なにか向こう騒がし」

世界が暗転した。

○

「うわああああ! ……はああ」

夢か。というか、またか。

冷静さには定評のあるが、さすがに死ぬ夢は堪える。しかも実体験。
ある意味トラウマものだ。

わかった人はわかったと思うが、実は前世の記憶がある。性別が変わって男になったが非処女だったからか、それとも細かいことは気にしない性分だから特に不自由はない。

定期的にムラムラして処理に困ったりはするが、前世からして自慰経験もあるのでそう抵抗もなかった。

「お兄ちゃん、凄い声したけど大丈夫ー?」

「ああ、大丈夫だよ。お兄ちゃんは無敵だからね」

ベランダで繋がってる隣の部屋からひよいと顔を出して愛しの妹が声をかけてきたから、手をあげて応える。

前は長女で今回は長男、下の子の世話は慣れてるのでわりと好かれてると思う。

「なに馬鹿言ってるのよ。また悪夢？」

「そうだよ。心配してくれてありがとう。あとおはよう」

「ん、おはよう」

「今日もボクの妹は可愛いな」

「ばーか」

洋子は悪態をついて顔を引つ込めた。前の妹とそっくりで和む。前も可愛い可愛い超大好きと言うと馬鹿馬鹿言われたものだ。もちろん今は男なので距離感には多少気をつけているが、やはり兄弟はいいものだ。

ジャージから制服に着替えて一階におりて顔を洗って寝癖を直してダイニングに入る。

「おはよう、お母さん」

「おはよう、明」

フルネームは河村明なわけだが、実は前世の名前は明と同じ字だ。珍しくない名前とは言え凄い偶然だと思う。

「いただきます」

ご飯とおみそ汁を自分の分いれてお箸をぬいてコップにお茶をそそいで食べはじめる。

おかずは食卓の真ん中にあるお漬物。今日は茄子。醤油をちよつとつけてご飯と食べる。うまい。

「いただきます」

妹がやってきて隣に座って食べはじめた。特に会話はないが仲が悪いわけではない。

みそ汁の具は茄子。余ってたのかなあなど考えながら完食。

「ごちそうさま」

食器を流し台にさげる。家を出るまであと20分くらいは余裕がある。

お風呂場に寄って脱衣所にある洗濯機から自分の分の衣類だけカゴに入れる。

妹は最近思春期らしく下着類を触ると怒るけれど、女の子に欲情するようになったとは言え、以前は身につけてたものに発情するわけもない。余裕でスルー。やましいことはない。

自室からベランダに出て洗濯物を5分で干す。

筆記用具やルーズリーフとか必要最低限がいればなしであることを確認して、少し時間が余っているので今日はテキトーに縦積みの本から一冊を取ってベッドに座った。

部屋には幼なじみや妹が置く場所がないからと置いて行く漫画や小説がそこかしこにある。本棚も半分以上占拠されているけど、もとそんなに本持ちではなく困らないので放置してる。

ポップでキュート、なんて言葉が似合う明るい表紙には怒り顔の女の子がスカートを押さえてるのにパンツまる見えな状態の絵が載っている。タイトルは『妹大好き3』

なんだろう…これを読むと色々問題になる気がする。しかし彼女

たちが読んでいるのだからこのまる見えパンツが脱がされる展開ではないだろう。読んでみよう。

「……」

冒頭を読んでみたけどうただけあって登場人物が多くて説明がないからわかりづらい。ぱらぱらとめくると挿絵があった。

「……」

ぱらぱらぱら……

「…これは…」

脱いではないけれど、絵だけ見るとぬけそうなくらいエロい。どうしよう。彼女たちを注意した方がいいんじゃないだろうか。

というか、『私』が子供の時はこんななかったのに。20年は大きいな。日本の進化すごい。

おじさん、ついていけないよ。

「お兄ちゃん、そろそろ時か…そ、その本…」

ドアが開いて洋子が顔をだした。壁かけ時計に目をやると、もう出る時間だった。

「もうそんな時間か。忘れてた。ありがとう」

「その本、面白い？」

「ん？ いや、まだ読んでない。けど…」

「けど？」

「その…最近ではこういうのはよくあるの？ 見せパン、だっけ。」

でもまだ洋子には早いと思うな」

「お兄ちゃん、パンツくらい普通だよ。見たいならいくらでも見せちゃうくらいだって」

「本当に？」

はしたない、と思うのは自分がやはりおばさんくさいからなのか。いや、男だからじじくさいの方が今は正しいのか。

「本当だよ。あ、勿論親しい人にだけだから。私なら…お、お兄ちゃんなら、いいよ」

「洋子が普段お風呂上がりズボンはかないのはそういうことか。何度も言うけどやめなさい」

「…ふん、お兄ちゃんには関係ないでしょ。私、先に行くよ」

おや、どうやら機嫌を損ねてしまったらしい。

洋子は部屋をでていった。

とはいえ妹たちを愛するあまり小言じみたことを言ってしまうて疎まれるのはいつものことだ。

度合いにもよるが学園につくころには機嫌を治しているだろう。

学生鞆をとり、妹に追いつかないようにゆっくりと家を出ることにした。

ちなみにさっきの本は元の位置に戻しておいた。

「あつきらー！」

「と、おはよう」

幼なじみ、金子紺^{かねこん}が挨拶がわりに抱き着いてきた。

背後から首に腕をまわして抱き着いてくるので少々苦しいが、それより背中にあたるふくやかな感触を意識してしまう。

以前なら女同士なので何も感じなかった。男になったのだなあ実感する。

年齢一桁の時から付き合いである紺は最近ぐつと女らしくなっていて、こちらとしては以前と同じ距離感で接されて役得なんだか複雑だ。

「おはよーでございますっ」

「紺、重いからやめて」

「えー、重くないですう。明のいじわるう」

ぎゅつと腕に力をいれてきたのでさすがに苦しくなってきたが、それより胸が気になってしまふ。悲しい本能だ。

「紺、紺、やめなさい」

「はい」

ぽんぽんと腕を叩いてやめさせる。素直にやめた紺はえへーと笑って腕をからめてきた。

とても可愛らしいが、そろそろ友達とはいえ男女であることを意識して欲しい。

「紺、もう高校生になるんだから、腕を組むのはやめよう」

「やーです」

「紺」

「…明は、コンと腕組むのいやなんですか？」

「…そうじゃないよ。あのね、紺、僕に懐いてくれるのは嬉しいけど、一応僕は男だからね」

「？ 知ってますよ？」

「いや、だからね、あんまりくつつかれると…」

「…いやなんですか？」

うるうると泣きそうになっている紺。身長の関係で常に上目遣いの彼女の姿に、何も言えなくなる。

前世からだが基本的に女に弱い。好意が前提の押しにはとてもなぐ弱い。というかそうでなければ彼のプロポーズを受けはしない。気乗りしなかったが1時間くらい泣きながら頼まれてスピード婚したのはもはやいい思い出だ。

紺は恋をしていないだろうが、好きだ好きだと全身で訴えてくるのでつい甘やかしてしまう。

「…いいよ」

「は、相変わらず明はちよろいですねー」

けらりと笑って紺は言った。変わり身が早い。洋子が言うにはこういうのを腹黒いと言うらしい。

でも腹黒いと、計算尽くとわかっていても、甘やかしてしまう。

やはり、甘い人間なんだろう。

だけど、まあ前世も何だかんだ言って幸せだったから、構わない。

紺のことはもう、大切な家族みたいなものだ。愛していると言って

過言ではない。だからこれでいい。

「紺」

「なんですか？」

「急ごう。遅刻する」

「はいです」

ご機嫌に笑う紺。紺の涙や笑顔は時々嘘をつくけど、これは多分本当の笑顔だから、僕はこれでいい。

○

「明」

「ん？ なに？」

「好きです」

「え、ああ、僕も好きだよ」

「…そうじゃなくて、コンは、あなたに恋してるんです」

「…え？ は？」

「だから、コンと付き合ってくださいって言ってるんです！」

「……それ、今言うこと？」

授業中、何の前触れもなく告白されてしまった。

「コンは本気です！」

「金子！ 授業中だぞっ」

「ハゲは黙ってる！ 明、コンと付き合ってください。コン、ちょー尽くすタイプです。才色兼備な大和撫子として活躍しちゃいますっ」

「紺、先生に暴言吐かない」

「ちえ、いい子ちゃんぶりやがってですう。でもそんなところも好きです！」

「……わかった、付き合うから先生に謝りなさい」

「ごめんなさい先生！ ってうええええ！？ マジすか！？ も、もう今更やめたって言っても駄目ですよ！ 死ぬまで一緒にいてもらいいますよ！」

「わかったわかった。死ぬまで一緒にいるから、静かにしなよ。今は授業中だよ」

「そそ、そんなのカンケーねーです！ 7年待った乙女心を馬鹿にするんです！ 先生、早退します！」

「ちよ、こっ」

紺が暴走した。

小柄な体から想像できない力で手をひく紺に連れられて、問答無用で早退させられた。

○

コン、と恋に落ちた。 2

紺が住む一人暮らしのマンションに連れていかれ、靴を脱ぐ間もなく玄関すぐのダイニングにあるソファに押し倒された。のしかかって抱きしめられて顔面を舐められた。

「落ち着きなさい、紺」

「おお、落ち着けるわけですよ！ てかなんで明は落ち着いてるんですか！ コンなんて今日から毎日告白してアタックして一年以内に落とそうと思ってたのに予定が狂って幸せすぎて夢みたいで夢じゃないですよね！？」

「落ち着け」

「ぶえ」

ほっぺを両側から引つ張る。相変わらずよく伸びる。

「いはひへふ…ほふーほひよふあ、へんひふ！？」

「落ち着け。夢じゃないから」

手を離す。少しは落ち着いたらしく、抱き着くのをやめて腰のうえに座り込んで熱い視線を向けてきた。

「うう、ううう、感激です。まさか両思いだったなんて。あつ、明はいつからコンに恋してたんですか？ やっぱりコンくらいの美少女だと一目惚れですか？」

「いや、恋はしてないよ」

「……………え？ ええ？ ちょっと、酷い！！ その場しのぎだったんですか！」

「違うよ、僕はコンを愛してる」

「…わんもあぷりーず」

涙目になってわっと顔を覆った手の隙間からこっちを見てくる。
とても可愛いし、うん、少し気は早いけど結婚相手として申し分ない。

「愛してる。コンと一生一緒にいたい。死ぬまで一緒にいよう。僕
が死ぬまでコンを守るよ」

「わ、わわわわ、熱烈！ 明の愛でコンはもう…！ って、だった
らなんで恋してないって言うんですか」

真っ赤になって手をぶんぶん振りながら顎をひいて上目遣いになる
紺。

「恋じゃないから。僕はコンに恋してない。でも愛してる。愛して
るから、コンが僕と恋人になりたいなら喜んで受けるよ」

「…う、うう口ん。とても、とても複雑ですが…まあ結婚してしま
えば恋より愛が大事なわけですし、いいでしょう！」

この年で結婚は早い気もするが、人間いつ死ぬかわからないのだから
そのくらいの気持ちで構わないだろう。幸い紺もそのくらいには
私を好いてくれているようだ。

「じゃあじゃあ、早速いたしましょう」

「え？ なにを？」

「やだなあ、カマトトぶらないでください。子作りですよ」

につこり笑った紺は、昔の旦那によく似た表情をしていた。

○

「赤ちゃん、できるといいですねえ」

裸で自分のお腹を撫でる紺に愛おしさを感じるが、焦る。

「ハッキリ言うけど、赤ん坊は困る。社会人になるまで待つて欲しい」

「ええ、そんなあ！ 私、すぐにでも明の赤ちゃんが欲しいんですよ！」

「…なんでそんなに焦ってるの？」

「だってだってだって、明、ライバルが多いんですもん！ 早くモノにしないと！」

「そんなことないよ。紺のこと愛してる。もう僕、紺のことお嫁さんにするって決めたから。紺こそ、僕以外に本命つくらないでね」

「本命つてもしかして愛人オツケーってこと！？ なんですか！ 最初から明は2号さんつくる気満々じゃないですか！」

「違うよ。僕を好きになる変わり者なんて紺しかいないから大丈夫だよ。紺は魅力的だから、僕一人で満足させる自信がない。でも君の本命でいたいからとりあえず器の大きいところを見せておこうかと」

紺は何か言いたげにあわわわと口を開いたり閉じたりする。

どうして紺はこんな冴えない男がモテるなんて思っただろう。

「……しませんよ！ 明しか見えないです！」

「本当？ 嬉しいな…ねえ紺」

「なんですか？」

「もう一回、いい？」

「…明のえっちい」

男になって性欲があがったらしい。または、紺が可愛すぎるのが悪い。

○

夕方になり家に帰って紺のことを報告した。恋人ならともかく、結婚を前提ともなればそれが妥当だろう。それに紺と一緒に住みたいというので尚更だ。

「まあ、いつかはそうなると思ってたけど、いきなり婚約とは思いきったわね。誰に似たのかしら」

思ってた理由がわからないが、思いの外あっさりと承認された。前世もだが親の理解のよさには恵まれているらしい。

「母さん、それで僕、紺の家に住もうかと思うんだけど」

「それは却下。紺ちゃんなら大歓迎だからこっちに住みなさい。ただし……あんまりこういうのは言いたくないけど大事なことから言っわ。いい？ 避妊はしなさい」

とても真面目な顔で言われた。その意見には同意だけに先程の軽率さが悔やまれる。

「それは勿論…次からはそうするよ」

「おい。淡泊だと思ったら…展開早過ぎでしょう」

「つい」

「とりあえず薬、薬よ。病院行きなさい。今のうちに早く」

「あ、大丈夫ですよ、今日安全日ですから！」

「……絶対じゃないけど、紺ちゃんがそついうならいいわ。」

大丈夫なのだろうか。よくわからないが、次から気をつけよう。

「あの、どうしてコンの家は駄目なんですか？」

「もったいないでしょ。紺ちゃんのマンション解約して家賃分は貯金なさい。あとあなたの親御さん……あら？」

「ああつ、『コンの親ならもうオールオッケー！ おばさまに一任してくれるそうです！』」

「あらそう。なら、こっちに来なさい。いいわね」

「はいです」

「？」

今なにか、不自然な話の流れだった気がするが、二人とも普通だ。気のせいだろうか。

「じゃあとりあえず、紺の荷物運ぼうか。部屋はどうするの？」

「あんたの隣の物置部屋を片付けなさい。確か服と本ばかりだし、お父さんの部屋に運べばいいわ。しっかり掃除するのよ」

「わかったよ」

トントン拍子に話が進む。これでいいのかと思ひ悩む暇もないが、紺がいいなら構わないだろう。我ながら主体性がない。

久しぶりに物置部屋に行くと、埃がひどい。これを見ただけで週末まで紺の引っ越しを延長したくなった。

「紺…掃除はまた今度にしない？」

「しませんよ。そうしたらコンはどこで寝…は！もしかして遠回しに自分のベッドと一緒に寝て欲しいと言ってるんですか！？もう、明んの甘えん坊っ」

紺は基本明るい子だが、今日はまたテンションが高い。体力的にもだが疲れたしお風呂に入ってさっさと寝たい気分だ。

「紺」

「勿論オツケーです。ああ、でもおばさまと約束しましたしコンドーム買うまでは駄目ですよ。コン、ちょっとひとつ走りしてきますから待っててくださいね」

「いや…こ…」

とめる間もなく部屋を出て階段をおりる足音がして遠ざかっていくのを感じながらため息をついた。

紺、今日は本当にテンション高いな。まるで暴走列車、とてもじゃないがとまりそうにない。

「お母さん」

「さつき紺ちゃんできていったけど、もう掃除終わったの？」

「まさか。面倒だし引っ越しは週末でいいかなって。僕疲れたから寝るね。夕食になったら起こして」

「わかったわ」

階下の母に要件を伝えてから自室に戻りジャージに着替えて寝た。

○

叩き起こされた。

我が妹と婚約者殿は容赦がない。婚約、早まったと思わず思った。昔から暴力は嫌いだ。

「で、二人して慌ててどうしたの？ 洋子は制服を早く着替えなさい。もう晩御飯だよ」

「そんな場合ですか。なに勝手に週末に延ばしてんですか！」

「紺うるさい、なんであんたいきなり勝手に住もうとしてんの。ほんつと図々しい」

「勝手じゃないです！。明とおばさまに許可もらってます！。なんで洋子ごときに許可がいるんですかー」

「お兄ちゃん！ こんな女と結婚なんて本気なの！？」

「将来的にはそのつもりだよ。洋子も、知らない人より紺がお姉さんになった方が嬉しいでしょ？」

「冗談でしょ！ こんな女絶対反対よ！」

………そういえば、この二人は仲が悪かった。中学にあがるころから二人は顔をあわせないし、偶然あわせてもひたすら無視をしていた。

昔の喧嘩三昧に比べて静かになったから忘れていた。それに二人とももう電車に乗る時に大人料金を払う程度には大人なのだから、まさか今だに昔のままいがみ合っているとは思わなかった。

そういえばこの二人、どうしてこんなに仲が悪いんだろう。今まで考えたことがないが、たまたま馬が合わないのか。趣味趣向が違う程度なら我慢して少しは仲良くして欲しいものだ。将来は家族になるのだから。

そう気持ちを伝えると二人の反応は両極端だった。

「か、家族ですか…でへへ。わかりました。コンちゃん頑張っちゃいますっ」

「反対だって言っでんでしょ馬鹿兄い！　こんな雌狐が姉なんて絶対嫌！」

「ああん？　誰が雌狐ですって！？　コンみたいな美少女つかまえで失礼にもほどがあるにございますよ！？」

「自意識過剰すぎんのよ！　そういうところが嫌いなのに！」

「オコサマはひっこんでください！　コンと明はもうただならぬ愛に溢れた関係なのですよ！」

「えっ…お兄ちゃん？」

この子ら本当に元気だなあと考えていたら唐突に巻き込まれた。

というか紺、事実とはいえ中学生に向かって、しかも妹にそういうことを言うのは如何なものか。

朝に判明した事実によれば洋子はずいぶん破廉恥な娘さんだが、しかしいくら妹が平気でも兄は困る。

「二人とも落ち着け。僕は紺に告白されたから付き合うことにして、ついでに一緒に住むことになった。片付けが面倒だから週末から」

洋子は何故か泣き出すし紺は紺で文句を言ってくるし、なんだかずいぶん面倒なことになった。
基本的にことなかれ主義の平和主義者を自認しているが、二人がいと途端に騒がしくなる。

二人のことは勿論好きだが、心底げんなりするの根が薄情だからだろうか。

ため息をついて、時間が解決してくれることを願って布団に包まった。

○

そんなスルー展開を二人が許してくれるはずもなく、起こされてリビングに連れて行かれた。

仕方ないから二人には懇切に自分の意見を述べた。

「……」

洋子はなにやらむっつりした顔で黙り込んで、でていった。階段を駆け上がる音がしたのでおそらく部屋に戻ったのだろう。

いくら破廉恥な書物を兄の部屋に放置するような妹でも、やはり中学生。兄が告白された日に早退をして昼間からふけていたという事実には嫌悪感があるらしい。

気まずいが、洋子もいつかはわかってくれるだろう。今は堪える時

だ。

「明、週末にはちゃんと掃除してくださいね。約束ですよ」

「わかってる。紺もそれまでに荷造りするんだよ」

「わかってますよ」

「ん、土曜日にするから、紺も来て掃除手伝ってね」

「ええー、旦那様がやってくれないんですか？」

「掃除は奥様のお仕事だよ」

「男尊女卑反対でーす」

「悪いけど僕、亭主関白なんだ。僕のこと好きなら我慢してほしいな」

「なんと！ 驚愕の新事実ですよ！？」

「僕、基本的に不器用だから家事は苦手なんだよ。紺は得意なんだから任せていいでしょ？」

「……え、な、なんで得意だと思うんです？」

「？ 一人暮らしだから料理くらいしてるだろうし、今日部屋も綺麗に片付いてたじゃない」

「あー…はい、まあほどほどに出来ますけど」

以前に家庭科の調理実習でくれたクッキーも美味しかったので紺に家事技能があることはわかっている。

なのにどうしてか紺は困ったように曖昧に笑ってごまかそうとしている。謙遜だろうか。

紺は頭もよく運動もできて家事もできて可愛い…とよく考えたらパーフエクトだ。

前世の記憶があり子供のうちからすれば有利なのはわかっていたので色々手をだした。なのでそれなりに優秀である自負はあるが、紺ならもつといい男を捕まえられるだろうにどうして選ばれたのか今更だがわからない。

勿論、紺が好きだと言って求めてくれる以上こちらとしても愛して添い遂げることに是非はないが。

「じゃあそれで決まり。荷物運ぶのは手伝いに行くから、汚れてもいい格好でいてね」

「…わかりました」

渋々頷く紺。

前回の人生で、結婚するなら主導権はつかんでおいた方がいいと学んだので強気にいく。

「落ち着いたところで、早くご飯食べなさい。片付かないでしょ」
「あ、はい」

母はとつくに夕食を食べ終えていた。
いつの間に…。

○

コン、と恋に落ちた。 3

とりあえず落ち着いたので紺を家まで送ることにした。

紺が我が家で夕食を食べたのは、そういえば初めてじゃないだろうか。

昔からの付き合いなのに………そういえば、最初に出会ったのはいつだったか。こちらに引っ越してきた、その前に何処かで会ったような気もするが…。

まあ記憶力に自信があるわけではないし、細かいことはいいだろう。

紺は鼻歌まじりにくるくると回りながら一歩前を歩いている。珍しいくらいにご機嫌だ。

ご機嫌の理由が付き合いだしたから、なら嬉しいがどうだろう。

「紺、ずいぶんご機嫌だね」

「はい。そりゃあもう、てかてか、明が普段通りすぎなんですよう」

口を尖らせる紺が目は笑っている。

紺は、可愛い。

はつきり言って体は思春期真っ盛りな男の子なわけで、こうして笑顔を見るだけで抱きたいなあとか思ったりする。でも理性で我慢する。

前世で旦那のやりたい盛りにはいい加減にして欲しいと思ったからだ。紺なら受け入れてくれるだろうが、わざわざ呆れさせる必要もない。

学生らしく清く正しい交際をしよう。何より、今避妊具を持っていないし。

「じゃあ紺、また明日ね」

「あー、明、せっかくですしちょっとあがって行きませんか？」

マンションの前で別れようとしたが、紺が袖をひきながらはにかんで誘ってきた。

紺は積極的すぎるくらい積極的だが、ふいにこうして自信がなさそうな疑問形の消極的態度をとる。

それを断るほど冷たい人間ではないし、まだそう遅い時間でもないのでお言葉に甘えて本日二度目の訪問をした。

「ささ、どーぞあがってくださいな」

昼には寝室に直行しそこから即シャワーを浴びたので、リビングはよく見ていなかったがずいぶん物が少ない。

だがそういえば、寝室もベッドと明かりくらいだった気がする。本能に従っていたので確信はないが。

リビングにはソファと机、机の上のテレビしかない。床もフローリングが丸だしで、カーテンもなくずいぶん殺風景な印象を受ける。シンプルが好みにしても生活感のない部屋だが、これが紺の好みならあまり干渉するべきではないだろう。

部屋への感想は避けて手をひかれるままソファに座った。

がさがさとビニールの音がした。なにかを机に置いたらしい。そういえばさっきから何か持っていたな。

「えへへー、二人つきりですね」

「そりゃ、他にいたら怖いよ」

紺の一人暮らしの部屋を一人で訪ねたのに三人いたら、ただのホラ

ーだ。

ジョークの類だろうと軽く流したがなにが不満なのかむうと眉をつりあげた。

「ちーがーいーまーすー」

「？　ところで電気つけないの？」

「え…あ、わ、忘れてました。すみません、ちょっと待ってください」

いつまで暗い部屋に座っているのかと思った。

前述したようにカーテンがないので月明かりが入ってきているが、具体的には紺の輪郭はわかるがパンツがよくわからないくらいには暗い。紺が手をひかなければソファに座るのも苦労しただろう。

紺は住んでいるから慣れているようで立ち上がって迷わず歩いて電気をつけた。

ぱっと明るくなる。

「えへへへ」

照れ笑いをしながら紺は再び隣に座る。

二人用のソファだが、真ん中に座らされたので紺とかなり密着している。

いくら紺が人懐っこいとは言え、挨拶代わりに抱き着くか、たまにじゃれて腕を組むくらいの接触だ。

恋人になりすでに深い関係だが今日からまだまだ慣れていないのだ。

だからこう…つまり、照れる。

「明？　どうかしましたか？」

「いや…何でもないよ」

紺はわかっていないのだろう。紺がいかにもエロボディであるかを。というかこのソファ、さっき途中までいたしていたソファだ。ますます意識してしまう。

「そうですか」

にぱーとお気楽に笑って紺はテレビをつけた。ちょうど番組が始まった。

「……」

これは、テレビが終わるまでいるということだろうか。

「……」

指を絡めてきた。

了解した。つまり、イチャイチャしたいらしい。

今更だが、ホントに、照れる。

前世でも恋の一つもなかったし、結婚したらすぐに欲望ぶつけられすぎでこんなほんわかした空気は一つもなかった。

「紺」

「はい！ なんでしょう！」

「ちよつと聞いていいかな」

「へあ？ あ、はい、どうぞ？」

「紺は、どうして僕を選んだの？」

「え？ んー…その言い方は正しくないですよ。だって、気づいた

ら恋に落ちてたんですから。理由や意図があつて、明に恋したんじゃないありませんよ」

「…じゃあ、どこが好きなの？」

「…明は、私を真っ直ぐ見てくれます。あー、と、それに、明はちよー優しくてかつこよくてともかく最高なんですう！」

…驚いた。後半はともかく前半、彼と…前世の旦那と全く同じことを言った。

自分としてはただ普通にしているだけなので、よくわからない理由で好かれているようなもので落ち着かない気分になる。

もっと具体的に、『匂い』や『手の形』とかならわかりやすいのに。ちなみに『顔』はありえないから除外。

「紺、本当に、僕が好き？」

「はい。心から慕い申しておりますです。世界で一番、いえいえ、宇宙で一番好きです」

紺は明るくて、優柔不断でもたまたしているところをいつも引つ張ってくれる。昔から、紺には助けられてばかりだ。そんな紺に好かれて嬉しくないはずがない。

考えたらこんなに可愛い幼なじみがいるのだから、恋をしてなくても告白くらい男からするべきだったか。

「僕は馬鹿だから、恋人に選んだなら君を一生愛するけど後悔しないね」

「んなのバッチコイ、望むところです！」

「…ありがとう。君が僕を好きだと言うなら、僕が言うことは一言だけだよ」

「なんですか？」

「愛してる」

「ああ…っ。コンは、コンは幸せですっ」

「大袈裟だな。これから末永く、よろしくね」

「はいっ」

紺の頭を撫でて改めて恋人宣言をする。

紺か、うん、好きだ。前は流されたけど、今回はちゃんと好きだな。

でも…どうしてだろう。なにか、大事なことを忘れている気がする。

。

「おはよう」

「っーん」

完全なる無視だった。妹殿は一晩くらいじゃ機嫌を直さないようだ。いつもは何があっても一晩でケロリとするのが洋子の長所なのだが、デリケートな問題だ。少し距離を置いたほうがいいだろうか。

「おっはようですーす！」

「あ、おはよう、紺」

家を出るとご機嫌継続中らしくニコニコしてる紺がやってきた。

「ふへへへ」

「? どうしたの?」

隣に並んですぐににやけだした。軽く気持ち悪い。

「いやーんもう、察してくださいよー。コンってばコンってば明と付き合いだしたという事実を噛み締めてるんですからー」

「へえ」

朝からテンション高いなあ。

「…ちよつとなんですかその反応はっ。明も可愛い彼女に会ったんですから今日も可愛いねっくらい言ったらどうなんですか!」

「言わなくても、紺はいつだって可愛いよ」

「…くうう、このすけこましっ」

怒られた。何故だ。

紺は少々顔を赤くしたままちらちらとこっちを見てくる。

なんだろう。

なんとなく気まずい気がして頭をかこうと左手をあげ

「あ…」

「? なに?」

「い、いえいえ、なんでもないでございますことよ!」

あげた手を見ている紺は何やら慌てていて、それでようやく察した。どうやら彼女は手を繋ぎたいらしい。恋人になったのだから手を繋ぐのは基本だと昔に言われたことをすっかり忘れていた。

「紺」

「なーんでーすかあ?」

察しが悪いせいとか些か拗ねた返事をする紺に手をさしだす。

「え？ な、なんですか？」

驚いたような紺に笑いかける。

「手、繋ごう」

紺は真っ赤になってから口の端を吊り上げて、でもにやけてるのを隠したいらしくそっぽを向きながら手を握ってきた。

「ししっ、仕方ないですね。明がどうしてもっていうなら、優しいコンさんは手を繋いでやるのですっ」

「うん、ありがとう」

握りかえして、手を繋いだままおろすと紺はぶんぶんと繋がった手をふりだした。

ご機嫌なのは見え見えだが、たまにやるこのツンデレはなんのポーズなのだろう。可愛いと思っているのだろうか。実際に可愛いが。

にこにこ紺としばらく歩く。10分ほどして、そろそろ学校が近づいてきて通学中の生徒がちらほら見えてきた。
あ、今顔見知りかいた。

「…ねえ紺」

「なんですか？」

「そろそろ手を離し」

「離しませんよっ！ なんでそんなこといいますか!？」

「いや、他の人に見られたら恥ずかしいし」

「ななっ、なに言ってるんですか！　コンと明は付き合い始めなんですからもつといちゃらぶバカップルしていいんですよ！」

「バカップルはちよつと……」

「それに前にも腕組んでたりしてたじゃないですか」

「あの時は付き合ってたし」

付き合つてると、変に意識している自覚はある。あるが、思春期だしこんなものだろう。

「もう、明のへにやチン！」

「へっ……紺、そんなことを大きな声で言わないの。はしないよ」

「知らねーです。あ、それとも、へにやへにやじゃないってえ、今からでも証明してくれるんですかー？　あ、コンはその路地裏でも全然オツケーですから」

「……紺、一気に下品になってるよ」

見た目美少女なのにこの子は……。悲しくなってくる。一線超えたからって一日で明け透けになりすぎだろう。

「ふーんだ。明がいい子ちゃんぶりなんですー。とにかく、手はこのままでいきますからね！」

紺は唇を尖らせながら、繋いだ手をほどかせないようにかぎゅっと握って肩をよせてきた。

この密着は……普通に恥ずかしい。傍から見たらバカップルに見えるのだろうか。

「……しかたないな。そのかわり、下ネタはやめなさい。少なくとも人前じゃ慎むこと。いいね？」

「はい。了解ですーす」

全く。いつからこんな子になったんだか。昔から何気に口は悪かったけれど、少なくとも下ネタは口にしなかった。

「明」

ぐりぐり腕にほお擦りしてきた。紺はよくやるが小動物みたいな姿はいつ見ても微笑ましい。

「全く。敵わないな。二重の意味で。さっきから半立ちだし。上着で隠れてるけど、早くなんとかしないと。男って大変だ。」

○

自称・魔法少女（前書き）

自分のことを魔法少女とか言っちゃう美少女と死んで猫と合体した女子高生の日常系？ 方向性がまだかたまってない。

自称・魔法少女

彼女は自分を説明する時に『どこにでもいる魔法少女にございます』なんて言うが、それは正しくない。

彼女が持つ正式称号は『27代6番魔女』だけだ。『魔法使い』も『ファンキーガール』も『魔女っ娘』も、彼女がふざけているだけでちっとも正しくない、自称だ。あと他にもいくつかの呼び名をもつ彼女だけど、本当の称号は一つだけでそれ以外は単なる他称だ。だけど彼女は正式称号が嫌いで、滅多に口にしない。

「私？ 私は単なるどこにでもいる不思議系美少女よ」

だからほら、また嘘をつく。

「…は？」

聞いた少女は目をぱちくりさせて、それを見た魔女は満足そうににんまり笑う。

こうして新しい物語は幕を開けた。

○

夜、少女 - というには少々發育しすぎ感があるが未成年なので - が道を歩いているとどこからともかく鳴き声がした。

にゃ〜ん、にゃ〜ん

愛らしくも弱々しく繰り返されるその鳴き声を不審に思つて、猫好きなきな少女は鳴き声の方に向かうことにした。

普段通る道から細い、人一人通るのがギリギリの細い道を通り抜けた。

にゃ〜んと鳴く猫が道の真ん中にいた。猫は血まみれで、素人目にも致死性なほどに重症なのは明白だった。

轢き逃げだろうか。猫とはいえなんて惨い。

少女は猫が好きただけでなく、死を悼む心を持っていたので猫の傍にしゃがんでなむなむと拝んだ。

悼む心を持っていたし猫は好きだが、血まみれの猫を持つ勇氣はなかった。

まだ死んでいないが、動物病院がどこにあるか知らないし、連れて行けば学生の手を負えないほどの料金がかかることを知っていたので、少女はせめてもの良心で猫の最後を看取ることにした。

「っ…」

その良心が、少女の死因だった。

キィィィ

少女がヘッドライトに照らされ驚いて立ち上がるも、逃げるという判断をする前に道いっぱい大きなトラックが少女を轢いた。

そこは普段通らない少女は知らないがカーブミラーなく明かりの少

ないカーブで、その上夜になれば人通りが全くなく大通りへの短縮へ使える一方通行で、それを知っている人はついスピードオーバーして通過することが多い道だった。

思わぬ人身事故にパニックになったトラックの運転手は少女の容態も確認せず去ってしまった。

猫と少女の血が混ざりあい、うめき声が重なりあう。

「うーうーうーあ
なーうう…」

しばらくして猫は一足先に昇天したようで声がやんだが、少女はまだ痛みでのたうちまわりながら唸っていた。

「あああああ」

「あら、あらあらまあ、大変」

そんな少女に愛らしい声が呑気な調子でかけられた。

少女は眼球を動かす。血にまみれた世界に少女より幾分年下の少女がうつる。

「ふふ、あなた運がいいわ。私に出会ったもの。これはもう、一生を捧げるしかないわよね」

少女の体は常に痛みに苛まれていて、幼い少女の言葉はなに一つ理解できなかった。

だがにつこり笑った幼い少女の笑顔はとても恐ろしいと思った。まるで玩具を見るような無邪気な笑みを向けられている意味がわからない。

「……………」

幼い少女は早口に、少女が正気でも理解できない言語を口にした。少女は体全体を全方位から圧縮されたような感覚に一瞬だけ気を失い、気づいたら幼い少女と向き合うように地面に座り込んでいた。

「……あれ？」

「ふふ。だーい成功。良かったわね、可愛いお耳と尻尾よ」

耳？ 尻尾？？ 意味がわからず、ぶつかって最も痛かった頭に無意識に手をやり、不可解な手触りに手を離して上を向く。

「！？」

だが頭上にはなにもなくまた少女を向き、耳、という言葉に恐る恐る自分の耳を触ろうとして、あるべき場所に耳がなかった。

かわりに頭の上の方にふさふさした三角のなにかがついていた。三角のなにかには何故か感覚があり、触っているのが自分でわかる。

「…な、なに？ なにこれ？」

「猫耳よ。あなた怪我してたから、横にあつた死体を使つたの」

「……あなた、なに？」

いまだ混乱する少女は呆然としたまま楽しげな幼い少女に尋ねた。幼い少女はくすくす笑って答える。

「私？ 私は単なるどこにでもいる不思議系美少女よ」

「…は？」

理解できなかった。できなかったが、とにかく幼い少女が少女を救

ったのはわかった。『不思議系少女』が不思議なことをしたのだろ
う。

「助けてくれた、のよね？　ありがとう」

「どういたしまして。あなたのお名前は？」

「あ、未緒、さえじまみお 冴島未緒」

「そ。じゃあ未緒、私のことはカレンとでも呼びなさい。可憐な私
に似合いの名前でしょう」

にこにこ笑うカレンに、戸惑いながら未緒は曖昧に笑った。

この日、未緒の世界は変化した。

○

「未緒、私ってばお腹減ったわ」

「はいはい」

一晩たって、未緒とカレンの関係は一応落ち着いた。

混乱している未緒はカレンに促されるまま共に帰宅し、カレンが説
明を受けた。

内容を要約すると通りすがりのカレンは魔法により未緒を助けた。
助けるのに使い魔という契約を一方的にだが結んだので未緒はカレ
ンの世話をする義務が発生した。というものだった。

冷静に考えて魔法なんて…と思った末緒だが摩訶不思議なことが現在進行形なのだから納得するしかない。

姿見で確認したが末緒の頭には三角の黒い猫耳が、スカートを持ち上げてお尻からは白地に茶ぶちのある猫の長い尻尾が生えていた。

現実感は無かったが現実には違いない。世話というのもしきなりな話だが一人暮らしなので特に問題もない上、正体不明の不審者だが命の恩人であるので断るのは憚られた。

なのでなし崩しにカレンは末緒の家に住むことになった。

「うん、結構美味しいわ。合格よ」

「ありがとう」

少し変わってはいるが悪い子ではなさそうだし、年の離れた妹ができたと思っただけで世話をすることにした。

「ところでこの耳と尻尾、なんとかならないの？」

「なんとかかって？」

朝食が終わって学校と友人に休むという旨を伝えてから改めて、末緒はカレンに尋ねた。

きょとんとして要領をえないカレンに末緒は尻尾をぴよこぴよこ振りながら言葉を続ける。

「なんかはなんとかよ。こんな姿じゃ、外に出れないわ」

「似合ってるわよ。魔女っ娘の使い魔といえば黒猫、猫は白地に茶のぶち猫だし諦めてたけど、耳はあなたの髪に合わせて黒になるからよしとするわ。尻尾と耳がちぐはぐなものもこれはこれでありよ」

そんな評価は求めていない。というか魔女っ娘なのか。カレンは自称をころころ変えるので本当は何者なのかわからない。

『魔法』を使うのは確かなようなので『魔法使い』と認識しているが、これははたして正しいのか。

「怪我の治療で猫とくつついたのは仕方ないとして、この耳と尻尾は魔法で消せないの？」

「駄目よ。とつちゃ駄目。あなた死ぬわよ」

「…うーん、じゃあ、見えなくできない？」

「というか、魔法を使わなくてもそれ、体内に収納できるわよ。それで好きにし入れできるはずよ」

「え？ どうやって？」

「さあ。でもできるはずよ。気合いで頑張りなさい」

カレンは楽しそうに言ってからテレビをつけた。朝のニュースが映る。

「昨夜未明、××市××町で正体不明の大量の血痕が見つかりました。見通しが悪い道で前々か…」

「あら、これあなたの血じゃない？」

「えっ、ああっ」

「…血液量から恐らく死亡していると見られますが、死体は見つからず犯人がどこかへ隠し…」

「生きてるのにねえ」

「うわー、なんかややこしくなっちゃってるー。うー」

「ま、放って置きなさいな。轢き逃げ犯はいるわけなのだから」

「そうだけどー」

「それより耳、練習なさい。昼前には買物に行くから」

「え、そんな急に言われても…カレン、カレンってば、どうすればいいのよ」

テレビのチャンネルをまわすカレンは呼びかけを全く無視している。
答える気はないらしい。

仕方ない。未緒は諦めて自分でなんとかすることにした。

とりあえず姿見の前に行く。

耳と尻尾はアンバランスで、ぴくぴくぴこぴこ無意識に動いている。特に尻尾はぱたぱたしてきたので意識して動きをとめてみた。尻尾の制御はそう難しくない。お尻のあたりから神経がのびているようで、何となくわかる。意識して左右に振ったり真っ直ぐに伸ばしたりできた。

しかし耳だが、耳は少し難しい。そう動く部位でもないからか、難しい。

うむむ。

鏡と睨みっこしながら耳を見るが耳はぴく、ぴくぴくつと気持ちに連動してか震えている。

……。

確かに、自分でいうのも何だが、わりと猫耳が似合っている。漫画みたいに巨大な耳ではなく前の人間耳とサイズはそうかわらない。手を曲げて三角をつくって頭にあてるとちょうど収まるような大きさだ。

そういえば、その人間耳があったところはどうなっているのか。髪をどかすと、耳のあったところはつるりとした肌になっていた。髪の生え際はかわっていないので耳が綺麗にとれて頬が延長されたような感じた。

こちらは肩まである自前の髪で隠れているので特に問題はないだろう。

う。耳を隠して尻尾を押さえてしまえばこのままでも大丈夫だろうか。

「…にゃあ」

手を丸く握って首を傾げてポーズ。うーん。可愛いかも知れない。

「…未緒、あなた前向きなのはいいけどナルシストなのはやめた方がいいわよ」

「！」

わ、忘れてた！ カレンはすぐ背後にいたのだ。

未緒は慌ててあわあわと何かを言おうとするが言い訳になるし赤面がとまらない。

「あなたってそこそ可愛いけど、自分で可愛いでしよって言うのが許されるほどの美少女じゃないからね」

「うぐぐ…」

は、恥ずかしい…。そしてカレンが自分で言っただけ許されるレベルの美少女なのがまた、悔しい。

カレンは白髪緑目の白人少女で、中学生くらいに見えるが外人なので正確な年齢はわからない。白人少女のモデルを見ると可愛い子が多いと思うのは単に人種の違いからなのかはわからないが、とにかく可愛い。そしてカレンはそこいらの雑誌に載っていて違和感がないほど愛らしいあどけない可愛い顔をしている。

ここまで言えばわかるだろうか。カレンは典型的な白人美少女だ。じっと見てため息がでそうなレベルで、私って美少女でしょとぶりっ子して言っても許してしまう見ただけで蕩けるような美少女だ。白髪なのは少し変わっている気もするが、大きな黒のリボンから始

まるゴシック調のふりふりドレスがよく似合っている。

最も、今いるのは畳の茶の間なのでアンバランスなことこの上ないが。

カレンが見目好い少女だからこそ、こうして住むことを許可した面は勿論ある。いくら命の恩人でも、一人暮らしのところに男性を招くほど末緒は非常識ではない。

カレンは恥ずかしがる末緒に少し呆れたようにしながらも問い掛ける。

「で？ 隠せるようになった？」

「…もういいわ。帽子とかで隠すから」

末緒は帽子を被り、少し痛い。耳を指で倒しながら帽子を被り直す。シャツにジャージズボンとラフな格好だったが、軽い外出用に居間のハンガーにかけてあるパーカーとジーパンを身につけ準備完了だ。他に制服とコートがかかっていてその隣に今履いていたジャージをかけた。

末緒はカレンを振り向いてさて、と声をかける。

「買物でしょ。行きましょう」

「いいけど…いくら女同士でも恥じらいなさいよ」

「……あ」

そういえば、カレンの目の前でパンツまで曝してしまった。普段一人なので気がねなく着替えていたが、これからはこの服は自室にひっこめるべきだろうか。

「……ま、いいじゃない。見られて減るものじゃないし」

「あなたがいいならいいけどね。こちらとしても、見ていて嬉しい

ものだし」

「えっ!？」

「ああ、こっちの話だから気にしないで」

「……」

やっぱりここではもう着替えないようにしよう、と未緒は心に誓った。

「さ、行きましょう。財布は持った？」

立ち上がりながら言うカレンの言葉に未緒は頷きながら鞆をとり、玄関へ向かった。

○

願いを叶える三つの条件（前書き）

異世界最強TS?物。

願いを叶える二つの条件

「私の声が聞こえますか？」

「ちっ…」

今何時だと思つてゐるんだ。就寝しようとして布団に入つてきた瞬間に聞こえてきた念話に舌打ちする。

無視だ無視。

『お願いです。聞こえているなら返事をして下さい』

こんな時間だ。緊急事態なのだろう。

「ただ私のコードを知っているのは限られた人だけだ。でもこの念話元のコードは私が知らないものだ。だから無視。」

『私の声が聞こえますか？　お願いします。聞こえているなら返事をして下さい』

■
 ■
 ■
 ■
 ■
 L

念話を叩き返して起き上がり、発信元のコードを頼りに遠見をする。

「んん？」

いつもなら脳裏に鮮やかに浮かび上がる映像が何やらノイズがかつている。

眠いからだろうか？ 普段なら制御5の影響下でも月くらいの距離ならハッキリ見えるのに。まさか宇宙人ということはないだろう。私に念話をしていたのは真ん中の髪の毛の長い人だが、その人の回りをたくさん人間が囲んでいる。声からもわかるその女はドレスみたいな服だが、回りは古臭いローブを着ていて性別が解らない。というか今時ローブとか。2世紀くらい間違っている。魔法を使うのに服装が関係ないなんて誰だって知っているのに。

「き、聞こえますか？」

「聞こえてる。夜中にうるさい。明日にして」

「待つ - 』

返事の前に部屋に遮断をかける。当然静かになった。まさか外壁の念話遮断を抜けてくるとは予想外だったけど私の遮断には抗えないらしい。当たり前だけど。伊達に最終兵器してないし。

返事する前にさっさとこうすればよかった。さーて、寝よう。

○

「むにゃ…んーん。…くああ」

欠伸をして伸びをしながら起き上がる。

今は…8時か。

時計をちらつと見てからベッドサイドテーブルにあるベルを手を伸ばして鳴らす。

ちりんちりと音がして、いつも通りすぐに私の世話人の愛が…
…来ない。

「？ あーいー」

返事もない。不審に思いながらドアの向こうを透視する。

「……？」

何か、あれー？ ドアの向こう、外だ。いや、部屋の外じゃなくてね。海の底でもなくてね。

大地…なんですけど。しかも人がいっぱい…あ、こいつら、昨夜の煩い人間じゃん。

何か疲れてるけど。

いきなり出るのは危険だし、とりあえず念話を…あ、昨日切ってたな。念話遮断だけ解除、と。

『お願いです。返事をしてください』

『おはよう』

『！ おはようございます！』

『もしかして今まで話かけてたの？ 馬鹿？ 寝てたっつの』

『……』

『で？ 何の用？ 勝手に転移させられてるみたいだけど』

『あ、はい。助けてください』

えーっと、つまり彼女の説明を要約すると、世界征服を企む魔王を倒すため異世界から倒せるくらい強い人（私）を喚んだ。

RPGかよ。ふざけんな。殺すぞ。こっちの都合も考えるよ。

てゆーかさあ、私元の世界では最終兵器とか呼ばれて生まれた時から隔離されてただけだね。待遇はよかったし満足してたんだよ？ 魔法が使えないように私の部屋って障壁がかけられてたけど、ぶっちゃけ私には意味ないから外の世界眺めてれば暇にはならなかったし。お願いされて国を滅ぼしたり助けたりするのも神様気分だったしね。てゆーか半ば神様だと思ってるしね。突然変異で生まれたらしくて私しかいないから本当、待遇はマジよかったんだよ。なのにいきなりこんなローブ着てるみたいな時代遅れな世界に連れてこられるとかなんなの。

と、思ったけど、まあいいか。

別にあそこじゃなきゃいけない理由もないし、帰りたくなったら帰ればいいか。異世界だろうと一度渡った以上理屈はわかったし多分転移は可能だ。

『今から行くから待ってる』

『わかりました』

とりあえず出て話を…と、女の姿だと舐められるかな。故郷でもあったが、強い手駒が欲しいからと無理矢理子孫作ろうとして相手を宛がわれる可能性はある。

子孫を増やす気はさらさらない。男になっておくか。ついでに年齢も少しあげて、と。

鏡で確認。うーん。私の顔をベースにしたせいで男になっても若干女顔っぽいな。身長と体型から女には見えないけど、25くらいにしたつもりなのに20に見える。

……まあ、最近はこういう中性的な顔流行ってるし？ 故郷でだけど。これでいいか。

服は…男物なんて持ってないから、体に合わせてスーツを作るか。確か…ボタンの数が多いんだっけ？ ややこしい。シャツとズボンだけでいいか。

「…んん、あー」

体に合わせて声も変わってる。こんなものか。

「よし」

行くか。あ、あと口調も男っぽくしないとなー。

○

ガチャ、と音がして四角い固まりに付いているドアが開いた。

宮廷魔導師全員の力を持つてしても勇者様に転移をかけることは敵わなかったたので、より力が必要で皆、魔力は空になったが何とか空間転移により勇者様を召喚することができた。

なのに出てきたのは白く四角い固まりで、ドアは有るが開かず、呼びかけても答えない。

それでも諦めずに呼びかけ続けること8時間。ようやく返事が頂けたかと思えば寝ていた、とのこと。泣きそうだ。

しかしこれで5年をかけた苦労はようやく報われる。もう魔王に怯える日々は終わるのだ。

「う、眩しい…」

勇者様、は…思っていたのとは少し違った。

魔王を倒す力を持つ方というのだから、こう…大きくて厳つい方を想像していたけれど、どこにでもいそうな青年だった。多少見えてくれはいいが、幼げな顔つきで頼りなくさえ見えた。

「し、失礼しましたつ。私はわたくしディオール国第3姫ティアナ・ライクシア・ディオールと申します」

一瞬呆気にとられて礼を欠いてしまった。私は慌てて頭を下げた。それにつられるように周りの魔導師も頭を下げる。

「いや、頭を上げる。拉致同然で不快だが、この俺様を選んだ目のつけどころはいい。居丈高に命令せずに責任者らしきお前が頭を下げたことに免じて許す」

ほっ、と息をつく。

見た目は普通だが、少し意識をすれば彼の魔力が馬鹿げたほどの量であることはわかる。何せ完全に垂れ流している。これだけの魔力を流しても涼しい顔をしているのだ。確実に宮廷魔導師の誰よりも強い。いや、比べものにもならない。

敵意のない魔力だが、意識してしまえばあまりに圧倒的なその量に息がつまりそうだ。

「ん？ ああ、魔力に圧されてるのか。これでいいか？」

す、と魔力がひっこんだ。私の顔色から察したのだろう。息をつく。

「…お気遣い、ありがとうございます」

「いいや、構わない。では、交渉を始めようか」

「こ、交渉、ですか？」

「何だ？ もしかしてタダで魔王を殺してもらえると思ったのか？

おいおい、そりゃ甘いな。いいか？ 俺様つてば魔王より強いんだぞ？ 俺様が世界征服をしたって構わんのだ」

「お、お待ちくださいっ。もちろん何の報酬もないわけではありませんっ」

おかしい。何だこの流れは。だいたい、何故私と会話をしているのに普通なのだ。私はさっきからずっと、彼に魅了の魔法をかけているのに。相手が相手だけに常人なら発狂するほどの強さで私に惹かれるはずなのに、そうでなくとも私はこの国一の美人であるというのに、どうして私に惚れない。

「ん？ ああ…お前、造りはよくある程度の美人なのにやたら可愛く見えると思ったら魅了かけてたのか」

「な…わ、私の心を、読んでおられるのですか？」

「自意識過剰だぞ。魔法に関して俺様より上手をとれると思っているのか？」

「…失礼しました。お疑いしたことを心より謝罪致します」

彼の力なら恐らく気づかれずに心を読めるだろうし、何よりあまり

にタイミングのよい言葉なので疑ったが、どうやら違ったようだ。

「構わない。俺様は鋭いからな、そう疑われるのはよくあることだ」

ほ。助かった。魅了が効かない以上、誠実に対応して協力していた
だかなくては。

本来なら私に惚れるので私と婚姻し王様になって頂くのが十分な報酬
なのだが、今で私の印象は悪くなったはずだ。何とか気にいら
れなければ。彼の政治能力は知らないが魔王を倒した勇者様を王に
据えるのはこの国の発言力に繋がるので、ぜひ王様になっていた
きたいのだ。

「では報酬ですが」

「そうだな。定番に、三つほど願いを叶えてもらおうか。お前らは
俺様の命令を三つ聞く。その代わりに俺様は世界を救ってやる。悪
い取引ではないだろう?」

「…しよ、少々お待ちください」

な、何だこの展開は。まさかこんな話になるなんて。三つって何?
…どんな願いなのか全くわからない。

「…とりあえず、父に…王と謁見し決めていただくと言っ形でよろ
しいでしょうか? 私の一存で決めることはできません」

混乱して、私はとりあえず父に丸投げすることにした。

○

お姫様は見た目はふんわりした美少女でテレビに出てもおかしくはない程度に可愛かったけど、どうも中身は腹黒いようだ。

考えたら愛以外と会話したのは始めてなのでテンションがあがってしまつて危うく心を読んでいるとバレるところだったが何とかごまかした。

どうも俺様、もとい私と結婚したいみたいだし男になった記念で抱いてあげてもいいかな、とか思いつつ私は王様に会うことにした。

「あんたが王様？」

「貴様つ、無礼だぞ」

王様に話し掛けたら回りの兵士に一斉に刃を向けられた。

「どつちが？」

格好つけて指ばっちんして同時に刃を全部砕けさせた。本当は指ばっちんとか必要ないけどね。なんとなく。せつかく男なんでキャラチェンジ、みたいな。

どよっ、てな感じにざわつく。もしかして今の私、格好よくない？

「静まれい」

王様の一言で静かになった。カッケー。

「勇者殿、まずは召喚に応えてくれたことを感謝する。ワシはこの

国の国王、エルスムス・ライクシア・デオールだ」

「どうも」

「そなたの名は？」

「そういえば言っ てなかったか。俺様の名前は未来だ」

「ミライ、変わった名だな」

「それより王様、条件だけど、呑んでくれるの？」

「3つの望みを叶えるということだったな。だが、どんなことでも、とは誓えぬ」

「無茶な願いはしないさ。そうだな、じゃあ先に二つは言っ ておこ
う。家と金。毎日遊んでくらせるだけの金と、そこそこ広い家をも
れ」

「…そんなことでいいのか？」

「面倒なことは嫌いだね。だいたい、殆どのは自力でなんとか
なる」

「……ワシの娘だが、魔王を倒したあかつきにはあやつをお主の嫁
にやり、王の位をやるつもりだった。そうなれば城がお主の家で、
金も多く手に入るぞ」

「は？ ああ…性格悪そうだし却下。だいたい俺、金髪っ て好きじ
やないんだよな」

「そ…そうか。…なら、長女はどうだ？ 少しばかり…容姿ではテ
ィアナに劣るが、髪はワシに似て青だ」
「え…」

王様の向こうにティアナも含め並んでいた4人の女から驚きの声があがる。多分、あれが妻と娘か。あの金髪は三女っ て言っ てたしち
ようどだ。金髪の中に一人青髪だ。

「お、お父様？ 冗談でしょう？ お姉様なんて…」

「ティアナ、口を慎みなさい」

「……」

「ステイー、来なさい」
「は、はい」

青髪の女が私の前までやってきた。年は20前半か。目は細くそばかすがあつて鼻が低い。腹黒姫と比べればブスと言えるが、単品では悪くない。何より青い長い髪はなかなか綺麗だ。

「ふうん？ どうしても関わりを持ちたいなら、いいぞ。こいつを嫁にしよう。ただ願ひには入らないが」

「構わない。お主の察する通り、魔王を倒すほどの力があるならば身内にしたいのだ」

「正直なやつは好きだ。あとの一つも国をよこせとか非常識なものじゃない。条件を呑むな？」

「ああ。こちらからお願いしたいくらいだ」

「ああ。交渉成立だ。ステイー、だな。よろしく」

「あ、は、はい。こちらこそ、よろしくお願いします…ミライ様」

驚きでほうけていたステイーだが、何か喜んで頬を染めた。うん、中々可愛い。何より、スタイルはかなりいいし。あの姫は細すぎ。見た目だけでも胸があつてほどほど肉付きのいいステイーの方が普通にいい。だというのに何やら腹黒は凄く不満を心で並べ立てている。うざいからあいつのはもう読まないでおこう。

ステイーは突然で驚いてるけど私の容姿が好みな上、モテない私なんか選ばれて嬉しいとちょっと過剰なほど喜んでる。どうもここでは20越えて独り身なのは嫁ぎ遅れらしい。

「じゃあ、魔王倒してくる。家用意しとけよー」

この星で私の次に魔力が強い生き物の元に転移。
5メートルくらいの服きた蜥蜴がいた。

「！？ 何者だっ！？」

「あ、お前が魔王？」

「そうだ。貴様、どこから…」

「とりあえず死んで」

「ぐ、ぐああああっ！！ っ…貴様っ」

体バラバラに切り刻んだのにまだ生きてる。しぶといな。そうだ、証拠にこの頭持って行こう。というわけで体は燃やしておく。灰も残らない火力にした。万が一にも回復しないように頭に固定の魔法をかける。

ついでに回りにいた魔物を脅して部下の魔物に人間を襲わないよう命令させてから全部殺して、仕上げに魔王の住家である城っぽいのをぶっこわした。

よし、オッケー。

転移で戻る。

「ただいま、魔王殺してきたぞ」

「なっ！？ もう、か？」

「はい、証拠」

「くっ…貴様、この屈辱は忘れんぞ！ ワシは死んでもまた別の場所にて生き返る！ その時は貴様を真っ先に殺すからな！！」

「あ、そうなんだ。じゃあ殺さないでおく」

「…なに？」

「植物と融合させて死なないようにして、元の体に戻らないように固定して鉢植えに生めて、話す置物にしよう。ステイー、何の花がいい？」

「あ、えと…私、薔薇が好き…です」

「そう。じゃあ薔薇とくつつけよう。口煩いかも知れないけど手も足もない安全な代物だから、ステイーがちゃんと世話するんだぞ」

「はい、わかりました」

「で、王様、家は？」

「…どうやら、本当のようだな。確認したが魔王者の城も見えなくなっている。まさかこれほどに強いとは…」

「まあそういう訳だ。待遇さえいいならテキトーにこの国守ったり他国滅ぼすくらいならお願いを聞いてやるし、俺様を召喚できてちよーラッキーだな」

「うむ…本当にそうだ。ハッキリ言えばお主の力は恐ろしいが、ステイーを気にいつてくれたようだし、味方ならばこれほど頼もしいものはない。すぐに用意をさせる。しばらくは隣の部屋で待っていてくれ」

「わかった。ステイー、おいで」

「あ、は、はい」

「待ちなさい、ステイー。すまないがミライ殿、ステイーを嫁がせる準備がまだなので慌ただしいが今から準備をする。一週間後に執り行つのでそれまでは一人で家にいてもらうことになるが構わないかね」

「一週間も？」

「無茶を言わないでくれ。ティアナとの婚姻だとしても、これから魔王を倒す旅に出て数年後の予定だったんだ。用意は何もできていない」

「仕方ないな。わかったよ」

ステイーと別れ、兵の一人に案内されるまま隣の客間？に通される。謁見の間もただ無駄に豪華だな。

「よっ」

ベッドに寝転がる。私の部屋は質素だった物がいいものだったので、ふかふかなだけで微妙だ。

そういえば、ベッドもこっちに来ていたな。様子を見てみよう。

遠見を使う。部屋は私が出たきり回りに兵がいて誰も入らないように見張っているっぽい。あとで家に運ぼう。

ついでのステイたちの様子を……ふむ、何やら王様がステイを褒めてるな。根暗な顔と性格の娘で期待してなかったがよくやったと言ってる。超失礼だな。まあ確かに？ 眉とか常にハの字だしたれ目で気弱で陰気っぽいしトロそうだけどね。自分の娘だろ失礼がないようにとか言い含めてお前のお陰で我が国は安泰だとか……いや、私のお陰だろ。あ、ティアナがキレた。呼んだのは自分と
か言い出した。

面倒だしもう見るの止めよう。

「ミライ様、よろしいですか？」

「どーぞ」

「用意ができました。ここから馬車で10分ほどの静観な場所の邸宅なのできつとお目になうかと」

「お、早いね」

「建物はすでにご用意してありましたので。使用人の選別と生活用品の移動に時間を頂いております」

「そ、じゃあせっかくだし、馬車に乗ろう。用意してあるよな？」

「はい。案内いたします」

○

魔法使いの弟子たち（前書き）

魔法チートのロリハーレムもの。

魔法使いの弟子たち

小さい頃、俺は正義の味方に憧れていた。妹を引き連れて近くの森を冒険し、ただ毎日が楽しかった。子供のころは立場なんか関係なく、友達がたくさんいた。

正義の味方になるのを諦めたのはいつだろう。妹に剣で負けた時？ それともあの生意気ないけ好かない女に馬鹿にされた時？ …忘れちゃった。

幸いにも魔法の才能はあったから、落ちこぼれにはならなかったが、剣の才能はイマイチで昔憧れた騎士への道は諦めざるを得なかった。だけど妹には才能があって、女だが騎士科に入学して一番の成績だ。それもまた、騎士を諦める要因の一つではある。

といっても妹は妹で、可愛い妹だ。俺もいい加減騎士をふっきって魔法使いとして大成しようと思っている。

うちの家系は実力者が多く、俺はその血筋をひいて歴代でも上位に入るくらいには魔力があるから、頑張ればなんとかなるだろう。

さて、何故俺が突然昔の夢をほじくり返したか。それは、騎士をやめようが魔法を研究しようが、俺の夢は残っていると気づいたからだ。

どうしても許せなかった。目の前で起きていることに我慢ならなかった。

だから認めよう。

俺は今だって、正義の味方になりたいんだって。

「おいやめろ」

「あ？ …… な、何の用だよ」

振り向いた先輩らは俺の姿を見てやや動揺したのか声を上擦らせた。

「やめろ、と言っている。お前は耳が聞こえないのか？」

「き、貴様…姫様のお気に入りだからといって調子に乗るな。3年の分際で」

姫は関係ない。というかあのじゃじゃ馬姫はやたら俺を敵視してくる。だがどうやらこの先輩はそう勘違いしてるらしい。それならそれで好都合だ。

「なら先輩、俺と勝負するか？俺はただ目障りでガキみたいなイジメをやめると言ってるだけだ」

「……ちつ、行くぞ」

ほつ。なんとかなったか。

自分で言うのもあるが俺はそこそ魔法ができる。一応首席だ。だが2年年上の5人を一度に相手するのはさすがに自信がない。戦い自体に経験はあるが、いずれも非魔法使いばかりだ。魔法使いとは訓練でしかやりあったことがない。

俺は先輩たちが立ち去ったのを横目に、イジメられていた女の子に近寄り膝をついた。

「…大丈夫か？」

「……」

「ちよっとじつとしてな」

俺はそつと手をかざして、女の子に回復魔法をかけた。

一瞬びくついて身を固くした女の子だが、回復魔法に気づいたのか顔をあげた。

「治したけど、まだ痛いところあるか？」

「……助けて、くれたの？」

質問に対して検討違いな言葉だった。けどとても笑えない。新人生だろう小さな彼女はもう二ヶ月もイジメを受けていた可能性がある。その間に人間不信になっていたかも知れない。

「ああ。遅くなってごめんな。もう大丈夫だぞ」

頭を撫でてやる。女の子にはかなり短いベリーショートの中の髪をくしゃくしゃっとする。

「……あ、ありがとうございます」

驚いた表情になったまま固まって礼を言う女の子に苦笑する。
あさ黒い肌の小さな女の子。頭には小さな角が生えていることに今更気づき、女の子がイジメられていた理由を察した。

そっぴや、今年から混じり者の入学が始まったんだっとな。

数が少ないがこの世界には人間以外にも鬼や天狗、猫又と呼ばれる人間と魔人の混じり者が存在する。

魔人というのは人間ではないが人型で会話ができる、人間とは違う人種だ。多分昔は彼らのことを魔族と言ったんだろうが、数が極端に少なく、人間と関わろうとせず魔人独自のコミュニティーを持っているので今は敵対していない。

しかし人間より強く、あまりに異なる容姿から魔人を忌避する人

は少ない。

魔人と人間の血をもつ混じり者というのはそれなりにいる。魔人の血は濃いらしく、5代くらい人間としか婚姻していなくても混じり者として生まれるのだ。

混じり者は魔人ほど強くないがやはり魔人の特徴を少なからず受け継いでいる。混じり者の多くは人間社会で生きているが嫌われている。

とはいえ数が増えてきているのにあわせ迫害も徐々に緩和されてはいて、現に今年から彼女のような混じり者にも教育が施されるようになったのだ。

しかし、そのように差別撤廃する国の動きがあっても人々の意識は変わらない。

彼女は恐らく差別としてイジメを受けていたのだろう。腹のたつ話だ。俺はただ女の子を集団で男が囲ってイジメていたから助けただけだが、このままではまた同じような迫害主義者からイジメを受けかねない。

さて、どうしたものか。

「で、体は大丈夫なのか？」

「は、はい。体は丈夫なんです」

「そうか。角からして鬼だしな」

「あ、は…はい」

「可愛い角だな。ちょっと触るぞ」

「え？」

返事は待たずに女の子のおでこにある、2cmほどの小さな可愛い角を人差し指でつつく。固いが、爪みたいな固さはなく皮膚の感触だ。

人差し指と親指でつまんでみたり撫でてみたりする。

おでこは普通だし、頭蓋骨に角があつて皮膚が突き出てるだけっぽいな。皮膚に余裕があるからちよつと回るし、芯というか骨をつかむようにすると先に皮膚が動く。

ちよつと面白い。混じり者が身近にいないから、興味がある。

「あ、あの…恐くないんですか？」

「ん？ 馬鹿言うな、お前より俺の方が強いのに、何でガキにびびらなきゃなんねーんだ」

「えつと、でも、人間さんは私たちのこと嫌うものだと思つてました」

「そう馬鹿もいるけどな。気にすんな。お前、結構可愛いから嫉まれてんだよ」

「可愛いなんて…そんな…」

お、照れた。ごまかすのにテキストに言つたのに、やっぱりガキはガキだな。単純だ。ふむ…鬼か。よし、イジメられてんを見て見ぬふりもできねーし仕方ないか。一年なら教育次第だしな。

「俺はアランだ。お前、名前は？」

「わ、私、オーム・ブライドです」

「じゃあオーム、俺の弟子になるか？」

「え、え？」

この学園では条件をクリアすれば様々な恩恵が与えられる。俺は春から条件を満たして研究室を得た。研究をする手伝いとして研究員にならないか、と俺は誘つたのだ。

研究員になれば持ち主、この場合俺から少ないが給金がでる。さらに俺が監督責任者となる。研究のためと申請すれば全ての授業にでなくてもよいし、研究員は研究者にとって仲間であり、研究者の下についた弟子のようなものだ。庇護するのが義務だから大手をふ

って庇えるというものだ。

「悪いようにはしねーよ。ちょっとこき使っが、馬鹿なやつらにちよっかいかけられるよりマシだろ」

手を離してからそんな感じの説明をすると、オームは恐る恐ると言っただけに俺の様子を伺った。なんだ？

「どうして…私を助けようとしてくれるんですか？」

そんなことが気になってるのか？ 馬鹿なやつだ。

俺は立ち上がった、オームに手向けながら答えてやる。

「困ってるやつ助けんのに、理由はいらねーだろ？」

本心だがこの台詞はちょっと恥ずかしい。ごまかすために馬鹿みたいに口を開けたまま座りこんでるオームを無理矢理引っ張って立たせた。

「ぼさつとしてんな。行くぞ、弟子一号」

「は、はいっ、師匠！」

歩きだしながら言っとオームは俺の後に続きながら、俺を師匠と呼んだ。

ま…悪くない。

お母さんは私が嫌いだ。

それは当然のことだと思う。恐ろしい魔人に犯され、人ならぬ子を産まされた。それはまだ成人していなかったお母さんを狂わせるには十分なことだ。

私はいつも家ではみんなから疎まれていたけど、仕方ないことだ。私は一人娘を壊した魔人の血をひき、常にそのことをいやがおうにも思い出させる。

殺されないだけマシなのだ。まして学園にいれるお金も出してくれた。独り立ちさせてできるだけ関わりたくないからとか、だからって何もせず放り出すのは外聞が悪いからとか、理由はいくつかる。それは知ってる。

混ざり者の中でも私は恵まれている方だ。私が差別されるのは仕方ない。愛されないのは仕方ない。だって私の存在自体が罪なのだから。

それでも…悔しかった。淋しかった。悲しかった。惨めだった。存在が許されないならいつそ殺してくれればいいのにと、いつも思っていた。

残飯を与えられ、物置に押し込められ、目が合えば罵られ、ぶたれ、何もしていなくても罰を与えられた。

食料が少なくても、固い金属で殴られても、冬に湖に沈められても、鬼の私は頑丈で死なない。死ねない。

知識と衣服など外に出しても恥ずかしくないように最低限は与えられた。でもそれだけだった。

学園に行けば少しは変わるかと期待した。だけど、やっぱり私は差別された。迫害された。石を投げられ水をかけられ教科書はぐちゃぐちゃにされ、笑われた。

他に混ざり者を見かけたけど、彼らと傷をなめあいたいとは思わなかった。よりどちらが不幸でないか競い合うことになるのは何となくわかっていた。

学園では少なくとも食料は満足にとれる。卒業すれば職に就けるかも知れない。それが私の唯一の慰めだった。

丈夫な私は人間にとってストレス発散するのにちょうどいいらしく、私は特に暴力を振るわれるようになった。

ある日、いつものように突き飛ばされ、囲まれて蹴られた。

いくら私が丈夫でも、痛いものは痛い。地面に押し付けるように踏まれて、うめき声がでる。

目を閉じて頭を抱えて丸まる。

どうしてこんな目にあわなきゃいけないんだ。人間なんて、私が本気で殴れば頭がふつとぶくらしいに弱いくせに。

そうしようか、とふいに欲望が顔をもたげる。でも人間は数が多い。例え一人や二人殺せても、私も殺されてしまふ。わかってる。

だからこうして我慢するしかない。わかってるけど、悔しい。惨めったらしく、生きたがって誇りもなく弱いやつらに足蹴にされて、死にたいくらいだ。

私が人間じゃないのは私のせいじゃない。私だって人間に生まれなかった。弱くてもいいから人間に生まれて、愛されたかった。仕方ない、仕方ないことなのに、いつまでも諦められない。

誰か助けて。

いつもいつもいつも、無駄だとわかってるのに、私の心は助けを

求める。

誰か誰か誰か、助け -

「おい、やめろ」

……え？

嘘だ。私にはではない。そう思ったのに、私なその声に目を開けた。私を囲う先輩らの後ろに、男の人がいた。黒い髪で男性にしては髪がかなり長いから、魔法科に違いない。

驚くべきことにその人が何かを言うと、先輩らは立ち去った。その人をじっと見つめていると私に近寄った。

何をするのだろう。また殴られるのだろうか。いや、そうに違いない。私を助けるなんてあるはずない。期待しただけ絶望するに決まってる。

彼は膝をついて、みんなが私に見せる怒った顔でもにやにやした顔でもない、心配そうな顔をした。

「……大丈夫か？」

……信じられない。こんな優しい顔を向けられる日がくるなんて、信じられない。これは夢だ。

「ちょっとじっとしてな」

彼はそう言って手をあげる。

殴られる！そう思って反射的に俯いて身をちこませると、私の体が柔らかい光で一瞬つつまれた。わずかにあったかすり傷や、鈍

い痛みが消えた。

それに気づいて顔をあげると、男の人はそっと微笑んだ。

「治したけど、まだ痛いところあるか？」

「……助けて、くれたの？」

「ああ。遅くなってごめんな。もう大丈夫だぞ」

思わず質問を無視してしまったのに、男の人は怒るところか、笑って私の頭を撫でた。

「……あ、ありがとう、ございます」

何とかお礼を言う。何だか体が痺れてしまったみたいだ。嘸みたいに、気持ちがふわふわしてる。なにこれ。この感じ、なに？

「で、体は大丈夫なのか？」

「は、はい。体は丈夫なんです」

「そうか。角からして鬼だしな」

「あ、は……はい」

「可愛い角だな。ちょっと触るぞ」

「え？」

可愛い、という言われたことのない言葉に驚いていると彼は何でもないみたいに無造作に私の角に触れた。

その瞬間、痺れるような感覚が体中を駆け巡った。それはとても恐ろしく、でもとても心地好いものだった。ずっとこうして欲しいと思った。

でも同時に不安だった。こんなに優しく、まるで人間みたいに扱わ

れて、どうしてなのかわからない。

「あ、あの…恐くないんですか？」

「ん？ 馬鹿言うな、お前より俺の方が強いのに、何でガキにびびらなきゃなんねーんだ」

「えっと、でも、人間さんは私たちのこと嫌うものだと思ってました」

「そう馬鹿もいるけどな。気にすんな。お前、結構可愛いから嫉まれてんだよ」

「可愛いなんて…そんな…」

褒められてどうしようもなくドキドキと胸が高鳴った。

彼は私を差別しない。私を傷つけないとはつきりわかって泣きたいくらい嬉しくなった。

この人だと思った。何がこの人なのかはわからない。でも私の本能がこの人だ、この人こそ私が求める人なのだと告げていた。

「俺はアランだ。お前、名前は？」

「わ、私、オーム・ブライドです」

「じゃあオーム、俺の弟子になるか？」

「え、え？」

意味がわからず混乱する私に、アランさんは丁寧に説明してくれた。

研究とか細かいことはよくわからないけれど弟子になれば、私を助けてくれると言う。私を仲間にしてくれると、言ってる。そうを理解した瞬間、体が熱くなった。

「悪いようにはしねーよ。ちょっとこき使っが、馬鹿なやつらにち

よっかいかけられるよりマシだろ」

でも、それでも、即答はできない。

私は鬼なのに。人間じゃないのに。優しくしてくれるなんて、やっぱり変だ。おかしい。

「どうして…私を助けようとしてくれるんですか？」

思い切って、勇気をだして聞いてみた。

アランさんは立ち上がって、私に手を向けて笑った。

「困ってるやつ助けんのに、理由はいらねーだろ？」

意味が一瞬わからなかった。理由はいらない？ 困ってるから？

……私が、困ってるから？ じゃあこれからも、困ってたら、助けてくれるの？

アランさんは私の手をひくと引っ張った。立たせられると、思ったよりずっと、アランさんは大きかった。

「ぼさつとしてんな。行くぞ、弟子一号」

「は、はいっ」

背を向けて、歩きだしながらかわれて私は慌てて後をついて行く。ついてくるのが当たり前みたいな、そんな態度が、何故かとても頼もしくて、私の口からは勝手に言葉が出ていた。

「師匠！」

それに師匠はにっと笑う。

泣いて変な子だと思われたくないから必死で涙はこらえて、私は、
多分生まれて初めて、笑った。

○

モモと呼ばれた黒猫（前書き）

昔はやってた学園魔法もの。吸血鬼主人公で日常系ハーレム？

モモと呼ばれた黒猫

黒猫は時計を見ていた。

カチーぽーん…ぽーん

壁にかけてあった時計が音をたてると同時に黒猫はぱちりと金の瞳を瞬きして、すいと立ち上がり歩きだす。

かちかちー

木の床が爪とぶつかり軽い音を立てる。

そしてこんもりした山がやんわりと上下するベットに一息で跳び上がる。

ぼすっー

「起きてくださーい」

黒猫は声をあげながら、眠る少女に体当たりするようにして揺さぶる。

「ん、んん…」

「夜ですよー」

黒猫はさらに強く少女を揺さぶる。しかし悲しいかな、体格差からどんなに黒猫が頑張ったところで、少女を一瞬に深い眠りから生還させることはないのだ。

「んー…」

「もう…先生、起きてくださいよお」

「う……………モモか」

金の長い髪を寝癖でボサボサにした10代半ばに見える少女は、唸るようにして黒猫の名前を口にする。

「いい加減、ささっと起きてくださいってば」

「んーうん、んー…」

「…先生？」

「…モモ、お前相変わらず可愛いなあ」

「ありがとうございます。もう人型に戻ってもいいですか？」

「んー…もうちょっと」

少女は目を眠そうに細めたまま黒猫——モモを抱きしめる。

「うにゃあ…くすぐつたいですよお」

言いながらもモモは猫なのに分かりやすく顔をゆるめた。

「可愛いなあ、モモ可愛い」

「にゃああゝ。にゃあ、先生え、もう起きようよお」

モモは少女が好きなので可愛がられるのも勿論好きだが、しかしいつまでもゴロゴロしているわけにもいかない。

「んー…ん、起きた。もういいぞ」

「はいはい」

モモは尻尾をぴんとたて、頭の中でスイッチをいれかえる。

するとぽんつと軽い音をたててモモは20歳ほどの青年になった。
ただ一つだけ人間と違う箇所は、モモの頭には猫の時と同じように
サイズこそ違えど三角の猫耳が生えている。

モモは6歳の時に少女に拾われた。しかしあの頃と違って今では少
女よりずいぶん大きくなった。

「うむ、その姿もなかなか可愛いぞ。二十歳を越えてもまだまだあ
どけない顔に」

するりと少女の白い手がモモの頬を撫でる。

「低くもなく高くもない心地よい声」

その手で今度はモモの腹部の服を掴み、そつと少女はモモの胸に頬
擦りする。

「そしてほどほどに鍛えられ、男臭くない体臭…撫でろ」

「はい」

モモは抵抗することなく少女の頭を撫でる。

「そして…私を包む体も、大きな手も…全部が好きだぞ」

「にやふ…じゃ、じゃあ起こす時もわざわざ猫にならなくても…」

「それはダメだ。お前は人型だと、私を抱き上げて着替えさせてと
勝手なことをするだろ」

「その何がダメなんですか」

「当たり前だ。だって…せつかくお前に抱かれてるのに意識がない
なんて勿体無いだろ」

「先生…そんなこと言って、単に猫の僕をからかいたいだけでし
よう」

「む、バレたか。お前、簡単に私よりデカくなってしまったからな」
「先生は18歳の体でしたっけ？ そのわりにもちびっこですからね」

「ちび言うでない。ふう…モモ、腹が減ったぞ」
「はいはい」

モモは少女に右手を差し出す。

少女はその手をつかんで、右手首に噛みついた。

「…ん、う」

少女はこくりこくりと喉を動かす。
一筋、つつつと少女の口から赤い雫が漏れてベットのシーツに小さな広がりを見せた。

「先生、たれてます」

「ばはもの（バカ者）。ん…お前な、こういう時は、な…名前で呼べって、言っただろっ」

「すみません、まだ慣れなくて。…ふお、フォルテシア様」

「バカ…様はいらん。」

フォルテシアは不敵に笑いながらやや赤い顔でちゅ、とついばむようにモモにキスをした。

少女の名前はフォルテシア・C・O・マグナムタイト。

当年とって102歳の見た目15、6の不老不死な吸血鬼。
そしてモモの拾い親兼、恋人だ。

「フォルテシア…えと、その…血、血が…またたれてます」

ぼたぼたとモモの手首にあいた二つの小さな穴から赤い血がこぼれ

落ちる。

「気にするな。後でシーツを変えておけよ」

「はい。あの…そろそろ仕事の時間で…」

「今日は休む。…ん」

「んう…にゃあ、先、フォルテシアあ」

またキスをされてモモはフォルテシアとは比較にならないほど真っ赤になる。

「ふふ、もっと猫のように鳴け。可愛いぞ、私のモモよ」

フォルテシアはモモの手首を舐めて血を止めると、モモの耳元で囁くように言う。

「にゃふう」

モモは2年近くたって慣れない恋人としてのフォルテシアとの営みに、真っ赤なままで応じた。

○

「ん…先、生…？」

無意識に黒猫の姿で眠っていたモモはフォルテシアのベッドで目をさました。

「お、起きたかモモ。起きたならコーヒーをいれてくれ」
「あ…はい」

ぽんつと人型になり、モモは立ち上がり

「くくつ、何だ？ まだ足りなかったか？」

裸なのに気付いて慌ててまたベツトに座りこんだ。そして慌てて服を着る。

服をきた状態で猫になると人型になっても服を着ているが、裸で猫になると裸の人間になってしまうのだ。

「はうう…コーヒー、ですね。今いれます」

「うむ、頼む。あと、遅れたが仕事に行くから服の用意をしろ。掃除は私が出てからでいい」
「はい」

（うにゃ。先生はいつも気まぐれなんだから。最近は特に…あの、も、求めてくるし）

「ん？ どうした？ 顔が赤いぞ？」

「い、いえ！ 何でもありません！」

「そうか？ ならいいが…ははあん」

「な、何ですかその、イイコト思いついちゃったみたいなワルガキ的笑みは？」

「いや？ しかしお前は…いつまでたってもウブだなあ。エッチは勿論、二十歳になる前からしてたキスでも赤くなるしな」

「あにゃあああ…そ、そんなこと言わないでえ」

「はあ…お前今いくつだ？」

「え、えと…来月には22歳です」

モモはコーヒーをいれてフォルテシアの前に置く。

「ふむ…お前が初めて私を名前で呼んだのはいつだったかな」

モモは自分の分のために卵を焼き、パンを用意しながらんぐと頭を傾げる。

その日が誕生日なのは覚えているが、不老不死で年齢を気にしないフォルテシアとなるとモモも年齢があやふやになってくるのだ。

「確か…僕が15歳じゃなかったっけ？ 誕生日に…ぼ、僕が…」

（僕が…先生に告白したんだよね…は、恥ずかしい。）

「うむ。情熱的なキスだったぞ」

「ぶはっ。ああ、あれは…先生からしたんじゃないですか！」

「くく、その通りだ。私もいつお前を犯してやろうかと思ってたんだが…お前があまりにも可愛いから二十歳までは汚さないことにしたんだ。だからこそ、今はめっちゃめっちゃにしてるがな」

「うう…汚れちゃった」

「くくく、せいぜい一生私に仕えるんだな」

「…はい。えへへ。」

モモはにこにこしながら、軽い晩御飯を用意した。

吸血鬼のフォルテシアは、夜に起きる。よってモモも夜に起きる。

フォルテシアは18で不老不死の吸血鬼になり、それから街を転々としながら生活している。

そんな生活なので仕事を手にいれるのには一苦労だ。

吸血鬼であるフォルテシアには血を吸えば生きていれるので仕事はいらないが、モモは吸血鬼でなく普通に食事をするのでお金が必要なのだ。

モモとしては二十歳を越えて見た目15、6の少女に養われるのには抵抗がありむしろ世話をしたいのだが、フォルテシアはモモを溺愛しており仕事をさせる気はない。

フォルテシアに見ればモモが6歳の時から面倒を見ているのだ。そりゃあもう可愛い。

具体的に言えばお金がないからそれまで平気で野宿してたが、モモに野宿なんてもつてのほかだと働きだして、絶対にモモには清潔な寝具で寝かせてやるくらい溺愛している。

恋人になってから頑張ろうとしつつ空回りして真っ赤になってるのがまた可愛い。

「おいモモ」

「はい？」

「食事は結構だが、早く服を用意してくれないと仕事にいけないんだが？」

「はにゃ！ す、すみません先生！」

用意をして机についたモモにやりと笑って言うと、モモは慌てて立ち上がりばたばたと忙しそうに衣装をいれてる箱を開ける。

（しかし…本当に可愛いな。身長は私を越してしまったが、全然可愛さは衰えないどころか上がったな）

フォルテシアはにやにやモモを見ながらそんなことを思い、モモはモモで

（うにゃあ、どうして僕ってこっ目先にとられちゃうんだろ。うう、ちゃんとしないと先生に嫌われちゃうよー）

と泣きそうになっていた。

嫌われるというのだけは絶対にないのだが、モモは自分に自信がないのでどれだけ愛されても不安なのだ。

フォルテシアはそれを分かっているから冗談でも突き放すようなことは言わない。言わない、が、ポ力をして泣きそうなモモも可愛いからフォローもしない。

（モモ、可愛いなあ）

ダメダメだった。バカップルもいいとこだった。

そんな、幸せな二人。

だけど二人に終わりはある。だって、モモはどうやっても人間のままだ。少し変わっていても人間なのだ。

成長もするしなにより……簡単に死んでしまう。

だから、フォルテシアは吸血鬼であることを止めた。モモを助けるために、この世界から離別した。

「う…にや…フォルテシア…フォルテシア様…先生え…」

モモは真っ赤な体でフォルテシアを呼ぶ。だけどフォルテシアは応えない。

だって、心臓を無くしたから。

吸血鬼は心臓が無ければ生きれない。だって、心臓が吸血鬼を吸血鬼たらしめるからだ。

フォルテシアの心臓は、今モモの中で動いている。

「先生え、目を、開けてよお」

だからどれだけ泣いてもフォルテシアは動かない笑わない抱きしめてくれない。

「っ、う、くっ、あ、あああああ…にやあああああ！」

モモはフォルテシアの血を全身に浴び、心臓を貰うことで生き返ってしまった。

フォルテシアのいない世界で、生きることになってしまった。

22歳の誕生日に、モモは一人ぼっちになった。

22歳の誕生日に、モモは吸血鬼になった。

22歳の誕生日に、モモは不老不死になった。

22歳の誕生日に、モモは『フォルテシア・マグナムタイト』になった。

22歳の誕生日に、モモは……『モモ』を殺した。

○

一人の老女がいた。老女は腰まである赤髪をそつと手にとった。自分の髪ではない。もう10年も前にはまだ老女にも長い髪はあったのだが、病に伏して髪の世話が大変になったので肩ではつさりと切ってしまったのだ。

「妙ちゃんは、綺麗な髪ですね」

「本当なのですか？」

長い髪を撫でられ、10にも満たない少女は嬉しそうにはにかむ。

「はい…昔の私みたいなのです」

「そうなのですか？」

「はいなのです」

二人は特徴のある話し方で会話をする。元々は老女が昔に得た習慣で、孫の少女が真似たのだ。

「お婆様の子供のころとは、どんなのですか？」

「そうですね……一言で言いますと」

「はい」

「とっても、幸せだったのですよ」

老女は年齢を感じさせない晴れやかな笑みを浮かべた。
だけど少女は不満そうに老女の服を引っ張る。

「…今は？ 今は幸せじゃないですか？」

「幸せなのですよ。妙ちゃん^{たえ}たちがいるですから」

「じゃあ…」

「でもですね。とってもとっても、大切な人がいたのですよ」

「妙は？ 妙のことは大切ではないのですか？」

「もちろん大切なのですよ。でもですね、ちよっとだけ違うのです。違う大切なのですよちよっとだけ、ね」

（そう、ほんの些細な違い。でもそれが、大事なのです。妙ちゃんもきつといつか、分かるのですよ）

「違うのですか？」

「そうなのです」

不思議そうな少女の髪を撫でながら、老女は昔を懐かしむように微笑んだ。

「お願いがあるのです、よく聞いて欲しいのです妙ちゃん」

「？」

「猫を、黒猫を嫌わないで欲しいのです」

「妙、猫ちゃん好きなのです」

「もし、金の瞳の黒猫に出会ったら……私のかわりに愛してあげてほしいのです」

「？ うん。妙、猫ちゃんを可愛がるのですよ。黒猫なのです」

「はいなのです。ありがとうございますよ妙ちゃん。妙ちゃんはい子なのです」

「うんっ、妙はいい子なのです」

妙はにっこり笑った。

妙は老女が大好きだった。たとえ血が繋がっていなくても、早くに死んだらしい祖母のように慕っていた。

だから両親には似ていなくても隔世遺伝らしい赤みがかった髪は、老女に似ているからむしろ誇らしくもあった。

○

大きな音がした。

じじじじじじじ——

わずかに震えるような音がした。

何の音だろうかと考えて、わからなかった。

ただ他にすることもないから音に集中する。

じじじカチリじじじ——

時折カチリと異質な音がする以外は単調に音はなりつづけた。
ふと疑問に思う。

（ここは、何処…？）

じじじじ——

答えはない。

じじじ——

そして、変化が訪れた。

ポーンポーン

ポーンポーン

頭が割れるかと思うほどの巨大な音が響き渡る。

「ぐ、ああああ」

そして次の瞬間、その小さな体は乱暴に空に放り出された。

どすー

小さいが確かに物質が擦れあう生々しく音が闇を揺らした。

「は、あ―」

そして、約90年ぶりに、世界にモモと呼ばれた黒猫が現れた。

「あ、が、あ…は、ああ」

黒猫はうめきながら地面をのたうちまわる。

「はあ…はああ…ああ…はあ」

体を震わせるようにして息をすること数分。

黒猫は立ち上がる。

「…はにや…あ」

（ここ…何処？ 僕は…どこにいるんだ？）

「僕は…誰だ？」

○

歩きまわること数時間。

時間がたつにつれ、黒猫は過去の記憶を取り戻しつつあったが、未だ己の名前は思い出せなかった。

「うにゃーお」

自分が普通の猫でないことはすぐに分かった。
知識の中では普通の猫は人間にはならないし、魔法も使えないからだ。

今は人間になれないし魔法も使えないが、確かに人間になったり魔法を使っていた記憶はある。

だけど普通の人間でないこともすぐに分かった。

記憶の中の人間の姿の頭には猫の耳がついていて、人間の耳があるべき場所はずりとした肌があるだけだったからだ。

ぼんやりと覚えているのは、優しい金の少女と優しい赤の少女、そしてお人好しの黒の青年だ。

金の少女と赤の少女は、自分に笑顔を向けていてくれた。

二人とは、とても幸せな時間を過ごしていた。名前はあやふやだが、過ごした日々とその笑顔ははっきり覚えている。

どうやって出会い別れたのかは分からないが、たぶん二人は黒猫にとって大事な人だ。

黒の青年は少女たちに比べると殆ど覚えていないが、泣きながら笑っていた顔だけを覚えている。

以上が、黒猫の持つ記憶の全てだ。

そのうち時間がたてば思い出すかも知れないが、今のところ何を忘れてるかも定かではない。

個人的にはせめてあの優しい少女たちの名前くらいは思い出したいが、自分の名前も分からないうちは無理だろう。

空腹は見つけた湖を飲みまくり誤魔化した。

だが、何故か喉は渴いたままだった。

「にゃー」

分らない。腹がたぷたぷになるまで水をいれても、ひりひりとするほどに喉は渴いている。

「にゃあ…ふにゃー…………ふにゃあー！」

（何だろう。何が、こんなに僕をせめたてるのだろう。）

「ふにゃー！！」

（この焦燥感は、なんなんだろう）
黒猫はため息ながらに空を見上げる。

（ああ、今日は…満月、か）

ドクー

心の臓が鼓動する。痛いくらいに跳ねまわる。

まるで何かが操るように。

まるで何かに応えるように。

まるで何かを求めるように。

ああ…喉が渴く。

「…は、ああ」

黒猫はあらがいたい衝動に、けれど何をしたいのか自分でも分からなくて、ただ顔をしかめて堪えた。

「…く」

声をあげて転がりまわり、衝動に意識を任せればどれだけ楽だろう。だけど、記憶はなくても、それは駄目だと何かが告げる。

「…は、あ…」

絶対に、理性だけは失ってはいけない。

それはとても悲しくて、冷たく、寂しい結末しか招かないと……分かるのだ。

「…ふ、ぐう…」

だけじゃあ、どうすればこの苦しみから逃れられるのだろう。どうすれば、正しく生きられるのだろう。どうするのが、正しいのだろう。

（誰か…僕を助けて。…××！××××××！）

黒猫は、ぼやける視界に手を伸ばす。

そういえば、黒猫にはいつも手を掴んでくれる人たちがいた。何度も悲しいことがあって、けれどそのたびに誰かが助けてくれた。

（助けて…もう一度…僕の手を握ってよ…×……………×…）

黒猫はただ、愛しい人の名前を呼んだ。
声にはならなかったけど、その想いは確かに届いた。

○

何かを感じた。それが具体的に何かは分からない。念波やそれに準ずるものではなかった。

気のせいと言えばそれまで。言ってみれば第六感。
だけど、ただ一人それを感じた少女は、魔法が苦手な変わりに勘が
とても良かった。

だから些細な第六感を、少女は信じた。

「…行かなきゃ」

だから駆け出す。

幸いにも少女は例外で寮に住んではいないので、門限も消灯時間も
気にする必要はなかった。

少女は勘に従って走り、敷地内に点在する人工広場の一つに辿りつ
き、さらにその少し奥、木々が乱立する合間の小さい自然に空いた
空間に踏みこんだ。

「…あ…猫？」

「ぐ…う…う…」

中心部には黒猫が倒れていた。他にめぼしいものはなく、おそらくこれが少女を呼んだのだろう。何の確信もなく、少女はそう思った。

「う…う…う…」

グルグルと唸り声をあげ続ける黒猫。少女は迷わず黒猫に手を伸ばす。

ただ一つだけ、確信しながら。

○

「う…う…う…」

黒猫は唸りながら、ぼやけたままの視界に何かが映ったのに気づく。何か、分らないがそれは生き物のようで、朦朧とした意識のまま、『何か』に噛みついた。

「っ…い、痛っ」

予想外の人間の声に、黒猫は目を見開いた。

(…人間が、何でこんな夜に?)

「ね、猫ちゃん、痛いよ」

黒猫は混乱したが、噛みついた口は開かず、むしろ力を強くした。

ガリ―

「あぐつ―あ」

(痛がつてる。ダメ。止めなきゃ)

黒猫は少女の苦痛に心痛めたが、体は逆にしか動かない。

少女の手の平に噛みついたままに穴があき、そこから赤い液体が溢れ出し、黒猫の口内に流れこむ。

甘い―甘い甘い甘い甘い甘い甘い甘い―

世界中の甘味を凝縮し、一流のパティシエが人生をかけて制作したかのような美味。

液体はまるで形あるかのような重量でもって口内に君臨し、あたかも絶妙な酒類のように黒猫の脳髓から毛先までを翻弄する。

ゴクン―

その液体を、飲みこんだ。

（ああ…なんて、美味……！ あ、ああ…）

そしてその瞬間、黒猫は全てを思い出した。

金の少女の名前がフォルテシアで先生と呼んでいたことも、赤の少女にミミと名付けたことも、モモの名前を捨てたことも、思い出した。

（そうか…僕、いや私は…誇り高き吸血鬼、フォルテシア・M・マ
グナムタイトだ）

そして、『心臓』と『名』を受け継いだことを、思い出した。

「痛いつて…離して、ね？ 猫ちゃん」

「…にゃ」

そして理性も取り戻し、黒猫は慌てて少女の手を噛むのを止めて舐める。

「ふう…よしよし、いい子だね猫ちゃん」

「にゃー」

謝罪の意味をこめて鳴く。しかし少女は意にかいさずに

「ん。お腹減ってるのかな？」

と言った。

記憶を失っていたのは、いったいどれだけ寝ていたか分からないくらい寝てたからだ。

つまり寝ぼけていたわけだが、吸血と言う行為で思い出したのだ。

猫の体しか保てないほど弱っているのも、長い間体を動かさなかったからだ。

今なら多少の血を得たし、人型にはなれないがこの姿のまま生活するぶんには大丈夫だ。

「猫ちゃん、君の名前はとうしようかな？」

「うにゃあ」

（猫ちゃん…か。そうか。当たり前だけど、猫の僕は普通の猫の姿なんだ）

「にゃー」

（君が僕を『猫ちゃん』と呼ぶのなら…良いよ。君の望むまま猫であるよ）

（僕は『猫』になる。

ねえ、もういいでしょ？

私ではなく、僕が、『先生のいない先生の世界』に耐えられないんだ。

私は『私』のままだけど、僕の時くらい、逃げたっていいじゃない）

「んー、可愛い名前がいいかなあ。それとも格好いい名前？」

「にゃふ」

（孤独に耐えるには、僕は弱すぎる。『私』の仮面を被っても、『僕』自身が強くなるわけじゃない）

「よし、じゃあ…美月^{みつき}にしよう。君の金の瞳は、月のように綺麗だから。」

（……君は、僕らの、フォルテシアの目を美しいと言ってくれるんだね。この、呪われた瞳を）

黒猫―美月は無言で頷いた。

もう愛してくれた人はいないのだから、せめて愛してもらったままの自分を保ちたい。たとえ名前を、在り方を変えてでも、あの人が誇ってくれた自分だけは残したいのだ。

「ん、じゃあ帰ろうか。明日には首輪買ってあげるね」

「にゃ、にゃにゃあ」

（や、さすがに首輪はちょっと…）

少女は美月を抱き上げ、にっこり笑う。血は止まっているようだが、手は痛くはないのだろうか。

「嬉しい？ えへへ」

（嬉しくありません。……判断、まずったかな）

○

「じゃ、今日も大人しくしてるんだよー」
「にゃ」

少女―高松南琴は元気に家を出て行った。
たかまつなこ

ちなみに猫に自己紹介をする必要はないと思われるらしく、南琴の名前を知ったのは次の日に教科書の裏の名前を自分で読んだからだ。

南琴と出会ってから3日たった。吸血行為はあれ以来していないが、今のところ衝動は収まっている。

美月はふうとため息をついて人間になった。

「やれやれ」

ちなみに服は眠る前に着ていたものがある。多少汚れているがこれも今日、南琴が学園に行ってる間―朝から夕方に洗濯してしまおう。

南琴は一人暮らしで学生だ。いや、少し違う。どうやらここは学園の敷地内らしい。

全寮制なのだが南琴は何故か一戸建て。理由は知らない。学園と言うのも美月が自力で調べた。

猫と言う立場は楽かも知れないが、人間扱いされないのはどうだろう。

（味噌汁ぶっかけご飯とか、生サンマだけとか、ちょっとキツイかも）

食事といい、改善点は多い。最も、キャットフードよりはマシなのかも知れないが。

「と、それより先にやっちゃおう」

美月はぴこぴこと黒い猫耳を動かし腕まくりをする。

今日は初めて人間になった。3日寝て回復したと言うのもあるが、部屋の汚さに我慢できなくなったのだ。

そう、南琴の部屋は汚かった。

かろうじて下が見えると言うのはベットと台所くらいだ。そしてお約束のように毎日カップ麺などのインスタントだ。

勿論美月に出されたのもそうだ。サンマは買ってきたらしいが、とにかくこの3日美月は南琴が調理をしているのを見たことがなく、掃除をしているのも見たことがない。

本当なら食事も全て世話をしてしかるべきだが、『猫』である以上仕方ない。掃除だけで我慢することにする。

「よし、やるぞ！」

まずは片っ端からゴミを集めて袋につめた。幸いにもゴミ袋は封を開けてないものが台所にあった。

ペットボトルやコンビニ弁当のケースなどの燃えないゴミ。

ティッシュなどの燃えないゴミ。ただしプリント類は捨ててはいけないかも知れないので、例え日付が昔のものでも別袋にまとめる。

あと、棚を開ければ食器も箸もフォークもあるのに洗うのが面倒なのか全く使った形跡はない。

そして割り箸やレトルトの容器は山のように机に放置していて臭い。

部屋が違ってから生活スペースでは臭いはしないが、洗濯をしてない衣類が散らばっている。

また本も散らばりに散らばっていて南琴は踏み歩いている。

正直、よく生活できるなと美月は思う。

潔癖症ではないが、あえて言おう。人間が住む場所じゃない。

「…はあ、こ、これで、今日は終わりにしよう」

本日の成果

- 1 ゴミを全てゴミ袋にいれて家の裏に。
- 2 洗濯物は種類別に籠にいれて風呂場に並べた。
- 3 『そうじき』を全ての部屋にかけた。

美月には部屋にある機械の半分以上がよく分からないものだったが、テレビは南琴の真似をして使用し、テレビショッピング番組などから掃除機の知識を得て、引っ張りだしてきたのだ。

（今の時間は…うわ、もうお昼か。洗濯は…多分あの機械なんだろうけど、どうするか分からないから明日に手洗いしようっと。とりあえず……お腹減った）

最初に美月は自分の服を洗っておいたので（そして乾燥するまでは裸で掃除をしていた）今は綺麗になった自分の服を着ている。

そして冷蔵庫を開けた。冷蔵庫なら美月が起きていた時からあったのだ。

「…え…な、何もないじゃん」

見事に空っぽだった。全てのドアを開けても飲み物も調味料もなく、アイスクリームの箱が一つだけ入っていた。

「……」

レトルト食品が棚にあるのは知っているし、説明を読めばできるだろうが……個人的にはマトモな食事がしたい。

「…よし、出るか」

美月は一人頷いて、再び猫になり外に出た。

○

（さて、どうしようかな。買い物しようにもお金ないし…）

昼時間だけあって、外にはたくさんの人がいた。歩き回るのは初めてだが、学園の敷地内だと思っていたのだが様々な年齢の人間がいるし、もっともって歩いてみると店やバス、電車もあった。

（結局、ここってどこなんだろ？）

「あ、猫だ」

「にゃ」

南琴と同じくらいの年頃の少女らが走るように美月に近寄ってきた。

「タマ、お腹減ってる？ パン食べる？」

「にゃーちゃん、おにぎりあげるー」

「にゃあにゃあ」

ありがとこの代わりに頭をすりよせる。

どうやら少女らは仲良しグループで食事をしている最中らしい。

あたりを見回すと同じ年頃の少年少女がゴロゴロしている。小学校でも近いのだろうか。

（校舎は…あれかな？）

美月はぐると首を回していくつもの建物に目を向ける。

（あれ…でも南琴ちゃんはいない…というか、南琴ちゃんが着てたのと制服違うや）

別の学校なのかと美月は首をひねりながらもらったおにぎり等を食べる。

地面に置かれた物は食べたくないので手のひらのを食べてると、喜んでわれもわれもと手のひらを差し出させた。

「うにゃー」

（猫って…案外楽かも。プライドさえ捨てれば）

腹を満たしてから美月は陽々と歩きだす。

少女らは着いてこようとしたがささと無視して早足になると諦めた。

（さて、お腹もふくれたし…どこかでお昼寝でもしようかな）

美月は無意識に喉をゴロゴロ鳴らしながら歩く。とても機嫌がいい証拠だ。

キーンコーン

カーンコーン

大きな鐘の音が広場に、一帯に鳴り響く。

美月はびくりと耳を揺らして反応してから誤魔化すように頭を振る。

この音はこの前から定期的に鳴っている音だ。昔に鳴っていた時を告げる教会の鐘のようなものだろう。

美月の考えを裏付けるように回りにいた人たちはどたばたと慌ただしく走りだし、見ているといっそ爽快なほど、一斉に大量の人間が複数の建物に入っていく。

それをぼーっと見ていると

「おつとごめんよ」

「ふにゃあ、い、いゝにゃゝ」

蹴り飛ばされた。

しかも放置。思わず『痛い』と言いつうになつてしまった。

「うゝにゃゝ」

（なんて酷い！ 悪虐非道もいいとこだ。可愛い僕にこんなことして放置だなんて、あの人間はどこかおかしい！）

かなり自意識過剰なことを考えながら美月は草むらに逃げこみ唸る。美月は自分に自信がないわりに自分を可愛いとは思っていたりする。

「ふにゃー、ふにゃー」

まだ痛む蹴られたお尻を尻尾でさすりながら、美月は草むらから転がるように出てきた。

キーンコーン

カーンコーン

再び鐘の音がして美月があたりを見回すが、制服を着ていた人間はすでにいなくなっていた。

ちらほらと私服の人はいるが、かなり人間は減った。

「うにゃあ」

（うう、酷い目にあつたよお）

「あの、大丈夫ですか？」
「にゃ？」

顔をあげると一人の少女がいた。着ているものは南琴と同じ制服だ。しかし先ほどの鐘は授業が始まった合図ではないのか。何故ここにいるのだろうか。

（まあ、何でもいいけど…また何をする気だ？）

警戒する美月に対して少女はち、ち、ち…と舌をならしながらしゃがんで美月に手の平をさしだす。
どうでもいいが、それは本来猫に使うものではなかった気がする。

「あの、そう毛を逆立てずに…私は敵じゃないですよ」
「…にゃー」

蹴り飛ばされたのでお怒り中だったが、美月はこう見えてもとつくの昔に成人してるのだ、八つ当たりは大人気ないと思い直した。

「にゃー」

ぺろぺろと少女の指を舐める。

ちなみに言っておくと、人間の体と猫の体では微妙に感性が異なるので、猫の体では人間を舐めても裸を見ても特に意識はしない。

「…可愛い」
「にゃ」

少女は美月を抱き上げる。ぬくぬくの体温に思わず和む。

美月は人肌が好きだ。安心するからだ。

「じゃ、行きましようか」

「にゃ？」

（え？ 何処に行くの？）

○

「佐久間さん、遅刻よっ……何その猫？」

建物に連れていかれ、教室に入ると教壇にたってる女性から呆れた視線をいただいた。

「可愛いでしょう？ 先生、うちのクラスで飼いましょう」

どうやら、ここはこの少女の教室らしいが、中々図太い少女だ。遅刻しているのに堂々としている。

「あのねえ……」

「駄目！」

教師が呆れていると教室の一角にいた女子生徒が立ち上がった。

「にゃ！」

（あ、南琴ちゃんもこのクラスなんだ……あれ、でも南琴ちゃんだけ小さいような？）

教室には男も女もいるが、全員15、6だろう。だが南琴はどう見ても12、3歳だ。

「高松さん？」

美月は少女・佐久間の腕から脱出して南琴の席まで猛ダッシュした。

「にゃん」

南琴の膝にのると南琴は嬉しそうに頭を撫でてくれる。

魔王様との新婚生活（前書き）

恋愛ほのぼの？今見たら主人公が図々しい感じ。

魔王様との新婚生活

ああ、天国の父様母様…。

ユメイは今、そちらへむかっています。

駕籠の中で。

始まりは、2日前の夜のことだった。

晩御飯を作っていると村長さんがやってきて、何やら神託が書いてあるらしい紙を私に渡されたが、私には文字が読めないのだった。

「ふえ？ 私、ですか？」

「ああ」

それで説明をしてもらうと、どうやら今年のアマリの不作っぷりは魔王様をないがしろにしたかららしく、森の奥の祠にて処女を生贄に捧げれば機嫌を直してくれるらしい。

私は両親も死んで身内もないし、村で唯一学校にすら行けなかった娘なので選ばれたらしい。

わが村では、森に住むという魔王様を昔から信仰しているが、神託は神様からのお告げなので私は信じていない。

私は力仕事もできないし特別な技術もないから、村のお荷物なのは自覚してる。だから、村のためなら仕方ないかな、と思った。

なにより、魔王様になら生贄になってもいいかなと思った。魔王様のお話はよく聞いていた。

もの凄い力を持っていて、この辺りの村に益をもたらしてくれる。だけどたまに不機嫌になって、その時は村長たちが話し合い一人の贄を決めて機嫌を直してもらうらしい。

村長さんが言うには300年ぶりの生贄らしい。

ということはつまり、300年も豊作をもたらしてくださってたのだ。魔王様はやっぱり凄い。

「わかりました」

そして私は二つ返事で了承した。

20年も生きてない小娘がつて言われるかも知れないけど、たぶん生きてても私の人生は変わらず平凡なままだろうから、構わない。

「私、立派に生贄の責を果たして見せます」

お友達には止められたりもしたけど、誰かがいかなきゃいけないことなので私は生まれて初めてのお化粧と、見たこともない豪華な衣装に身をつつむ。

「あは、凄いですね。私、ちょっとでも綺麗に見えますか？」
「ええ、勿論」

こんなに贅沢な思いができるなら、生贄も悪くないかも知れない。
なんてね。

初めて駕籠に乗った。

そして駕籠はどんどんと進んでいく。各村の村長さんたちしか知らない森の奥の祠へと。

○

「降りろ」
「はい」

駕籠から出て、森を超えた山と山の間あたりだろうかと予測する。
何故なら目の前にはきりたった垂直な山肌があるからだ。

上に目を向けると途中からなだらかになっているのか、葉っぱだけが見える。横から見ると山の端を切り取ったみたいになってるに違いない。

そこには小さな祠がありその隣には洞窟があり、深いのか暗いだけなのか奥が全く見えない。

「ふええ…えと、この祠の中に入るんですか？」

「バカかお前は。そっちの洞窟に決まってるだろう。奥に行けば魔王様がいる。逃げようなんて思うなよ」

「大丈夫です。私、未練なんてありませんから」

私は駕籠を運んでくれてた人たちにお礼を言つて、洞窟に入つていった。

「いたっ…うっ」

つまづいて転びそうになったので暗いので壁に手をあててゆっくり進む。

どのくらい歩いたのだろう。

真つ暗だし分からない。疲れたけど、私は元々体力がないからそれは判断材料にならない。

「ふはあ…ぬう、まだ着かないんですかあ？　魔王様ー、お留守ですかー？」

ってあれ？　別にここは魔王様の家でもないのだっけ？

「もうっ。生贄とか言うなら迎えにきてくれたっていいじゃないですかあ！　ふん、だ！」

足が痛いし、ちょっと休憩。私ははふうと息をはきながら手探りで壁にもたれながら座る。

「はあ……」

みんな、どうしてるんだろう。

止めてくれたの、困ったけどホントは嬉しかったな。

って、弱気になっちゃ駄目よユメイ！ ファイト、私！

それに他の人だと家族の人が泣いちゃうけど、私には泣く人がいないんだから。

「…っ」

だけど、ごめんなさい。

父様母様…ユメイは、ユメイは長生きできないみたいです。

二人のぶんも笑顔で生きていくって約束したのに、守れそうもないです。

「魔王様…早く、私を迎えに来てくださいよお」

じゃないと、最期まで笑顔が持ちそうにないです。

「おい貴様」

「はへ？」

声がしたような？ あ、でもここには私しかないし幻聴かな？

「貴様だ貴様！ いつまでへたりこんでる！ 顔をあげろ」

「え…うええ！？ ひひ、光ってる！ 発光人間！？」

「誰がだ！」

幻聴に従い顔をあげると、暗いはずなのにぴかぴかと光って自己主張する人がいた。

燃えてるみたいに全身が明るいけど、炎とは違う黄色の光。不思議……。なんだか、凄く落ち着く光。

「ったく、また生贄か。にしても貴様、体力がなさすぎだ。ここをまっすぐに行けば、山の向こう側に出る。それから好きに暮らせ」
「ほえ？」

「ほえ、じゃない。だいたい生贄なんて求めた覚えはないというに人間はいつまでたっても同じ思考しかできないのか」

「……あれ？」

「何だ」

「魔王様、ですか？」

「それ以外に何に見える」

確かにその人普通よりおつきくて2、3メートルはあるかもだし、大きな手からは長くするどい爪がある。あと、オデコとかに変な模様があるけど普通に服を来てるし、二足歩行だし…。

「人間さんに見えます」

私はてつきり、何か黒いもやもやしたものが現れて、ぱかつて開いてそこから飲み込まれるとばかり思ってたから、拍子抜けもいところだ。

「…意外と普通の人なんですね？」

「……光ってるのが分からないか？」

「だって、魔王様は凄いんだからそのくらい当たり前です」

「こつ…神秘的な何かを、例えば恐怖とか感じないか？」

「ん、魔王様って、想像よりずっと綺麗な方なんですね」

ただ人間よりずば抜けてるという意味では、予想通りだったと言える。変な模様を抜きにすればとっても綺麗な顔だ。

「…もういい。いいから向こうへ行け。作物はなんとかしてやるから」

「え？ 私を食べないんですか？」

「貴様なんか食べたら腹を壊す」

「え！？ わ、私ちゃんと処女ですよ！」

「そんなことは聞いていない！」

びつくりした。いつの間にか処女喪失していたのかと思ったが、それは関係ないらしい。

まあよく考えたら処女と言うのは子供を生んでないと言う意味なのだから、私が気付かないうちに赤ちゃんが生まれていなくなるとかあり得ない。

魔王様は呆れたように私を見下ろしている。

「いいか？ 俺様は確かに魔王として崇められてるが、別に生贄を要求したことはない。生贄は毎回、ここを通りぬけて村と関係ない場所で暮らすんだ。分かつたら貴様もさっさといけ」

「…魔王様は私を殺さないのですか？」

「だからそう言っているだろう。物わかりの悪いやつだ。だいたい、貴様のようにこんな場所で休んでも俺様に迎えを要求したのも貴様が初めてだ。大抵のやつは通りぬけて自分でカラクリに気づいて逃げるんだよ」

「…魔王様」

「何だ？ 疲れたから送れと言うのか？ 全く、貴様のような生贄は初めてだ」

「違います…私を、魔王様の側においてくれませんか？」

「…は？」

「私を、魔王様のお嫁さんにしてください」

「…はああ！？」

だって生贄が嘘と言うことは、つまり魔王様は今まで何もないのに私たちに豊作を与えてくれていたのだ。

その上私の命を助けてくれると言うのだから、こんなにいい人はいない。

だから、私は今まで私たちの村が受けた恩を返さないといけない。どうせ一度は死ぬことを覚悟したのだ。

余ってしまった残りの人生、側にいてお仕えするのだ。

「私、精一杯頑張りますね」

○

俺様の土地に人間どもが入ってくるなんて用事は一つしかない。

生贄、だ。

また久しぶりの生贄。どうせ俺様が生贄に何かするわけじゃないが、

一応人間からの緊急連絡みたいなものだ。
豊作を約束するのが、俺様の契約だからな。

「暗い…うう、みんなも松明でも持たしてくれたらいいのに」

しかし今回の生贄はまたバカそうだな。生贄に選ばれて独り言を言う元気があるとは。

「ふはあ…ぬう、まだ着かないんですかあ？ 魔王様ー、お留守ですかー？」

…こいつ、バカか？
俺様に呼びかけてくる生贄なんて初めてだ。

「もうっ。生贄とか言うなら迎えにきてくれたっていいじゃないですかあ！ ふん、だ！」

生贄とか求めてねえよ！
っておい、疲れるの早すぎるだろ。今までのやつらもみな同じくらの年の女どもだが、休むにしても真ん中あたりまでは歩いていたり、俺様が何も言わなくても一日かけて反対側まで行っている。

「魔王様…早く、私を迎えに来てくださいよお」

…なんなんだこの女は。それは間違ったって泣きながら言うセリフじゃないだろうが。

「おい貴様」

女は放っておいたらいつまでもここから出られそうにないから、だ

から仕方ないから、俺様は1800年ぶりに人間の前に姿を表した。

「私、一生懸命頑張りますね」

…は？　ちょっと待て。何だ？　わけが分からないんだが？

お…お嫁さん？

は？

○

「うわぁ、魔王様のお家って立派なんですね」

魔王様の家は祠があった側の山の中にあつた。どういふことかと言
うと、山にはいくつか洞窟があつて中で繋がってるのだ。
魔王様の家はつまり、山の中のおつきな洞窟そのものだ。雨漏りの
心配もなさそうだし、私の家がいくつも入るくらい大きい。

「まあ、まがりなりにも魔王だからな。で？」

「はい？」

「本気でここに住む気か？」

「はい。だって私、他の村に行っただって行くところないですもん」

さつきもしぶる魔王様にこう言っただけで、とにかく家に置いてくれと頼んだのだ。

「生贄たちはみんなそうだ。何とかしろ」

「でも私、技能もないですし顔も特別よくないですし勉強もできませんよ」

「……村でどうやって生活してた。生贄は大抵孤児だからたくましくいはずだ」

「えっと、友達の畑を手伝って回って、わけてもらってました」

「……その手は他ではつかえない、か」

魔王様はため息をつきながら高い木の台に座る。

私はさすがに机に座るわけにはいかなかったので立つたままだ。

魔王様の家には草履を脱いで上がる場所がないけど代わりのようにたくさんものがある。

「あれだけ盛大に送りだしてもらったのに戻るわけにもいきませんしに」

「盛大かはどうでもいいが、確かにまだ戻るわけにはいかな」

「はへ？」

いやいや、盛大かは関係がある。ひっそり出ていったならともかく、涙ながらにお別れをしたのにあっさり帰ったら怒られてしまうのではないか。

「……ホントに能天気だな。今貴様が戻ったら生贄から逃げたとしか

思えないし、そしたら偉いさんらに追いかけて殺されるぞ」
「…え…」

か、考えてもみなかった。でも、そっか。私は豊作にしてみんなを助けるためにきたんだもんね。

私が戻ったら豊作じゃなくなるから困るし…あ、でも魔王様が何とかしてくれるんだし話せば何とかなるんじゃないかな？

「言っておくが話し合いで何とかなと思うなよ」

「な…何で私の考えてることが分かるんですか？」

「魔王だから…と言いたいが、貴様がわかりやすすぎるんだ。まあ…仕方ない。来年の秋になって豊作を確認すれば、貴様が戻っても大丈夫だろう」

「……え？　そ、それってもしかして…？」

「1年だけだからな」

「やったあ！　ありがとうございます魔王様！　私、魔王様のお嫁さんになれるように頑張りますね」

「おい。何でそうなる」

「？　何でも何も、男女が二人で暮らすというのはつまり、お嫁さんになるってことですよね」

「…どこでそんな知識に…もういい。分かったよ。なら好きなだけ言ってる」

「はい！」

こうして、魔王様のお嫁さんという名の恩返し生活が始まった。

○

「旦那さま、ご飯ができましたよ」

「ぶっ！ だっ！？」

「？」

「…いや、何でもない。もう好きにしろ」

「はい。れいぞーこ？とやらの中の食材勝手につかっちゃいましたけど、いいですか？」

「ああ…ってまた勝手に…まあ料理くらいいいが、俺に確認くらいしろよ」

魔王様改め、旦那さまはやれやれと首をふりながら席につく。

旦那さまが言うには小さな机と思ってたのは椅子で、すわるための台らしい。

私の部屋も用意してもらい、少しでもお嫁さんらしくなるために手始めに家事を始めることにした。

一人暮らしだったので家事はそれなりに自信がある。

モテモテな王子様と転生した女の子のお話（前書き）

タイトルそのまま。

モテモテな王子様と転生した女の子のお話

今日もいい天気だ。

やはり私が住む街とは微妙に違う街並みで、流れる景色を見ているだけでわりと楽しめる。

「リース、何を見ているんだい？」

と、向かいに座っていた金髪碧眼の超絶美少年が私に話しかけてきた。

「…いえ。何でもありません」

彼と出会って6年たつが、未だに気をぬくと見とれそうだ。

しかも彼は容姿端麗だけでなく頭もよく武術にも優れ、おまけに次期王で、誰からも好かれる雰囲気ですごいカリスマって感じた。

「そうかい？　ずいぶん楽しそうだったけど」

「そうでしょうか…」

わざとではないが、何故か私の表情は豊かではない。自分的には笑ったり怒ったり悲しんだりしてるのだが、なかなか表情にでないのだ。

だから私は無愛想な無表情女とよく言われるが、6年間毎日顔を合わせているのでさすがに彼には私の表情の微妙な違いが分かるらしい。

「ああ、たまには他国もいいものだろう？」

「そうですね。私もティアナ様とグラーディア様とはもう6年の付

き合いになると言うに、今まで来たことがない方がおかしかったのですよね」

ティアナ様とその弟のグラードディア様は、ここーディグランド国の第一姫と第三王子だ。

さらに我らがサーロライ国と合わせ3兄弟国のアウグラル国の第二王子フェス様と第四姫アティ様は年齢が近く、仲がいい。

この2国は多妻なので兄弟と言えど年の近いもの同士だけが親しくなることは珍しくなく、両国とも10人以上王子姫らがいるが彼と特に親しいのはこの4人だ。彼と4人は月に一度は会っている幼なじみのような関係だ。

けれどわが国は一夫一妻で二人きりの兄妹なので、一人だけ年が離れているが妹もそれなりに4人と親しくさせてもらっている。

まあつまり、何となく察した人もいるかも知れないが、その妹が私だ。

私が6歳の時に母が国王と結婚し、当時11歳のミカエル王子が私の兄になったのだ。

今では私は12歳になり、ミカエルお兄様は17歳だ。

6歳まで片田舎にいた私が宮廷生活になり、そりゃあ不都合はあったがお兄様がよくしてくれたので問題はなかった。

それにお母様の血をついで、無表情とは言え私だって美少女の部類に入るのでメイドさんたちに嫌われたりすることもなく、私もずいぶん姫らしく馴染んだつもりだ。

「仕方ないさ、リースはまだ小さいからね。一人ではこれないだろう。そのうち、また休みを作って今度はアウグル国に連れて行ってあげるよ」

「ありがとうございます、お兄様」

お兄様は5人のうち、唯一の第一王位後継者なので4人はよくわが国にやってきてくれるのだ。

だから私は今までサーロライ国から出たことがなかったのだが、珍しくお兄様に休みができ、久しぶりの遠出でディグランド国に来るのについてきたのだ。

「ディグランドは貿易が盛んなのですよね。我が国とは違い、たくさんの人たちがいて…とても賑やかですね」

「だろう？ 我が国は科学の都として名をはせてはいるが、学者気質なせいかな静かだからね」

「そうですね。静かなのも落ち着くし、好きですけど…騒がしいのも嫌いじゃありません」

てゆうか、昔はよくどんちゃん騒ぎしたよね。私、本当はかなりのお祭り好きだし。

「良かった。普段、ティアナたちという時はリースはあまり話さないから、実は無理をしてるんじゃないかとひそかに心配してたんだ」
「いいえ。まさか。お兄様たちのお話は、聞いているだけで楽しいですから」

無口キャラなのはきどってるわけじゃないけど、正直彼ら子供の会話にはついていけない。

いや、平均から見れば大人びてるほうだけだね。

自己紹介が遅れたけど、私の名前はリーチェスター・イヴ・サーロライ。愛称はリース。サーロライ国ミナリ地方の田舎出身。前世での名前は佐藤リース。ハーフだけど純日本住みで日本語オンリーの地球人。享年、28歳。

え？ 意味がわからない？ つまり私には前世の記憶があるのだ。ちなみに世界が違うみたいで、私が前にいた世界は文明が進みまくってたからこの世界は超退屈です。

まあ農民がデフォルトでいる世界で、肉体労働をせずに済む地位になれたことは幸いといしか言いようがない。

私、前世も今世も劇インドア派だし。ま、モンスターがいたり戦争があつたりで物騒だったりするけど、私にはあんまり関係ないし。

王位後継争いとかもないし、お兄様は私に甘々だから養ってくれるだろうし、全然オツケー。

「そうか。なら良かった。ティアナとグラードディアは多少言い方がキツイ時もあるから、繊細なリースが気にしてないか気になったんだ」

うは、てゆーか私のこと気にしすぎ。シスコンだなあ。

「そんなこと、あるわけありません」

実際、お兄様たちといえるのは楽しい。というのも、お兄様はモテるのだ。お城のメイドたちは勿論のこと、使用人や出入りの商人、大臣の子供、他国の者、そして幼なじみの4人もみんなお兄様が大好きだ。

幼なじみの4人、とか勿論4人ともお兄様を恋愛感情で好きなのだ。

どういうことかと言うとこの世界では同性愛が一般的なのだ。

だからカリスマがあつて美しいお兄様はそりゃあモテる。

おまけに妹の私にとりいろうとみんな優しくしてくれるし、その天然ハーレムは見てて面白いし待遇もいいから、私はちつとも嫌じゃない。

しかもお兄様自身はモテる自覚がないから4人がそれぞれ牽制したりするのが、天然無表情がなければかなりにやけてること受けあいだ。なんか微笑えましいし。

「だって、私はお兄様といられるだけで楽しいですから」

ちよっぴり誇張して言つておく。

わざとではないけど、もっと幼い時に前世の記憶があるのを隠して無口にしたから、あんまり話さないのが癖になっちゃんだよね。そのせいで大人しい人間だとお兄様に思われてるので、このくらいの甘えトークは本来のキャラじゃないけどオツケーでしょ。

まあこんな感じで、私は二度目の人生を前世とは違う世界でなかなか快適に過ごしている。

「え、嬉しいなあ。僕も、リースといるだけで楽しいよ。リースがいてくれれば疲れも吹き飛ぶよ。自慢の、妹だ」

「ありがとうございます」

わー、これは、他人だとするとそうとうひくほどのシスコンっぷりだな。

まあ私だつてお兄様のことは、どちらかと言うと弟的な意味で好き

だし、大切だけどね。

○

「ミカエル！」

「よく来たね、ミカエル」

馬車のまま宮廷に入り、そのまま二人の待つ離宮に向かうと二人は嬉しそうにお兄様を迎えた（姉妹国なので面倒な手続きがなくても通れる）。

「あ、リースも、ようこそディグランドへ」

「ああ、リーチェスター、ディグランドを楽しんでね」

「はい、まだチラと拝見しただけですけど、凄く素敵な国ですね」

思いつきり私はおまけ扱いだけど、この年頃は基本的に『恋は盲目』だし仕方ない。

歓迎の簡易お茶会のために、席についた私とお兄様の前に紅茶に似た飲み物と焼き菓子が置きながら、二人はにっこり笑う。

メイドたちを閉め出してるので姫と王子に給仕させるといふ何気に貴重。

「あら、ありがとう」

「奇跡の天才児リーチェスターに言ってもらえると嬉しいよ」

義務教育もなく識字率が低くて文化レベルも低いこの世界では、前世では一般的知識しか持たない私が、かなり頭いい部類になる。

文字は多少覚えるのに苦労したけど、『礼儀や知識は12歳で大人並、専門的知識では誰も考えつかない理論を提唱しその全てが立証された。』と言う風に人から見られてる。

私からすれば当たり前のこともこの人からすれば未来の進んだ発想と技術なのだ

はっはっは、前世では結婚もせずに死ぬし赤ん坊から知らない世界と知った最初は絶望したりもしたけど、開き直れば私の人生は順風満帆だ。

「そんな…天才だなんてこと、ありませんよ」

「いやいや、リースは天才だよ。僕は、リースこそ国を統べるべきだと思ってるよ」

「まさか。お兄様ほど王に向いてる方はいませんよ」

つか、マジとんでもないこと言い出したよこの子。知識があってもそれを実現させる手腕もないし、第一カリスマがない。

「そうよミカエル、いくら何でもそれは言い過ぎよ」

「だね。第一、君の国では女帝は認められてないだろう」

基本的に王族は年功序列で、一番最初に生まれた人間が王様だ。仮にその人が優秀でなくても、第一子が譲った人物しか無理。

ディグラントでは一番最初なら女の人でも王様になるし、そうでなくても指名されたなら女の人でもいける。

けど我が国では男しか無理だ。別に珍しいわけじゃなく、むしろドイツランドの方が特異なのだ。

とは言え、男尊女卑な風潮はあまりない。恋愛において性別がフリーダムなので、男尊女卑の人や女尊男卑な人がいたりするが基本的に平等だ。

まあ、身分は明確にあるしそっちは厳しいけど、王族貴族がいるような文化で性別貴賤がないことは私的にビックリしたのだ。

「何事も、最初は例外から始まる。リースがその最初で何が問題があるっ」

お兄様がきつぱり言う二人は不満があるだろうにうっと言葉につまる。

客観的にどう考えてもお兄様のが向いてるが、意見としては間違っていないからなあ。

それに好きな相手に嫌われたくないという心理が意見を言いづらくさせてるのだろう。

私はやれやれと内心ため息をつきながらお兄様に提案。

「お兄様、お兄様のお気持ちは嬉しいですけど、私は王には向いてませんよ」

「そんなことはないさ」

「それに、私はお兄様の側でお手伝いしてるのが好きなのです」

ムキになりそうなので私はそう付け加える。

「そうなの？」

「はい。大好きなお兄様が、みなさんに好かれているのだけで私は満足です。お兄様がみなさんに囲まれてるのを見ていただけ、私は楽しいですから」

これは本当。無自覚ハーレムを築くとか凄すぎ。私は横から見てにやにやしてるだけで十分。

てゆーか変に巻き込まれたくないし。

「そうか…それは嬉しいが、何だか寂しいな。僕が何もしなくても、リースは平気なんだから」

「？」

は？ 何を言ってるんだお兄様は。全く…

「もう、何を言ってるんですか。お兄様がそこにいて、私を気にかけてくださっていると知っているからそれだけで満足できるのでですよ。お兄様がいなければ、私だって寂しいです」

「そうか！」

あーあー、喜んじゃってまあ。シスコンめ。可愛いなあ。あ、これじゃ私もブラコンになるのかな？

「リースは、いつ見ても、ミカエルと仲がいいわね」

「そうだね。僕らより短い付き合いとは思えないね」

あ、忘れてた。

てゆーか、この二人もね、この嫉妬具合とか可愛いし。17歳と16歳の姉弟だけど私にしたら子供だし。

「はは、勿論、可愛い妹だからな」

うわ。相変わらずそういうのは疎いなあ。

「まあ、お兄様ったら。あ、この焼き菓子、美味しいですね」

「ああ…これは焼きたてじゃなきゃ美味しくないから、リーチェスターは食べたことがないよね」

「うちの民族料理の一つなのよ。リースに気に入ってもらえて嬉しいわ」

よし、話そらし完了、と。

お兄様：シスコンもいい加減にしないと、いい人がいても上手いかなくなるよ。

つても、基本的に女は18〜25、男は20〜28が結婚適齢期だからまだ余裕なんだけど。

まあ…こんな感じで、私はお兄様たちの恋愛模様をほくそ笑みながら、本を読んだり妹分を可愛がったり宮廷おかえ科学者に混じって開発の発想元になったりした。

そして、お兄様が18歳になるまであと一ヶ月になった。

○

ちえんじ！（前書き）

現代恋愛ＴＳもの。

ちえんじ！

「ナオちゃん、おはよー」

家を出ると日本人にはかなり薄い茶髪のまるで西洋人形のように可愛い少女が挨拶をしてきた。

「おう、おはよ。姫は今日も可愛いな」
「ありがとう」

この少女、神^{かななぎ}一姫は私の幼なじみその1だ。可愛い。
よしよしと頭を撫でるとほにやりと笑う。可愛いなあ。

「ナオ、一姫、おはよー」

駆け足ながらにやってきた寝癖のついた背の高さだけが傲慢な男は
山田^{やまだ}佐喜。私の幼なじみその2だ。
姫と違って可愛くない。パシリ。

「おせーぞボケ」
「まあまあ、佐喜君、おはよお」
「うん。おはよう」

にっこり二人は微笑みあう。気にいらないので佐喜を蹴る。

「いてっ。何すんだよナオ！」
「うるさい。遅れた詫びに鞆持て」
「ナオちゃん、どうしていつも佐喜君に酷いことするのぉ？」

う、そんな目で見るんじゃない！

くそう…何故か昔から姫にだけは頭があがらない。可愛いからだが。

「いいんだよ、一姫。どうせナオは何言っても聞かないし」

「佐喜君…」

けっ。人を悪者扱いしやがって。どーせ私はガサツで女らしくねーよ。

「おら、二人ともチンタラ歩いてるとおいてくぞ」

「あ、待ってよー」

「ちよ、ナオの荷物重っ」

姫の家から学校までに私の家は通り道だが、佐喜は結構な寄り道なのにわざわざ私の家にまでくる。

幼なじみで昔から私の手下とは言え、ここまでされるとどうも佐喜には下心があるような気がする。

具体的に言つと姫とか姫とか姫とか。

「おい佐喜」

「な、なんだよナオ。つか顔が近っ」

姫に聞こえないように佐喜の耳に顔を寄せて小声で話す。

「姫に手え出したらコロス」

「っ…わ、わかってるよ！」

よし。

私が姫に頭があがらないように、佐喜は私に頭があがらないのだ。ちなみに姫は佐喜に優しい。

男のくせに女みたいな名前しやがって！

「ねえナオちゃん、何の話してるのお？」

「何でもないよ」

あー、この、時と場合によってはイラッとする間伸びした話し方がまた可愛いなあ。

「やまだなおみ山田直美ー！」

「げ…」

前方から私のフルネームを叫びながら手をふってくるガタイのいい男は佐藤英彦さとうひでひこ。で、隣の小柄でオカッパな日本人形、もといこけしみたいな女は妹の英子えいこだ。

姫ほど可愛くはないが、多少ツリ目でびしつと真面目に見える。ちなみに中身は私（と英彦限定だが）に対してツンツンしてる。キツめのこけしにそっくりだと常々思っている。

「兄さん、恥ずかしいから叫ぶのやめて」

「全くだ。こけし、もつと言え」

「山田先輩、こけしは止めてください」

こけしが下から私を睨みつけてくる。

「私を山田と呼ぶな」

「じゃあ先輩もこけしは止めてください」

「言いだろ『こけし』。可愛いだろ？」

「可愛くありません。激しくバカにされてる気がして不愉快です」

「わかったわかった。わかったから睨むな、こけし」

「……佐喜先輩、一姫先輩、おはようございます」

「おはよお、英子ちゃん」

「おはよう、英子ちゃん」

声をそろえて二人が返事をする。幼なじみだけあって姫と佐喜の息はぴったりだ。

あれ、私も幼なじみなのに…おかしいな。

「山田直美、今日も勝負だ！」

「やだ」

「何故だ山田直美！」

「ええい！ 人のフルネームを連呼するなバカ彦！」

にじり寄ってくる英彦がうざくてつい一本背負い。
しまった…！

「く…さすが我がライバル！ たとえ部活をサボろうが腕は落ちてないな！」

私は女子柔道部の主将だ。不真面目なので部長ではないが一番強いので主将をしている。

そして英彦は男子柔道部の部長で主将だ。そして何故か私をライバル視していて毎日つかつかってくるのだ。

あ、ちなみにこけしもうちの部員だ。

「こけし…頼むから兄の教育はしっかりしてくれよ」

「無理です。唯我独尊な兄さんがかろうじて話を聞くのは母さんがあなただけなので、むしろ先輩の仕事です」

ライバルですしね、と淡々と付け加えるこけしに私はため息をつく。

なんて傍迷惑なやつだ。というかこけしもこけしだ。妹のくせに兄のことをまる投げするな。

「はあ、まあいい。早く行くぞ。遅刻する」

私は何気に、無遅刻だ。たまにサボるから欠席はあるがな。

「はあい」

「こらまで！　なんでお前が仕切るんだ！　皆の者！　行くぞ！」
「…兄さんよりは適任だと思うよ」

○

放課後、鞆片手に体育館の隣にある道場に入る。

まだ人数は少ないが早くも着替えて柔軟をしていた柔道着の少女が私に気づいてやってきた。

「ナオ先輩、久しぶりっすねー」

「よ、ふじた藤田。昨日ぶり」

「勝手に改誓しないでください。一週間も部活をサボってたくせに図々しいっすよ」

呆れた様子の少女―ふじたかいり藤田海里から私は視線を外す。

「いいだろ別に。練習しなくても強いんだから」

「……先輩じゃなかったら、ぶつとばしてるところっすからね」

まあ私だからっつか、私のが強いんだからぶつとばせないからな。

私は藤田にはいいと返事をして道場の奥の更衣室に入る。

藤田が言ったように私が部活に出るのは一週間ぶりだが、7回サボったわけじゃない。

学校の道場は他の部活とローテーションで使うから、月、水、木と隔週で土だ。

ちなみにわが女子柔道の隣ではバカ彦の男子柔道が行われてる。

「あ、山田さん、来てくれたんだ」

「…部長、山田はやめてくれマジで」

すでに着替え終わってる部長の隣に行きロッカーを開け、荷物をいれて着替える。

「前から不思議だったんだけど、どうして？」

「山田ってダサイじゃん」

「…部長命令です。全国の山田さんに謝ってきなさい」

「冗談だよ。とにかく、ナオって呼んでくれていいよ。部長との付き合いも1年超えたし」

「…ちなみにナオさん、私の名前は？」

「えー…？ ……た、たなかまさこ田中昌子！」

「たなかしょうこ田中昌子です」

「おしいっ」

文字でしか知らなかったのから仕方ないだろ。クラスも違うし。

「…まあ、いいけど。ナオさん、たまに出た時はちゃんと後輩に教

えてあげてよ？」

「わーってるよ。昌子はどーんと部長やってりゃ、私が勝ってやるさ」

「……主旨がずれてる気がするけど……まあいいや」

まあ、元々昌子はあつさりしたやつだけど。

んでわりと冷静だし、そういうところ買われて部長になったんだよな。本人は大して強くないし。

「じゃ、行こつか」

「ん。そういや、私が着替えるの待っててくれたのか？」

「まあね。ナオさんをとられるわけにいかないし」

着替え終わって二人で更衣室から出ると、待ち構えていた英彦がいた。

「山田直美！ 今日こそ決着をつけるぞ！」

「部長として断らせていただきます」

昌子はにっこり笑って言った。

学校内において基本的に英彦は暴力バカとして恐れられているが、女子柔道部にだけは英彦を恐れるやつは一人もいない。

「なにに！？ 田中！ どういうことだ！」

「一本勝負ならいいですけど、あなた何度も何度も続けるじゃないですか。」

「いいだろ別に！」

「よくありません。ナオはうちの部員なんですから、男子柔道部部长さんに文句を言う権利はありません」

「ぐ……ぐう……なら、一本勝負！ 一本だけでいい！ 一本で俺が山

田直美を屍に変えてやるぜ！」

いや、それ死んでるし。

「それならいいですよ。ナオさん、柔軟と試合が終わったら指導お願いね」

「はいはい」

まあいつものことなので私は適当に流して、柔軟を始めた。
準備運動は大事だ。ちゃんと体をほぐさないと、思わぬ怪我をするからな。

まあ…たまに朝みたいに何の準備なく一本背負いとかするが。

「山田直美！　まだか！」

「まだだ！　つかフルネームやめろ！」

○

「お疲れさまです」

「おう、こけしもお疲れ。お前頑張ったなー。一週間前よりかなりいいぞ」

「本当ですか？」

「私はそんな嘘は言わん」

「…ありがとうございます」

照れながら礼を言うこけし。

柔道に關してる時のこけしは素直に私を尊敬してる。

いつもこうなら可愛いのにと思うが、まあ仕方ない。

私の私生活はお世辞にも尊敬される部分がないからな。

「さて、私はもう帰りますけど…先輩は帰らないんですか？」

着替え終わったこけしがすでに着替え終わってるのにベンチに座ってる私に聞いてくる。

「ああ…言ってなかったか？ 部活の後は弟と一緒に帰るんだ」

「弟さん、がいたんですか？」

「ああ。そういや…お前とは英彦繋がりで長いが、弟は知らなかったか。帰日も逆だから部活後に一緒に帰る、とはならないし」

「そうですね。まあこのあいだまでは学校も違いましたし…こんなものでしょう。では先輩、また明日」

「おう」

私はのんびりとしばらく時間を潰してから、校門に向かう。

「おーい」

声をかけると弟の浩志がにこつと笑う。

眼鏡をかけた浩志^{ひろし}は私と似ずに大人しいが、仲は悪くない。

むしろ世の姉弟に比べたらいいほうだと思う。

「待たせたな」

「うっん。大丈夫だよ」

○

じりりりりり！

「う~~~~ああ~~~~」

じりりガチンッ！

うめき声をあげながら目覚まし時計を叩く。

う~~~~ん~~~~何か、だるい。

つか、声がかなり低い？ 風邪か？

「あ~~~~」

しゃがれてはいないが、男みたいな声になってるなあ今日はサボるか…。

サボる算段をたてながら起き上がる…？ あれ…なんか、視界が高い？

「…………え？」

着替えようとしてクローゼットから制服を取り出し、何気なく隣の全身用の鏡を見ると

男がいた。

「は…はあああああ！！？」

私が叫ぶと男も驚いた顔で口をあけて…いや、待て…鏡だぞ？

鏡つてのは、前にあるもんを映すだけだ。

つまり…

「私、か？」

○

「ユカ！ 大変だ！」

「母親を呼び捨てにするなっ…いつも言っ…誰？」

「私だ！ てゅーか男になってる！」

とりあえず寝間着変わりのジャージのまま階下の台所にいる母親の
ユカの元に突撃。

「……」

ユカはしばらく俺を見てから…壁かけの子機に手を…

「あ、もしもし警さ」なんてじゃー！！」ちよ、離しなさい！ う

ちには金目のものなんてないわよ！」

ちよっ…そりや自分でも信じられない現象だが…普通に通報とか。

「落ち着け、ユカ！」

「……あなたが私の娘である証拠は？」

「えー、山田直美16歳。誕生日は7月20日。小3から柔道を習ってる。ただしいつでも喧嘩できるように白帯。得意な教科は数学。苦手な教科は社会とか歴史。どうだ？」

「そんなの、調べれば誰だってすぐにわかるわ」

「……じゃあ…誰にも内緒の話…」

私はユカの耳元でこによこによと昔の話を口にする。

「！ ……確かに。誕生日に直美がおー」

「ぎゃあ！ 何口にしてんだよ！」…とにかく、それを知ってるのは私と直美だけ…つまり…直美？」

「さつきから言ってるじゃん」

「……わかったわ。とりあえず今日は浩志の制服で登校しなさい。明日にはあなたの分を用意してあげるから」

「え…ああ…え、なんか適応すんの早くない？ 普通もつと疑うだろ。いや、本当だけどさ」

まあ…何気に私も夢だーとか言って頼つねるとかのお約束的行動はしなかったけどな。

「さ、早くご飯食べてお父さん起こしてきて」

いつも通り席につく。

というか今日ぐらい休みたいんだが。

浩志は園芸部だ。毎朝早くに学校に行って花壇の世話をしている。だから制服は無断で借りるしかない。

「孝、^{たかし}ビックリするだろ。てゆうか不審者扱いされるだろうし、ユカが何とかしてくれよ」

「そうねえ…じゃあ、あなたは早くしなさい」

「はい」

私は飯をかきこんだ。

○

休みてー。いやだって…

「ださっ」

制服が小さいんだよ。

以前は浩志と私はそんなに変わらなかったが、今の私は10センチは身長が伸び、足がほとんどそのまま長くなった。おかげでズボンが短い。

まだ伸びるだろう算段で長めのを買ってあるがそれでもちよつと短く、くるぶしまでしかないから座ったら靴下が丸見えだ。

「んーあー、まあ、我慢するしかないか」

明日は佐喜から借りればいいしな。

なめる（前書き）

ヘンタイ、百合、主人公不感症な話。男もいれての三角関係になる予定だった。

なめる

私と彼女は家が隣でずっと同じクラスのいわゆる幼なじみだったが、初めて会話らしい会話したのは小学6年の秋の放課後のことだった。

「藤林さん、もう下校時刻はとっくに過ぎてるよ。早く帰りなさい」
「はい。わかりました」

私は図書委員長で毎日仕事をするのはいつものことなので、先生も一言でさっさと行ってしまった。

私は家で読むための本を選んでから鍵をかけた。

さて、帰ろう。

そして教室のドアを開けた。

ガラリ -

「.....」
「.....」

私はただ一人中にいた、はるやまみすみ春山美澄と目があい、一瞬見つめあった。

「っ...ああああ、あの！ これはその！」

硬直からとけた少女は、日がくれかけた暗めの教室でもはつきりわ

かるくらい真っ青になった。

彼女がやったことは確かに奇異だったけれど、別に興味もなかったから私は彼女を無視して自分の席から鞆をとる。

「じゃ、ばいばい、春山さん」

「ま、待つて藤林さん！」

「？ なに？」

「…お願い。さっきの、誰にも言わないで」

「さっきのつて、あなたが黒板を舐めていたこと？」

「……、」

春山さんは今度は真っ赤になって頷いた。

「なら大丈夫。私、そんなこと言うような友達いないから」

春山さんはじっと私を見てくる。

「…なに？ もう帰っていい？」

「あの…私のこと、気持悪くないの？」

「別に」

確かに変だけど、でも正直な話、私は誰にでも平等に優しい彼女を気持悪く思ってた。ひとあたりのいいその完璧な人格を恐いとさえ思ってた。

だからむしろ、奇行をする彼女を見て完璧じゃないことに安心したくらいだ。

「いいんじゃない。そんなの人の好き好きよ」

だからそう言った。

「あ、あの！ 藤林雨衣さん！」
ふじはやしついで

「だからなに？」

「私と、友達になってください！」

こうして私・藤林雨衣に、生まれて初めての友達ができた。

○

それから、4年たった。

私は高校生になって、夏が終わろうとしている。

「生徒会長に就任いたしました、春山美澄です」

美澄は生徒会長になり、どうしてか私は、副会長になった。

そして今、私は生徒会室にいる。

一年生で生徒会長になるという前代未聞を引き起こした優等生な美澄は、私の前に跪いて私の足を舐めていた。

「はあ、学校で足を舐めれるなんて… 嘘みたい」

ぴちゃぴちゃと音をたてて美澄は私の裸足の足先をなめる。
くすぐったくて時々ぴくりと指が動く。

「ねえ美澄」

「なあに雨衣？」

「もしかして私の足が舐めたいから私を副会長にしたの？」

「そうよ？ 当たり前じゃない」

当たり前なんだ…。

そろそろ長い付き合いだけど私は未だに美澄の考えがよくわからない。

美澄はとにかく『なめる』という行為が好きな人で、それ以外はマ
トモだ。

舐めたことがないものは一通り舐めないと気がすまないらしく、昔
に目撃した時は我慢できなくて誰もいない放課後をわざわざ狙った
らしい。

私と友人になってから、その癖はだいぶ影をひそめているが代わり
に私を舐める。

美澄いわく、私をなめるのが一番好きだから他のものを舐める必要
がなくなっただけらしい。

友人なのも舐められるのも構わないが、美澄は少し強引だ。

私は生徒会になんて興味がない。何をすればいいのかもわからない。

「いいのよ。雨衣はただそこにいてくれれば。本を読んでいてくれ
れば、私が時折舐めるためにいてくれればいいの」

「そう、美澄がいいならいいけどね」

別に副会長でも私に不利益はない。だけどそれは私の仕事が美澄に
行くということで、まして舐めるためなら他に役員をほいほいいれ

るわけにもいかない。

一体彼女はどうするつもりなのだろう。確かに彼女は優秀だけど、一人では限界がある。もし手に追えなくなれば手を貸すつもりではあるけど、私がどれだけ助けになれるかはわからない。

私は彼女みたいに人徳もコミュニケーション能力もない。書類仕事くらいならともかく、そういうわけにはいかないだろう。

だけど、そんなことは美澄に言わない。彼女は少なくとも今、幸せそうだし、ならいい。私が考えるようなこと、彼女が気づかないはずがない。

「頑張つてね。応援だけならいつもしてるよ」

だから私はそつと笑って、私の膝まで舌を伸ばしてきた美澄の頭を撫でてあげるだけにした。

彼女ならきつと、これだけで私の心配も伝わる。それくらいには私と彼女は傍にいた。

「ふふ、ありがと、雨衣」

舌なめずりをしながら笑みを返す美澄に、私はゆっくりと頭を撫で続けた。

私と美澄の関係はきつと世間一般からすれば奇妙でおかしなものなのだろう。

だけど私の友人は「いや、私の親友は、彼女だけだ。だからこれが私の普通だ。それでいい。」

「どういたしまして」

大好きだよ、美澄。

○

死神と私と転生（前書き）

死神を相棒に好き勝手しては転生しまくる話、のプロローグ。

死神と私と転生

「あなた、つかれてます」

断定された。

今の私は自分で言うのもなんだけれど隈は酷いし服は二日目だし髪もボサボサで、誰が見たって酷い格好をしている。

ただだからってどうして突然通りすがりに疲れてることを指摘されなきゃならないんだ。

だいたいそんなこと自分でわかってるし、今から会社に帰って書類を作成して提出すればひとまず仮眠とシャワーする時間はとれるんだ。

一分一秒でも早く休みたいのに見知らぬ少女に時間をさいてる暇はない。

「ちょっと、人が親切で言っているのに無視しないでください」

通りすぎようとしたらスーツの裾をひっぱられた。舌打ちしながら振り向く。

「私に何か用ですか？ ああん？」

「す、すこまないでください…。あの、あなた、凄いのついてますよ」

「は？」

「いやあの、私、靈感があつて…とにかく！ お抜いた方がいいです。それだけです」

少女はそういうと駆け出してすぐに雑踏に紛れて見えなくなった。ついてる？ 靈感？ 憑かれてるってか？

「はっ」

くだらない。

私は踵をかえして会社へ急いだ。

○

あれから二ヶ月たった。ようやくとれた休暇で何故か私は隣県にあるお祓いで有名な神社に予約までして来ていた。

信じたわけじゃない。幽霊とか、非科学的だ。完全否定しないしいても不思議はない気もするが、根拠はないが私に何か憑いてるとは微塵も思わない。

だが何故か、来てしまった。

「ははあ、こいつはまずい。あなた、やばいものに憑かれましたなあ」

やばいらしい。そのわりに全然やばそうに見えないぞタレ目坊主。

「何が憑いてるんですか？」

「これは…悪魔、ですな」

「は…」

明らかに宗派違つたる。

どうもこの福耳坊主が言うには私にはまがましい大きな悪魔が憑いているらしく、早く何とかしないと私の命が危ないらしい。なんだそれ。いきなり命とか。現実味なさすぎだろ。

「ではお被いしてください」

「無理です」

「殺すぞ」

嘘だ。こんな脅しみたいなことは言っていない。しかし力不足とか云々言つて断られた瞬間殴りかかりそうだったことは事実だと言つておこつ。

「ま、真に申し訳ございません。お詫びに紹介状を書きます。書かせてください」

とりあえずもつと偉い人へいの一冊に診てもらえる紹介状をもらつた。

次の休みはいつになるかわからないが日帰りで行ける距離ではなかったから、ひとまず休みがわかつたら連絡するとして帰ることにした。

一刻も早く帰つて休日を味わいたくて車を飛ばしていると、ふいに気配を感じた。

別に私は武術の達人で気配を読むのに長けているなんてことは全くなく、せいぜい一年ほど柔道を習つてた程度でインドア派だ。

だが、背後から物凄い気配がビンビンする。肌がちりちりする。

恐る恐るバックミラーを見た。

「!？」

黒い布キレを纏った骸骨の頭部が後部座席に鎮座していた。

「やあ」

フレンドリーに挨拶されたがそれどころではない。慌てて怒鳴りつける。

「バカ！ なにど真ん中に座ってやがる！ 後ろが見えねえだろ！」

布キレと骸骨はやたらでかく、バックミラーはほとんど黒布で占められている。免許をとって以来無事故無違反なのが密かな自慢だというに、全く空気読め。

「す、すみません」

骸骨はすつと消えたかと思うと助手席に現れた。

「これでいい？」

「サイドが見づらいからもっと椅子にくつつけ」

「こ、こう？」

確認する。うん、これならいい。

「ああ。いいぞ」

ほつとしたように骸骨が頷いた。
そつえばこの布キレ、真ん中あたりから鎌のようなものが生えて

いる。

「つか、誰ですか？」

「え、今更？ ああ、うん、死に神だよ、死に神」

「死に神い？ おいおい、冗談はそのトンチキな格好だけにしてくださいよ」

「いや、あの… 本当なんだけど。 というか、私今出たり消えたりしたじゃん」

「私？ 女の方ですか？」

「死に神に性別はないからみな基本私なんだ。 あとあなたは私だけど男じゃない」

「私は敬語だからです。 サラリーマンの基本ですよ」
「えー？ まあいいけど」

なにやら不満そうな死に神とやらに本題を切り出す。

「で、あなたが私についてた悪魔ですか？」

「だから死に神だって。 あの坊主、テキトーなこといいやつて」
「やつぱり。 わりと高名な方でしたのにねえ、 がっかりですよ」

「ま、そりゃいいんだよ。 それよりあなた、 よくも私を払おうとしたね」

顔を寄せてきたのを横目で見てから軽く頭で小突いて押し返す。 死に神はうぬうと呻いて頭を抑えた。

あれ、ちょっと可愛い。 しかし騙されないぞ。 相手は死に神だからな。

「いけませんか？ 守護霊ならともかく死に神なんて嫌ですよ。 私、まだ死にたくありません」

「おいおい、死に神だから死をもたらすなんて安直すぎだよ。 テレ

ビの見すぎ」

「骸骨がなにほざいてやがる…。じゃああなた、どうして私に憑いていやがるんですか？」

「私、あなたのさりげなく普通に黒いところ好きだけど自分に向けられると傷つくなあ」

「いいからなんですか」

「うんとねえ…話せば長いんだけど、前世からあなたに憑いてるの。私、あなたのことに気にいったから。むしろ私、一応神様でただの守護霊より強いし、あなたのことを守ってあげてるんだから」
「ほう」

なるほどねえ。それを聞くと納得できなくはない。

しかしこの骸骨、声や仕草は感情豊かだが、骸骨（表情）はぴくりとも動かない。どこから声をだしているんだ？ まあどうでもいいんだけど。

「ですが、あの坊主や少女はあなたを悪いもののように言ってますよ」

「まあ基本、私は死を司ってるからね。オーラは黒で、人から恐れられるのがデフォだよ」

「それは…悲しいですね」

「そう言ってくれるから…私の姿見ても普通にしてくれるから、私はあなたが大好きなのさ」

「過大評価ですよ。私にはあなたはただのコスプレ野郎にしか見えません。ただあなたの凄さも偉大さも知らないから、ただの人間の目線で見てるだけです。要は無知で愚かなだけです」

「そういうところも好き。大好き。だからずっと見てた」

なんというか…骸骨が相手でも少し照れるな。実際、単に物おじしないというか、態度がでかいだけだと思うんだが。

「スーカーですか」

「そうですよ。なんせもう前世合わせて500年くらい傍にいますから」

「前世の私、長生きすぎでしょう」

「私がついてるんだから当然でしょ」

マジか。私、前世で500年も生きたとかバケモンじゃないか。ギネスにものってないし嘘だろ。

「あ、疑ってるね」

「そりゃ、500年とか新聞にのってしかるべきなのに聞いたことないですし」

「ああ、そりゃ輪廻転生は必ずしも同じ世界で行われるわけじゃないからね。輪廻転生するのはあらゆるパラレルワールドをランダムで転移転生してるみたいなんなんだよ。前世はここより荒んだ漫画でいうと北斗の。みたいな世界で、殆ど不老不死で私の不思議パワーもあるあなたは神様扱いされてたよ」

神様な前世とかなにそのチート。なんで私今普通にブラック会社の平社員なんだよ。宝くじくらい当てさせろよ。買ったことないけど。

「いやだつてあなた死ぬ前に次は普通に生きたいって散々言ったじゃん。だからこうして25年も我慢してたんだから褒めてよ」

「前世とか知りませんよ。私はどちらかと言うとチート大好きですから。てゅーか今さりげに心読みませんでした？」

「何年の付き合いだと思ってるの。表情からだいたいなを考えてるかはわかるって。でもまあ望むなら今からでもあなたの体の時間ゆっくりにしていっぱい生きれるようにしようか」

え、チートしていいの？　なんか今日急展開すぎ。
でもなあ……

「いや、いい。普通でいい」

やっぱ、普通が一番だな。元ヤンではっちゃけた半生だった私が言うんだから間違いない。人生平々凡々が一番だ。

「あ、やっぱり。力に溺れないあなたが好きすぎてあふん」

「え、気持ち悪いから消えてください」

「酷い」

まあ、ようは死に神は問題ないってことだし明日からまた普通に会社行つて今まで通り生きるか。

「ちょっと、なんか私のこと凄いスルーしようとしてない？」

ぴ。
♪

「ちょ、無言でラジオならさないで。え、なに？　聞いたらもう私の存在いらないうってか？　完全無視かおい」

「ふんふ〜ん」

「今まであなたが鼻歌歌つてるとこ見たことないんだけど！？」

「……うるさいですよ」

仕方ないからラジオをとめた。

しかし困った。このままでは私はこの性別不明な骸骨と片時も離れない生活を送ることになってしまう。

今までもいたらしいが、見えなきやいないのと同じだ。見えてぴー
ぴー喚かれると正直迷惑だ。

前は友達だったかも知れないが、今はただのストーカーだし。

「迷惑そうにしないでよ！ うう、無二の親友になんて態度だよお。いや、生まれた時から一緒なんだからもはや私あなたの親だよ！？」
「言われても…私からすれば突然現れた馴れ馴れしい他人ですし」
「なんと！？ くっ…こんなことなら幼い時から会っていれば。いや、いつそ転生時にあなたの記憶をリセットさせなければ…っ」
「……」

本気で悔しそうだ。ちよつと可哀相になってきた。

よく考えたらこれほど私のことをよく知っているやつは他にいないだろう。

「…死に神、あなたの名前は？」

「え…？」

「名前ですよ。名前。名前を知らなければ、友人になりようがないでしょう」

「え！？ と、友達になってくれるの！？」

「どうせ一緒にいるなら、友好関係な方がいいでしょう」

「え…えへへ。私の名前はね、あなたがつけてくれたんだ。でも忘れたでしょ。だから、もう一度あなたが決めて」

「わかりました。では…あなたの名前は死に神黒子です」

「嫌だ！ テキトーすぎだー！ あと性別特定するのもちよつと…」

声でかい。うるさいやつだ。

黒子、案外いいと思うんだけど。お喋りで何となく女の印象だし。

「わがままですねえ…わかりました。では…白井正（しろい まさ）でどうです？」
「苗字も考えてくれたの？ 嬉しいな。シヨウか、いいね。ちなみに由来は？」

嬉しそうな声に少しだけテキトーにつけたことに罪悪感を感じつつ由来を言う。

「死に神といえは死人、死人と言えば白装束でしょう」

「白、装…」

「白井は適当に苗字っぽくしただけです。ショウは皮肉で正しいという字にしました」

「…いいんだけどさ、テキトーすぎでしょ」

「いいじゃないですか、白井君」

「しかも苗字呼び！？ そのために苗字まで考えたの！？」

「じゃあなんて呼んで欲しいんですか？」

「しーちゃん、とかよくない？ 私はあつくんって呼ぶね」

「呼ぶのは勝手ですが、私はショウと呼びますね」

「いいいいいよ。いやー、一時はどうなるかと思っただけど、またあなたと、いやあつくんと友達になれて嬉しいなあ」

「私は別に嬉しくないですが」

「もー照れんなってー」

テンションあがったらしくショウはご機嫌にどん、と私の肩を叩いた。

「あ」

「あ」

予想外の衝撃に私の体勢はくずれハンドルが回転した。

キキィー！

光が私たちを照らした。

○

恋より先に（前書き）

女↓男のTS異世界転生で女との恋愛もの。お調子者で猫を被りきれてない貴族と武士娘。

性別変わったのはいいけど女を好きになるのは…みたいなからの心情の变化的なのを書きたかった。

恋より先に

ある日唐突に火事で死んでしまった。

携帯ゲーム機をいじりながら料理したせいで油をぶちまけて死んでしまったので、自業自得だ。仕方ない。一人暮らだし家族は無事なのが幸いだ。昼間だからアパートの住人も死んだってことはないはず。

で、生まれ変わった。嘘みたいな話で意味わからないが、異世界中世ファンタジーっぽい。しかも私はそこそこの貴族。勝ち組。次男だからいずれ家を出るだろうがむしろ変なプレッシャーもなくて最高。

ここまでいい。ネット小説でもよくあったし。金持ちうはうはだし。両親美形で自分もそうだ。

が、男だった。性転換エ……。

最初は困惑したが、もう5年、男として生きて生活にもなれたし、割り切った。割り切ったつもりだ。まだこれから成長したら色々あるだろうけど、その時はその時だ。俺は男として生きるのだ！

が、生きると決めてからも色々悩むことは多い。

たとえば口調。幸いに貴族は一人称が『私』でも違和感はない。むしろ生前の私は男家族に囲まれて育ち口が悪かったので、丁寧に話すのに苦労した。

せっかくのイメチェンのチャンスなので敬語キャラにしようかとも思ったけど、それもめんどいから、漫画の優男系がするような、何とかだよ、そうなのかい、みたいな話し方にした。つか父親とお揃い。

今悩んでるのは進路。我が家は貴族で、男児はエリート軍人へと進むのが定例だけど、それは本当に勘弁して欲しい。だいたい兄に勝てたことないくらい弱いのに。

「ファルゼン、訓練の時間だぞっ」

「兄上は元気だねえ」

私じゃ若い者にはついていけないよ。私のが若いけど。

「師匠！ 今日もよろしく！」

軍人になるのは勘弁だし訓練もご遠慮したいです。剣の訓練とかマジ勘弁。ヤバーンとか女ぶりっこはしないけど怠い。そのくせ魔法は体が成長してからとか舐めてんのか。

「よろしくお願いしまーす」

愛想笑いも楽じゃないよ、本当。

ま、貴族とかまだよくわかんないし、とりあえず流されてみようかな。

○

結局、兄も通う軍人を多く排出する貴族の学園に通っている。といつても、私がいるのは魔法科だ。最初に簡単な試験と本人の希望で騎士科か魔法科かにわけられる。

それぞれ専門の授業もあるが、共通もあるし魔法科は特に選択授業が多い。クラスという概念はない。

制服はないが、代わりに学科別の所属バッチを胸元につけるのが規則で、わりと自由な校風だ。

12才で全寮制のこの学園に入学し、早5年。兄は春から最上級生になる。私はその一つ下だ。

いつも勝てなくて私が弱いと思っていた兄だが、常に学年最強の座を手に入っているので負けて当たり前だと思う。ちなみに実力を重視する騎士科だけど兄は座学があんまりにできないから首席ではない。

私は前世知識があるのもあるが、魔法の研究楽しいし、ゲームで培った集中力が魔法には適応できるからそこそこ成績はいい。苦手科目と落差が激しいから首席ではないけど、得意科目では私が一番優秀だとは自負している。

そんな感じで5年生が終わってのんびり朝起きると、手紙がドアの下からいれられていた。我が家の家紋付きだ。

開くと今日から春休みなのはわかっていたので至急帰ってこいの知らせだ。

そろそろ卒業研究について考えようと思っていたのだが……まあ久しぶりだし帰省するかなあ。

ぼんやり考えていると激しい足音が聞こえてきた。私は数歩下がる。その瞬間猛烈な勢いでドアが開いた。

「ファルゼン！ 親父から帰還要請来たんだけどお前も来たか！」

「…兄上、ノックくらいしてくれないか。前も言ったが、危ないことだってあるんだから」

もう今更すぎるが、二回くらい新魔法の実験中にドア開けられて爆発したから注意するのはやめない。というか普通に今のはぶつかりかけた。危ない。

「じゃらくせえ！ いいから質問に答えろよ！」

兄上いつも通りテンションたけえうぜえ。いや、兄上のこと嫌いじゃないし仲はいいほうだと思うけど、うぜえ。

「来た。まあ、兄上は春休み明けたら最上級生だし、進路の最終確認とかじゃないかな。多分ね」

「それなら、俺は変化なしつつとけ。修業で手が話せねえ。お前暇だろ。んじゃ、よろしく！」

言いたいことだけ言って兄上はドアを閉めた。走っていく足音を聞きながらため息をつく。今は確かに急ぐものもないし、帰省はするつもりだが、相変わらずマイペースな人だ。

「さて…んじゃ、ま、荷物でもまとめますか」

と言っても、家だから着替えなんかは十分にあるから、精々財布と魔術書、あとは貴重品くらいだな。せっかくだから家で保管してもらおう。

すぐ済むと思ったが、片付けが面倒でテキストに書類積んだりしてる私はずいぶん片付けもして用意に一時半もかかってしまった。どこにあるか何となく把握してるつもりだったけど、全く把握し

てなかった。もうちょっとくらい片付けするようにしよう。帰ってきてから。

ふと時計を見ると時間は10時。そういや、朝飯まだだ。食堂で食べてそのまま出るか。

「おー、ファルゼン、今から朝ご飯かあ？」

「お、シャルか」

ぐるぐる眼鏡と長い前髪で殆ど顔が隠れていて性別不詳っぽい友人が声をかけてきたので近づく。

ちびっこだし余計わかりにくいが一応女だ。妹と同年の3つ下だが、色々あって知り合った。

「珍しいな、シャルがこんな時間にいるなんて」

休日には昼過ぎまで寝ているのが常なので少し驚いた。給仕に食事を頼み、シャルの向かいに座る。

「うむ、昨日は夕方から寝てたからなー。さすがに起きた」

「そうか。それはいいけどシャルも女の子なんだから、ちよっと髪くらいとかしたらどうだ？」

寝癖がもの凄いことになってる。前髪も後ろも顎くらいの長さのショートカットではなくせ毛らしくいつも寝癖があるけど、今日はまた一段と酷い。細かくは言わないが、クワガタだ。

わしゃわしゃと軽く髪を撫でつけてやる。シャルは抵抗はしないがつまらなさそうに欠伸をする。

「夜に風呂入ったら直るからいいんだよ。つとに、ファルちゃんは

細かいこと気にしいだなあ」

「ちゃんとしたら可愛いと思うけどな」

「あー…ま、そう言われて悪い気はしねえけど、めんどい」

まあ、気持ちはわかる。私も前世で髪くらいはとかしたが、化粧なんて全然しなかったし。今日はあんまりに強固な寝癖なので諦める。垂直が斜めくらいにはなった。

「お待たせしました」

「どうも」

料理がきたので食べだす。

「つーか、私はいいけどあんまあちこちで女に可愛い可愛い言っつと刺されるぞ」

「別にお世辞で言ってるわけじゃないから大丈夫だ」

「……どう大丈夫なんだ？」

「ホントに可愛いんだから言われなれてるだろ。褒めたくらいで惚れた腫れたに発展するわけないだろう」

というか、日本人感覚が結構残ってるから外人的でみんな美人に見えるんだよなあ。女感覚で気軽に褒めてるのは否定しないが、褒めるくらいいいだろ。

一応男であるからにはジェントルマンであろうとしてるのに、シヤルにかかれば女たらしなんだから困る。

「お前って、賢そうに見えて馬鹿だよな」

「否定はしないさ。私もシヤルも…研究馬鹿だろ？」

「……賢そうに見えるのは否定しろよ」

「わざわざ自分を卑下するのはよくないよ」

「馬鹿はいいのかよ」

「研究馬鹿は褒め言葉さ」

「前向きなやつだな。そういや、前言つてたあれ、進展は？」

「ああ、あれね。やっぱ魔力を貯めるのがネックだなあ。紙一枚じや限界がある。手軽さと量産性で紙にこだわったけど、宝石類をつかうしかないかな」

「それだと割れないだろ」

「いや、その場合はむしろ複数回使えるようにできるといいよな。余分に魔力が込められるし二回は……うーん、でも魔法によるし、発動条件を新たに考えなきゃだし……細いスティックにして真ん中をより細くしたら割れるかな。…というか、そもそも宝石は費用がかさむよなあ。加工も大変だし。やっぱ魔法陣を改良していくしかないかなあ」

「要は全然進展してないんだな」

「……まあ、でもこれは別に期限があるわけじゃないし、のんびりやるさ」

「考えは面白いんだよな。斬新だし……もしできたら一般にも浸透する可能性が高い。ま、魔法を気楽にというのは今まで誰も考えなかったわけじゃないから、そう簡単にはできないか」

「まあ……」

昔から暇が出来たら考えてることだけど、魔法は魔力を持ちかつ特別な訓練を受けないと使えない。私はそれを解消したい。完璧には無理でも、生活に役だつこととか簡単な魔法ならできるはずだ。

そもそも魔法がこの世界では殆ど生活には密着してない。常に魔力を必要とするから、仮に便利な魔法具を作っても魔法使いか、魔法使いを雇えるくらい裕福な人間しか使えない。

魔力をためて電源みたいにすればいいが、それも特別な宝石にしか魔力を大量にためれないし、そこから引き出すのにも魔力が必要になる。

古代魔術と融合によりなんとかあと一步まで来てると思うんだが、一般大衆に広めるためには単価を安くしたいから宝石はなあ。それ以外に魔力をためるものがあればいいんだが。

「5年からは授業数だいぶ減るし、自由に研究できるよな。ファルゼンは卒業研究のテーマ決めたか？」

「まだ。シャルは？」

「私なー、ぶっちゃけ期限までに、とかいうの面倒だし、すでに考えてるネタの一つにしようかと」

「卒業研究を手抜きとか」

「手抜きでも判定Aは固いからダイジョーブだ。5年始まったら提出できるし、春休みにやっちまうわ」

シャルは年下、なんだけどその魔力の豊富さと天才性で私と同級生だったりする。飛び級ではなく、通常12から入学のところを9で入ってきた。当初はその異常性から避けられていたりしたが、色々あって私と友人になってなんやかんやで今は普通だと思う。

私も転生して金持ち美形で魔力もわりと多いからチート（笑）と思ってたけどシャルには叶わない。前世感覚で発想の奇抜さでは負けてないけど、普通に発想の転換力とか知識とか応用力とかあらゆるものが負けてる。シャルさんマジチート（笑）。

「まあいいけど。ごちそうさま。シャル、私は実家に戻るからしばらくさよならだ。一人で寂しいだろうけど我慢しておくれよ」

「アホか。どこでも行っちまえ」

しっしと払われた。やれやれ。肩を竦めながら立ち上がる。

「じゃあシャル、よい春休みを」

「おう」

シャルと別れて学園から出る。

実家は馬で三日の、わりと近いところにある。早い馬を乗り継げば一日でつくのはかなり近い。ただ前世の感覚だとめっちゃ遅い。遅いから、飛行魔法を何より先に私は習得して改良した。

今までの飛行魔法は高度も早さもそれほどではなかった。最初にあまりに高く飛んだ人が具合が悪くなってから人間は高く飛ぶべきじゃないと神様が決めてるとか思われてるらしくあんまり発展しなかった。

いや、空気がないからだよ。てなわけでその辺は結界魔法と組み合わせて最高80キロくらいいけるようにした……………と思う。いや、ここ早さの単位とかないし。

胸ポケットから魔術書を取り出す。メモ帳に手書きで魔法陣を書き連ねた簡単なものだ。

魔法陣がなければ魔法は使えない。ゲームみたいに呪文を唱えたら魔法陣が浮かび上がるとかもない。そういう魔法式を組み込めば別だが、それだと通常の倍は永唱も魔力も必要になるので廃っている。

なので魔法使いはそれぞれ一冊魔術書と呼ばれる本を持ち歩く。ちなみに昔は魔法を魔術と呼んでいて今とは微妙に違う魔術が盛んだった。今は魔法になったけど名残で時々魔術、という名称が残っている。

魔法陣に触れて魔力を送りながら呪文を唱える。

「飛行魔法、発動」

魔法で一番重要なのは魔力で、次が魔法陣だ。魔力をしつかりこ

めれば呪文は簡易なもので十分だ。

魔法が発動する。さて、帰る前に土産の一つも買っておこうかな。

○

恋より先に2

領地についたので魔法を解除して地面に降り立つ。あー、疲れた。あんまり長く飛ぶと集中力とかいるし疲れるからトバしたけど、トバすほどに疲労度あがるから意味ないんだよな。

「お、おかえりなさい、お坊ちゃん」

「どーも、でもいい加減、お坊ちゃんはやめてくれないか」

馴染みのパン屋にいくとおっちゃんがフレンドリーに声かけてきた。

「またいつものアレですね。ちょっと待ってくださいよー」

おっちゃんとは大概長い付き合いだけど、いい加減お坊ちゃんはやめてほしい。スルーされたけど。貴族って割と距離おかれるものはずだけど、家の近くは子供の時に兄上と駆けずり回っていたせいか、近所では普通に扱われてる。

領地それなりにあるし、さすがに近辺だけでも全員と顔見知りつてわけじゃないけど。

田畑や森、山も領地だし、町部分も都市って程度にはあるし広いっちゃ広い。多分そこそこの貴族レベル。

「んじゃ、ツケで」

「またですかい」

「宵越しの銭は持たないのさ」

「……」

「冗談だ。しょうがない、結構たまってるし、ここらで一気に清算するか。今は手持ちもあるからな。いくらだ？」

「へい、しめて3万跳んで56Gです」
「結構ためたなあ」

言いながら1万金貨を4枚だす。

「釣りはいらねえよ、なんてな。またツケを頼むから、今度とも頼む」

「まいどどうも」

ちなみに100万金貨、1万金貨があつて銀貨は1万金貨の10分の1、つまり1000円の価値、半銀貨がさらに半分の500円、銅貨が100円、半銅貨が10円で最低料金だ。100万金貨なんかは滅多にないから、一万円玉、千円玉、500円玉、100円玉、10円玉の5つと覚えれば簡単だ。これ以上は金貨の形じゃなくて普通に金塊になる。100万金貨も結構大きいし。

「景気はどうだい？」

「ぼちぼちですねえ。領主様の屋敷近くは基本騒げないですからねえ。大得意様は学園に行っちまってるし」

世間話でとりあえず言っただけなのに、暗にもっと買えと言われた。

「住宅街だし定期購入はあるだろう。というか、地味に儲かってるのは知ってるぞ」

「もし、少しよいか」

「はい？」

時代錯誤、というか今世で初めて聞いた話し方に思わず振り向くと、袴を来た少女がいた。

「……」

「歓談中すまない。パンを買いたいのだが」

「あ、ああ、邪魔をしてすまないね」

見とれながらカウンター前をどく。花柄がほどこされた淡い桃色がかった上着に裾に白い花がワンポイントである紺袴は、前世でもお目にかかったことがない上、同じころであろう少女は背筋を綺麗に伸ばし見事に着こなしていた。

もしかして日本に似た文化を持つ地域があるのだろうか。全くの西洋風の異世界だったので調べなかったが、その可能性はある。

「お嬢さん、見ない顔だねえ」

おっちゃんにはにこにここと声をかける。

「はい、火の国より参りまして、旅をしています」

「ほう、聞いたことあるが、ずいぶん遠くからだな。じゃあパンにはあまり馴染みないんじゃないか？」

「はい。よろしければ店主のオススメをいただきたいのですが」

「んじゃこれだな。そこのお坊ちゃんが決めたセットなんだが、うちの定番になってんだ」

「そうなんですか」

ちらつと見られたので笑釈するときこちなく笑い返された。あれ、もしかして怪しまれてる？ …… そっぴや露骨にじろじろ見てたな。

「ではそれで」

「おう。詰め合わせて800Gだ」

「ごーるど……すみません、祖国のお金しかなくて……駄目ですか

？」

「え、あー…いい、っていいんだけど、さすがに火の国のは相場がなあ」

「おっちゃん」

「はい？ お坊ちゃん、どうかいたしましたか？」

「私のさっきのお釣りを使ってくれ。それかツケで」

「おう、そりゃありがたい。さすがお坊ちゃん、剛毅ですなあ」

「え？ い、いや、見ず知らずの方にそのような…」

「いやいや、こっちは珍しい服を来た美人さんが見れてお釣りが出るくらいさ。それに、他国の人にもどうせなら美味しい食べ物がある国だと思ってもらいたいからね。じゃあ、おっちゃん、頼んだよ」

「はいよ」

久しぶりに着物が見れたし、似た文化があるなら諦めてたお米も期待できる。最高にいい気分だ。そこまで食事にこだわらない私だが、ふいに焼きおにぎりが食べたくなったりするんだよな。

醤油と味噌は甲乙つけがたいが、やっぱり味噌だな。フライパンだとこげすぎたりはかれるから、オーブントースターでじっくりと……やべ、今すぐ食べたくなってきた。腹減ってるせいだな。さっさと帰ろ。

家路を急いだ。馬車とか通る正門脇の勝手口から入る。入口を掃除していたメイドが振り向く。

「ファルゼン様、おかえりなさいませ」

「ただいま帰った。父上は？」

「応接間です。お客様がおられますがそのままでもいいそうです」

「ふうん？ わかった。ご苦労様」

「いえ、お気遣いありがとうございます」

いつもなら世間話のひとつもするところだけど、客と私を会わせたいらしいので急ぐ。

しかしいったい誰だ。……まさか何の前触れもなくまた貴族との顔合わせじゃないだろうな。でも一通りしたはずだし……とりあえず服、変えとくか。

応接間に向かいながら魔術書を片手で開いてページをめくる。あまり力のいらぬ簡単な魔法の魔法陣を3cmくらいの硬貨サイズに小さく、1ページに6つ書いてるページを開き、その中のひとつを押さえて魔力を送る。

「起動」

服装がいつものラフな服から貴族っぽい服に変わる。取り寄せ魔法の応用だ。これは簡単で便利なのに、今までなかった魔法で私が最初だったりする。日常に魔法をつかう発想がないのはもったいなさすぎるよなー。

ライターがわりやコップに水いれるくらいならこの大きさの魔法陣でいける。ちょー便利。

そして応接間のドアをノックする。

「父上、ただいま帰りました」

「入りなさい」

「失礼いたします」

礼をしながら入る。

見知らぬおじいさんがいた。誰だ。貴族ではないらしい。服がどこにでもあるような麻の服だ。なんだ、ただ近所に引っ越してきた人かな。

「まあまあ座りなさい」

父上がちょいちょいと手招きしながら自分の隣を指した。おじいさんも頷いたので先ず座らせてもらう。

「こちらが先程紹介いたしましたファルゼンです。どうですか。私に似て中々男前でしょう」

「そうですなあ」

このバカ親父何言ってるんだ。

「ファルゼン、こちらはキイド・フドウさんだ」

「初めまして、ファルゼンくん。まあそう肩に力をいれずに。親戚なんじゃから」

「は…そ、そうなんですか？」

「らしいなあ。私もすっかり忘れていたが、あちらから挨拶に来てくださったよ」

はっはっはと笑う父上。いや忘れんなよ。親戚を忘れるとかどういうことだよ。そんなに遠い親戚ならむしろ何しに来たんだよ。まさか親戚を語る詐欺師とかじゃないよな。

「父上、詳しく説明し…」

「ただいま戻りました。って、あ」

「ん？ あれ、さっきの……」

説明を要求しようとしたところでドアが開いて、さっきの袴少女があらわれた。どういうことだ？ いや状況的にこのキイドさんの連れだろうけど、全然知らない国に親戚とかどういこうっちゃ。わけわかれ。

「ところでファルゼン、クロノスはどうしたんだい？」

「兄上なら忙しい以下略です」

「そうか……クロノスなら調度よかったんだが、まあ、とりあえずはファルゼンでいいか」

「な、なんですか」

嫌な予感がする。キイドさんの隣に座った女の子は何故か睨んでくる。

「この子、お前らの婚約者だから」

「……………は？」

○

話を要約するとうちの曾祖父さんが放蕩息子で向こうの国にぶらり食い倒れの旅に行つて、行き倒れた女の子の曾祖父、つまりキイドさんの親父を拾つて意気投合して一緒に旅をし、帰る時にいつか子供が出来たらまた会おう。ついでに子供同士結婚させようと約束したらしい。

で、そんな話を親から聞いたことをふいに思い出したおじいさんは借りのある相手だからとりあえず孫を一人連れてやってきたらしい。父上もなんとなく聞いたことがあつて曾祖父の日記探して確

認したらしい。

なんだその話。漫画かよ。つか、わざわざ来なくていいし、もしこっちが女姉妹だったらどうすんだ。ていうか婚約ってほどちゃんとした約束でもないし。そんでなんで父上は乗り気なんだよ。

「そりやお前、クロノスが結婚できると思うか？ 仮に好きだという奇特なお嬢さんがいても、そもそもクロノスが女性に興味をもつと思うか？」

「……」

確かに兄上もそこそ顔よくて強くてそこその貴族で条件は悪くないが、全く女性の影がない。というか興味がない。筋肉が恋人みたいな人だ。それなら誰でもいいから婚約者をつけるのは悪い。

「それに彼女は剣をやっているらしいから、ピッタリだろう」

「それはわかりましたけど、なら兄上だけ呼べばいいんじゃないですか？」

「いや、ファルゼンもなんだかんだで誰も恋人はいないし、何より彼女にも好みがあるからね。二人で取り合いなさい」

「ちよつと……あの、適当に言つてません？」

取り合いって……可愛い娘さんだとは思っけど、今のとこ女の子と添い遂げる覚悟とかないんですけど。体は男だしいつかはそんな気になるかもとは思っけどさ。

「まあ、ファルゼンくんもいきなりの話に驚いとるのじゃろう。とりあえず、若いもの同士で。サクラコ、パンはどうしたのじゃ？」

「はい、ここに」

「ご苦労。ああ、金を忘れていたの。いくらじゃった？」

「あ、いえ…大丈夫です」

「そうか？ うむ、ならファルゼンくんをよろしく頼むぞ」

「はい」

「ファルゼン、しっかりな」

「はあ…わかりました」

父上とキイドさんが出て行った。

「…改めまして、ファルゼン・オルドレシアです」

「サクラコ・フドウです。どうぞ末永くよろしくお願いいたします」

「いや…あのさ、とりあえず腹割って話さないか？ 敬語もいらないから」

「……」

「君、私と結婚したいわけじゃないんだろう？ 大方、キイドさんの顔をたててるんだろ。さつきから睨んできてるし、私にあえて嫌われて断らせようとしてるんじゃないかな？」

「……あなた、嫌な人ね。察しがいいのは認めるけど、わかってるならわざわざ聞かなくてもいいじゃない」

唇を尖らせてキツメの目をさらに吊り上げたサクラコちゃんはキツネっぽい。ポニテといい、服装といい、武士っ娘っぽいなあ。

「ああ、テキトーに言ったのに当たったんだ。サクラコちゃんは結構わかりやすいね」

「……ちゃん付けはやめて。あなた年下でしょ」

「今年で18よ。あなたは16よね」

「今年17。てことは兄上と同年だね。うん、兄上とピッタリ…
といたいけど、サクラコちゃんは結婚嫌なんだよな。まあテキト

「に仲良くしようじゃないか。友達からよろしく。二人ともその気がないって言い続けたらそのうちキイドさんも諦めるさ」

「話が早いのは助かるけど、ちゃん付けはやめなさいよ」

「私のことも好きに呼んでいいよ。私は寛容だからちゃん付けも許可しようではないか」

「……あなた本当に嫌な人ね。たとえ関係なく出会ったとしたら友人になることすら拒否したいところだわ」

えらく嫌われたもんだなあ。前世ではそこそこ女友達多かったんだけど。同じようにへらへらテキトーなこと言っても男女差つてやっぱりあるのか。でも性格はなあ。今さら変えられないしな。

「まあそう言わないでくれよ。結婚はともかくサクラコちゃんみたいな美人の友達は大歓迎だからさ、仲良くしようじゃないか」

「……」

嫌そうな顔をされた。わざとだけど。

でもせっかくだから真面目に仲良くしたい。是非とも火の国とやらを詳しく。

○

恋より先に3

「というわけなんだが、誰か着いてきてくれる者はおらんか？」

御祖父様の話はあまりに荒唐無稽だった。当主の座を叔父に譲ると正式に手続きを踏んだ今日、集まった私たちに御祖父様は遠く面識のない相手と死人の曖昧な約束のために孫を結婚させると言い出した。

候補者は私と姉上、従兄弟の兄上だ。相手の性別もわからないがとりあえず一人連れていく気満々の御祖父様に断り、3人で話し合うことにした。

「誰かはいかにやらんよなあ」

兄上がそう言いながらも私と姉上を見た。兄上は叔父上の一人息子で次期当主だから、まさか婿入りするわけにはいかない。叔父上で三代目でまだそう長い歴史というわけではないがそこそこに名は通っているのだ。

なので私か姉上かとなる。

「うーん…カッコよくて優しい人なら、お見合い結婚のノリで私行ってもいいけど……不細工で性格最悪でも断れないのはちよつとねえ」

姉上がのんびりした口調で嫌なことを言う。それが問題だ。私は姉上ほど顔つきにとにかく言うつもりはないが、男らしくないやつと結婚するなんて嫌だ。仮に同世代やさらに独身がいなければ、所帯持ちの年上の妾に、なんてことになりかねない。姉上をそんな目には合わせたくないし、私もごめんだ。

「……私が行きます」

「サクラコ、いいのか？ 行くというなら助かるが、全員で説得すればなんとか……」

「あの御祖父様がご自分の意見を変えると、本気で思ってますか？」

「……ないな」

「んー、まあでも、あんがい子孫がいなかったり、相手から断る場合もあるわけだし、とりあえず行ったら？」

自分は嫌がったのにあつさりと勧めてくる姉上を少し睨む。にこっと微笑まれた。今まで何度この微笑みに騙されただろう。

「それに私たち可愛いから、無理矢理ひどいことされるかも知れないじゃない？ そうなってもサクラコちゃんなら相手をぶちのめせばいいから問題ないものね」
「……」

私もそう思った。いざとなれば逃げる自信があるから言った。それを見抜かれていたのは驚かないが、何故か姉上に口にだされると複雑な気分になる。

「サクラコ、本当にいいのか？」

「はい。御祖父様が望むならそれに付き合おうと思います。なに、嫌われればいいのですから簡単ですよ」

姉上と違い私はあまり女らしくないし、向こうから断るだろう。というか相手がいない場合もあるのだ。そう構えず、御祖父様の気がすむまで付き合おう。

○

安請け合いするのではなかった。そう後悔したのは船に乗って一時間後だ。船酔いがこんなに酷いとは思わなかった。たかが3日とはいえ地獄のような3日だった。

それから半年、歩いて歩いて歩いて、さすがに心が折れそうだった。路銀は御祖父様がちゃんとこちらの国の通貨を用意していたが、俵約俵約と慣れぬ異国料理の底辺を食べさせられた。

私は国の硬貨しか持つていないことを悔いた。御祖父様にお小遣をお願いしたが無理だった。クソジジイ。

しかも御祖父様が道を間違っていたらしく普通なら三ヶ月で到着できたらしい。さすがに怒りなくなつたが、そんな気力もなかった。

辿りついた家は……大きかった。我が家も近所ではそこそこ大きかったが格が違った。しかも縦にも高いし何人住めるんだ。

そのこの旦那様は優しそうな風貌で、私たちを屋敷へ向かい入れてくれた。これだけの家だ。大昔の口約束なんて知らないといつれなくされるところだったが門前払いを喰らうどころか客人として歓待してくれた。

よく考えたらその方がよかったのだが、その時の私は疲れて疲れて死にそうだったので素直に喜んだ。

「息子は二人いるんだが、学生で今はいないんだ。明後日から学園は休みだし帰ってくるよう文を書くから、とりあえずのんびりするといい」

何故すんなり行くのか不思議でしようがない。こんな家なら正式な許嫁や政略結婚の相手が一人や二人余裕でいるだろう。

聞いてみると、どうもここまで大きいと他の領主の娘なんかを嫁にもらうのも権利問題などで大変だから、金遣いがすごく荒いとかじゃない普通の娘を嫁にする方がいらしい。私は実家が遠いから実家に融通をせまられる心配もないしちょうどいいらしい。

しかも年齢も同じころとかなってこった。兄上を行かせるれば同性だしで済んだのに。と思ったがまあ…まあ仕方ない。姉上でないだけまだ。嫌われればいいんだろう。嫌われれば。

○

「仲良くしようじゃないか」

嫌われるのには至ってないが、とりあえず私は嫌いだ。初対面でここまでイラツとする人は初めてだ。

悪い人ではない、とはまあ、思う。だがとにかく性格が悪い。人を食ったような笑みも、からかうような口調も気にいらない。

顔は、綺麗だと思う。こっちの人はみんな目鼻立ちがはっきりしていてみんなそれなりに綺麗に見えるが、その中でもかなり綺麗だ。性格はともかく、顔だけなら飾っておきたい。

でも男性として見るには、綺麗すぎる。私はもっと男らしい方が好きだ。だいたい、私はまだ剣士として未熟だ。結婚なんて考えら

れない。

ま、その点では彼とも意見が合うようだ。しばらく祖父や彼の父上の気がすむまでこちらにやっかいになろう。

「ところでファルゼン、あなた学園生みたいだけど成績は？」

「ん？ んー、そこそこ上かな」

「へえ」

興味はある。こちらは文化が大きく違う。どのような剣技なのか、実はずっと気になっていた。

こちらとあちらでは学園の在り方も違うらしいが騎士というのは要は剣士らしいので、彼もできるのだろう。装飾の多いゆったりした服なので筋肉のつきがイマイチ見えないが、腕力が絶対ではない。

「じゃあちよつと勝負しない？」

「勝負？ いいけどなんで？」

鈍いな。いや、とぼけているのか？ 勝負と言えば剣に決まっているだろう。

「もちろん、剣よ」

「断る」

「……………え？」

「というか、そういうのは兄上に頼んでくれよ。私の管轄外だ」

「……………は？ いや、でも今自信ありげに」

「何か誤解があるからいうと、私は魔法科だ。得意なのは魔法さ」

ま、まほう……………って、あのよくわからない奇術のことか！？ 確かに我が国にも似たような奇術集団はあるし、こっちで空を飛ぶ人間を見て驚いたし、ちゃんと理論ある力らしいが……………えええ。

○

5億分の1で悪魔になった。(前書き)

夢で見て設定を補完したもの。このあとロッカーで寝て朝一に黒服に襲撃されたのをなんとかしたところで目が覚めて。主人公は最強になってファンタジー系にもできるかなとは思ってたけど、方向性決まらないまま放置。

5億分の1で悪魔になった。

人口増加、と騒がれたのはいつの時代だったか。

その頃はまだ他国と関わりがあつたと言うが、いったい何年前なのかは詳しく覚えていない。歴史は苦手だ。

今の日本の人口はだいたい5億人。世界は知らない。国の偉い人たちは外と情報のやりとりをしているらしいけど、一国民である私は知らないし興味もない。

日本が世界から離れた経緯はこうだ。

昔、日本が人口増加に悩んでいた時の一番偉い総理がオカルトマニアと当時呼ばれる人種だった。

彼は日本を何とかしようとして、悪魔を喚んだ。そして日本は契約した。

そして日本の大きさは変わらなかったが、縦に増えた。縦、と言って目には見えないし本当は縦じゃないんだけど、別空間軸がどうたらとか言つてよくわからないけど、つまり悪魔の力で日本と同じ地理地形の土地がどっかにあつて、そこと日本を繋げることで日本は沢山の日本を手に入れたってこと。

悪魔は各地にズタ袋のようなものを放置した。その袋に入れば新しい日本とこんなにちはという訳だ。

新しい日本と言っても別空間らしく他の階層は海をどれだけ行っても他国に行けず、日本人の血が半分以上ないと袋に入れない。またどうしてか日本国籍のない人は1層、つまり元の日本に入れない。だから日本は商品のやりとりはしてもほぼ鎖国状態だ。

新しい日本は手が入る前の自然満載で、今は10層までは人が住んでる。

それ以上に悪魔いわく無限に日本は続いているらしいけど、層を移動するためには1層ごとに袋に入って上がれ下がれと念じて移動しないといけないし、まだそんなに必要ないから10層で土地開発はストップしてる。

ちなみに私は6層に住んでいる。中々に田舎だ。

そういえば、日本が増えた代償はなんだろう。かの総理の魂とかだろうか。時たまそんな話がテレビになるが、あまり興味はない。

実はひそかに毎年ランダムに人間がいけにえにされてるとか、日本人の全てが死後地獄行きが決まっているとか、そんな説があるが都市伝説だろう。

死後は知らないけど、いけにえシステムだったら流石に政府が公表するだろう。最も重い罪の犯罪者をいけにえにするとかだったら、一般告知した方が犯罪防止に一役買っだろうし。

そんな訳で私は悪魔の力なんてオカルトが普通に存在する日本で、悪魔なんて全く無視して普通に暮らしていた。
ごくごく普通の日本人として、暮らしていた。

あの日が来るまでは。

○

週末、特に行くあてがある訳でもなくぶらぶらと歩いていた。
コンビニを出てふと、袋が目にはいった。

袋はどこにでもある。

ここで袋の説明をしておこう。袋はズボンくらいの長さで三角の先が細い感じだ。先には大きな釘が刺さっていて地面に固定してある。この釘も悪魔の力なので移動させられないようになっている。

袋は広げて直径30cmくらいだが入ろうとしたらいくらでも伸びて入る。トラックも入る。

入り方は一部入ったらすばと黒い袋に一瞬包まれて吸い込まれ、望んだ方の階層へ一つ移動して吐き出される。吐き出され方が丁寧なのか、元の体勢のままなので転んだりはない。

でも一応危険だから車用と人用で別れてる。特に出てくる時にスベースがないのは危険だから、車用は袋の回りが囲ってある。袋の横にはバス停のあれみたいな看板があって目印になっている。目についたのは人用だが、こんなところにもあったのか。

「んー」

暇だし、久しぶりに3層あたり行こうかな。

表である1層から3層が都会的だ。最初から開発されていたし、外の物も融通しやすい。

とはいえここもスーパーやコンビニも駅もデパートもあるし生活には全く困らないのだが、外のものはい少ない。

あと、層が違くと電波が通らない。ネットも電話も全てこの層にしか通じない。だから層を越える情報は紙媒体が口頭しか存在しない。

だからたまには上に行こう。もしかしたらなにか目新しいことがあるかも知れない。

時間的に誰も袋に並んでいない。早足に袋の元へ行き、袋に手をかけると、もここ、と動いた。

誰かがこちらへ来る。私は慌てて手を離して一歩引いた。

「ゆるん、と

袋から吐き出された男は私に軽く会釈してからさっさと歩いて行った。

私は改めて袋をとり、足先をつっこんだ。
いつものように吸い込まれ -

「え？」

吸い込まれなかった。

袋はひゆるひゆると伸びて侵食するかのようになり私の足をゆっくりと包みだしていた。

「なっ！？ え、なに！？」

慌てて足を振るが離れない。

なんだこれは。聞いたことも見たこともない。どうなるんだ。
あまりに予想外の事態で頭がどうにかかなりそうなくらい混乱していた。

早くも、私の腰から下は黒い袋、いやもう袋なのか。なにか肉感すら感じる黒いものでがんにがらめにされていて、さらに上へとあがつてくる。

逃げようとして足を動かすが、固いゴムに包まれているかのように黒は反発し私の体に絡み付き離れなくて、私は不様に転んだ。

いつの間にか腕も捕らえられ、胴体につけられていた。

いくつか頭上から声をかけられた気がしたが応える余裕がない。

両足両手をまとめて全て黒で巻き付けられた私は傍から見たら黒い

蓑虫のようだろう。

ついには顔まで来て視界が黒に染まり、瞬間、私は解放された。

「よう、おめでとう。お前は選ばれた人間だ」

「…は？」

寝転がっていた体を起こそうとすると目の前になにかが座っていた。人ではない。断じて人ではない。

何故ならそいつは黒い翼をはためかせ、1メートルほど浮いていたからだ。

真っ白な肌に紫の瞳と唇、真っ黒な長い髪に、目のまわりには強烈な隈があり、服装はパンク系の羽つきまくりだ。

ぞつとして、何故か私にはそいつが悪魔だとわかった。

「俺は悪魔だ。かつて俺が日本に土地を与えた代償は、一人、悪魔になること。お前はそれに選ばれた」

なにを馬鹿な、とは思わなかった。

私は自分に人ならざる力があることを自然に理解していた。きっと私にも羽が生えているだろう。

だから理由を聞いた。私が選ばれたという、理由を。

「なんで私？」

「お前は運がよかったんだ。俺とあいつが契約してから666年ちよつどの時に、お前が袋に入った。理由はそれだけだ」

「な…」

それだけ、それだけの理由だった。

ただ運が悪かった、なんて、なんて話だ。つまり誰でもよかった。私でなくてもよかったんだ。特別な何かがあったなら、私は納得はできなくても理解できた。

でもただ、ただただ運が悪かっただけだ。タイミングが悪かった。あの男がでてこなければ、気が向いて上に行こうとしなければ、そもそも出掛けなければ、私は明日も人間でいられたのだ。

それはなんて不運なんだろう。500円以上の宝くじを引いたことのない私が、5億分の1の確率を引き当てるなんて。

「お前は…私をどうするつもりだ」

悪魔になって私はどうなる。一体なにをさせられるんだ。

私はすでに悪魔の力の使い方を無意識に理解しているが、目の前の悪魔に敵わないことはわかる。経験が、年期が、知恵が、能力が違う。敵わない。

「別にどうもしない」

「…は？」

どうも、しない？

「ただ同族を見てみたかっただけだ。力が馴染めば人間にまじって生きることできる。じゃあな、俺の子供。せいぜい生きろ」

「……」

そう軽く言っつて、悪魔はどこかへ飛び去った。

なんだ、それ。

人間の願いを叶えて666年かけてまで悪魔をつくって、その理由がただ見たかったから？

「…っ、ざけんなよっ」

絞りだした悪態は、届かない。

私は半ば呆然としながら家に帰った。
回りの視線や声は気にならなかった。

○

「ただいま」

と言いながら家に入る。三階建てのいつもの我が家が何故か小さく感じた。

玄関で靴を脱ぎながら、靴箱の戸についている鏡を覗きこむ。

顔のつくりは変わってないが、肌は青いほど白く、唇は口紅を塗ったように赤く、茶だった瞳は青、天然で茶色のショートだった髪は紺色になっていた。

確認すると何故か服も下着も、ポケットにいれていた財布も携帯電話も全て黒色になっていた。

「おかえ…え！？ なに！？」

2階のリビングに入ると足音で振り向いた母親が驚愕して座ったま

ま後ずさった。

そういえば何も考えずに帰ってきてしまった。

「私私」

「んー…りゅーちゃん？」

「そう。てか一人娘の顔忘れないでよ」

「いやいやー、顔も声も同じだけどさぁ。なんか白いし髪黒…紺？
に染まってるし羽つけてるし服も黒になってるし…コスプレ？ 雰
囲気全然違うし」

「あー…とりあえず似合う？」

「怖い」

「ですよねー」

渴いた笑いをあげると母親は立ち上がり私に近寄りじろじろと私を
見てきた。

「で、なんなの？ あ、カラコンもつけてる」

「んー、実は悪魔になったんだ」

「笑えないわよ？」

「…だよねえ」

とりあえず二人で座る。母親は昼ドラを見ていたようで、私から興
味をテレビに戻した。

「で、どうしたのか完結に。このテレビあと10分で終わるからそ
れまでに要約して」

「あー…昔の総理が悪魔と契約したじゃない」

「うん」

母親は私を見ずに肯定する。単なるコスプレと思っているから仕方

ないかも知れないが、もつと真面目に娘に向き合え。

と、今は悪魔だから正確には性別はないんだっけ。なんとなく知識はあるが、まだ実感はない。

「で、その代償が666年後に一人、悪魔になることなんだ。それで、ちょうど666年後に袋に入った私が選ばれて悪魔になったの」

「……あんだ、真面目に言ってる？」

ようやく振り向いた母親はともいぶかしげな顔をしていた。

「真面目な話。私、どうなるんだろ。悪魔になったら前と同じ生活はできないよね。あー、でも力が落ち着いたら人間の姿になれるっばいし、しばらく休んだら大丈夫かも」

「……ちよつと、待って。全然信用できないし、混乱してるわ。とりあえず、悪魔でもあんたは私の娘だから、悲観的になっちゃ駄目よ」

「いや、悲観的になってないし混乱しすぎ。悪魔でいるくらいならーって自殺するとも思った？」

「……そついや、あんだそついう性格よね。よくわかんないけど、あんたは何か変な力を得て、そのカツコはそのうち戻るってことよね」

「まあそつかな」

「じゃ、超能力少女になったってくらいで、今まで通りでいいんじゃない」

そつ言つて母親はまたテレビを向いた。

……いや、我が母ながらスルースキル高すぎるだろ。あー……まあ、ちよつと気持ち楽になったけど。普段喧嘩すること多いけど、この人が母親でよかったな。

そうか、姿が戻ったら普通に生活すればいいのか。悪魔の力は超能力みたいなものか。なんだ、特殊能力ゲットでラッキーみたいに考えればよかったんだ。

「ははっ」

「なに一人で笑ってんのよ。さて、そろそろ晩御飯の用意行くか。あんだ、何食べたい？」

「ん…じゃあ、カレー」

「カレーかあ、肉、鳥でもいい？」

「ヘルシーですね」

「ヘルシーでしょ」

「なんでもいいよ。お母さんのカレーなら。私、カレーだけはお母さんのがいつちばん好きだな」

「ふふん、なんだって、先祖代々伝えられる作り方でつくってるからね。りゅーちゃんが嫁入りしたらちゃんと教えるから、覚えなさいよ」

「はいはい」

母親はにこつと笑って立ち上がり、一階へ降りて行った。

次の番組が始まったテレビのチャンネルをテキトーにまわしながら、自分の手を見る。

肌はどこも同じで青白く、爪が何故か伸びている。

悪魔になった。それでも家族は変わらない。

私はきつと、とても幸せな人間だったんだ。

人間のフリをしても私は人間じゃないから、いつか無理がくるだろう。でもせめて、母親が死ぬまでは人間でいたいな。

私は、そんな風に考えていた。

ふと、がやがやと急に外が騒がしくなった。

なんだろうと私は窓から顔を出した。家の前にスーツ姿の人間たちが数十人ほどいて、思わずぎよっとする。

「りゅーちゃん！」

母親がばたと階段をあがると同時にどたとたたとやたら足音が聞こえた。

窓をあけた格好のまま固まっているとリビングに黒服の大群がやってきた。

なんなんだ。やべえ。なんか、やばくない？

「悪魔だな。我々は政府関係者だ。一緒にきー」

「りゅーちゃん逃げてっ」

「行つてきます！」

窓から飛び出した。恐怖はなかった。飛べると確信していた。

羽を羽ばたかせた。ばさばさと背後で音がする。

重力に従い1mほど落ちてから、ふっと体が浮き上がる。頭に思い描いた通りに順調に高度が――

あ、あがらねー！

わかってる。どうすれば飛べるかなんとかなくわかってるのに、うま

く飛べない。

真っ直ぐに飛ぶことすら難しく、私は隣の家で旋回して自分の家の屋根にぶつかるように戻ってきてしまった。

ど、どうする？

いや、灯台元暗し！　ここに潜んで黒服が帰るのを…

ガラッ

「いたぞ！」

「ですよー」

窓から戻ってくるのまる見えですよ。わかってたよ、うん。

屋根から飛び降りる。急降下。

今度は羽を振らず、隣の家屋根にぶつかる手前でぐっと羽を広げて角度をたてた。

羽が風をつけて一気に私の体は浮き上がる。

ばさっ

ばさっ

羽を振って、スピードをあげる。今度は順調だ。

高度をあげる。スピードをさらにあげる。

ああ、これは、気持ちいい。

はるか下を町並みが流れていく。上には空が流れ、風が私を撫でていく。

風は強いはずだが、私の顔の皮膚は動かない。目も乾かない。これもまた悪魔の力だろう。

それにしても、うん。

昔から人間が空を飛びたがっていた理由がよくわかる。これだけでも、人間を止めた価値はある。

しばらく飛んで、たんばがぼつぼつ見えてきた。ずいぶん田舎に来たようだ。太陽の位置からしてそろそろ夕方だろう。

振り向いたが何もない。追われてもいないようだし、そろそろ降りるか。

降りる地点をどうするかよく見てみると、前方に大きな木が見えた。木のまわりは囲ってあって私有地のようなが、荒れ放題で人の手が入っていないことは明白だ。

私はそこに降り…

お、降りれない。

スピードを落とし、高度をさげて木に近づいたが、それは羽ばたくのをやめたからだ。羽ばたきでスピードを操作できるはずなのにうまくできない。

行き過ぎてしまいそうになり、慌てて旋回し、私は木の回りをぐるぐると回り、最終的に木にぶつかって落ちた。

「い、いてて…？ …痛くないな」

枝にぶつかりまくって地面に激突したが、かすり傷ひとつない。

悪魔の体は人間よりは丈夫だとはわかっていたが、具体的にどれくらいかはわからない。

考えれば当たり前だ。人間だってどれくらい強さでぶつかれば痣になるとか認識していたわけじゃない。歩き方をいちいち考えて覚えているわけじゃない。

悪魔になってわかったのは悪魔にとって常識の範囲での感覚知識だけだ。まだこの体を使いこなすまで大分時間がかかりそうだ。

「うーん…」

しかしこれからどうするか。

少なくともしばらく、ほとぼりがさめるまでは帰れない。季節は秋だが少々 of 熱さ寒さは関係ないので野宿でも問題はないだろう。とりあえず今日はここで寝て、テキトーに悪魔の力を慣らしていくのを目標にやっていくか。

○

「…ん？」

何か、いい匂いがする。

目をこすりながらもう朝かと体を起こし -

「んぎゃふっ」

落ちた。何事だ。

下は葉っぱが散らばった地面で、私は悪魔になったことを思いだした。

あーあ、夢じゃなかったか。ま、いんだけどね。痛くない。

悪魔になつてから痛いと思わない。これが丈夫になつたから少く
らいじゃなんともないということなら構わないが、痛覚がなくなっ
てるとしたら問題だなあ。

そついえば…お腹も減らないな。木の上で寝たのに体も痛くないし
悪魔というのは便利なんだか、なんだかなあ。

それにしても、落ちたせいか寝起きなのにやたらと頭がはつきりし
てる。

とりあえず起き -

「……」

「……」

「……」

知らない人がいた。ちょー目があつた。

「ど、どうも。おはようございます」

「……」

老夫婦？は変なものでも見たような顔をしてる。そりゃそうだ。私
悪魔だし。

「えー、と…もしかしてここ、あなたたちの庭ですか？」

「あ、ああ…そうだ。あんたは？」

「悪魔です」

「悪魔…」

あれ、ちょっと信じてる風？ 本当のことだけど普通信じないと思
うんだけど。

「あ……」
「ん？」

よく見るとおじいさんとおばあさんは七輪で餅を焼いていた。

「ねえ、食べていい？」
「……………」

おばあさんはこくこく頷いた。

よっしゃ。餅を掴んで食べる。焼きたてで溶けてるくらいなのに熱くない不思議。熱があるのは感じるのにな。

脇にあるお皿にはつてある醤油につけて頬張る。

美味しい。お腹がへらなくても味はわかる。

「ごちそうさま。いやー、美味しかったよ。ありがとねっ」
「……………」

あ、つい全部食べちゃった。……てへ。

「えー、と。では私はこれで」

踵を返して翼をひとふりしながら浮かび上がる。悪魔は別に翼の力で飛んでるわけじゃない。昨日は無意識でしていたけど悪魔の力で飛んでいて、翼はイメージのためみたいなものだ。

5mほど浮かんでから、改めてずいぶん荒れた庭だ。私が廃屋に見間違えたのも仕方ない。

力制御練習のついでだ。

私は腕を振り上げ風を操り、庭の雑草を短くし木の枝も揃え、落ち葉などのゴミは全てまとめてすみにまとめた。その間わずか5秒、

みたいな。

私はばかんとした表情の二人を見下ろしてにやりと笑う。

「お餅ありがとう。お礼だよ」

そして飛び立 - とと、あんまり高く飛んだら目立つかも。あっち行けば林とか山とかだし低めに素早く移動することにしよう。山籠もりとか、ちよつと修業っぽいよね。

てなわけで2 mくらいの高さで飛んで行く。庭を出るとすぐに3 mくらいの林なので姿隠すの余裕です。

すぐに道に突き当たる。コンクリートで整備されててもかなり地方。昨日見た限りではこの大通りを越えた林の向こうは殆ど建物がなかった。

なのでここさえ越えればいい。しかし車は少ないが、どうも若者がたくさん歩いている。制服なので通学路なんだろうけど、面倒だな。見つからないように待つしかないけど、さっきの老夫婦や、はたまた昨日の黒ずくめの男たちがやってこないとは限らない。

若者たちは一様に何か紙を見ている。ぴらぴらと舞って近くまで来たので掴む。どれ。

「……」

私の手配書きだった。早ええよ。悪魔を見かけたら政府までとかあの黒服は公務員なのかよ。なんで悪魔ってバレてんだよ。

紙をやぶり捨て、仕方ないからじつと様子を伺っていると、一人と目があつた。

「おい！ 木の上になんかいるぞ！」

なんかつてなんだよこら殺すぞ！！

「やべ、悪魔じゃね！？」

ばれたあああ！

慌てて後ろを向いて木を蹴った。逆走すると何故かさっきの老夫婦のおじいさん。

やばい！ 挟まれた！？

「こつちだ！」

手招きされた……。なんか友好的？

ちらつと後ろを見ると姿こそ木で隠れてるが追ってくる足音と会話が聞こえた。

ええい！ ままよ！

おじいさんに向かって飛ぶと指で家を指差された。そっちではおばあさんがドアを開けている。そこに飛び込むとおばあさんがささずドアを閉めた。

「！」

閉じ込められた！？

「大丈夫ですか？ 悪魔さん」

「だ…大丈夫ですけど……助けてくれました？」

「もちろんですよ。悪魔さんは日本を救ってくれたお方ですから」

人違いです、とはいわずにおいた。都合がいいから一時的に匿って
もらうことにした。

○

ある日ドアを開けたら女の子が以下略

15禁注意(前書き)

サブタイにいれたけど15禁です。百合ロリものの押しかけ女房系。

「おはようございますっ、おに……い、ちゃん？」
「いや誰だよ」

玄関を開けたらランドセル背負った少女がいて、私の顔を見て首を傾げた。

「え、いや、えーっと……あれー？」

しかしこの少女、ありえないレベルで可愛いな。
私の玄関先に立つ少女はただの少女ではない。金髪ろりろりツイ
ンテ少女だ。ふりふりごすごすな格好がよく似合う。二次元から飛
び出したような青い瞳の金髪少女だ。10歳くらいでお人形さんと
して売られてたら思わず買ってしまうそうなくらい可愛い。

日曜朝だからって不機嫌に対応してしまったことを後悔しながら、
私はにつこり笑ってしゃがんで少女と向き合う。

「どうしたのかな？ お嬢さん。家を間違えちゃったのかな？」
「え、えつとお……お、お姉ちゃんって、一人暮らし？ 昨日、この
部屋にお姉ちゃん以外の人っていた？」
「一人暮らしで、私だけだよ。それがどうかした？」
「うー……と、とりあえず、家、あがってもいい？」
「……」

な、なんだろうこの少女。可愛いし心情的には構わないんだけど、
見ず知らずの子供を部屋にあげて大丈夫なのか。

怪しい。いやまさかこの少女に罪はないだろうけど、誰かが私を

誘拐犯に仕立てあげようとしてる可能性もある。

「…だめ？」

「どうぞどうぞ」

可愛いからつい招き入れてしまった。保護者に知らせれば犯罪じゃないよね？

「お嬢さん、パパとママは？ 誰でもいいから連絡先を…」

「お姉ちゃん！」

「は、はい？」

「お姉ちゃんは、妹が好きですか？」

なにこの幼女。でも取りあえず機嫌を損ねてはいけけないので質問に答えよう。

「好きですがなにか？」

「……では、こほん。はじめましてお姉ちゃん、あたし、お姉ちゃんの妹だよっ」

小さく咳ばらいをしてから立ち上がってスカートの裾を掴んでお辞儀しながら満面の笑みで言った幼女。

我が家でちゃぶ台を挟んで外人幼女モデルさんがいるという非現実的光景だけで眩暈がしそうなのに、幼女の意味不明な台詞に私は呆氣にとられた。

「は？ …は？ ………はあ？」

「だあかあら、あたしはお姉ちゃんの妹なの」

私に妹がいた、だと！？

「か、隠し子！？ いや再婚！？ 取りあえずお姉ちゃんって呼んで！」

「お…おねーちゃんっ、大好きっ」

「かーわーいーいー！」

私の勢いに困惑したのも一瞬で、ロリッ子は語尾に マークが付きそうなくらいに甘ったるい声をだした。そのあまりの可愛さに私は机をばんばん叩く。

ぶりっ子だっていいじゃない！ ロリッ子なんだから！

「あ、ありがとう。…いや、隠し子とかじゃないからね。親を信じてあげなよ」

「失礼ね。隠し子がいてもおかしくないって信じてるのよ。とかじゃあなおさら誰よ。名前は？ いくつなの？ あとメルアド聞いている？」

「……別にメルアドくらいいいけど。お姉ちゃん気持ち悪いよ？」
「仕方がないじゃん。あなたみたいな美少女に出会うなんて滅多にないんだから」

ていうか奇跡だね！ 可愛いなあ！ 可愛い！ ちょっと気持ち悪そうな顔してるのも嗜虐心をそそるよね！ 泣き顔とか絶対可愛いよ！

ぴぴっと赤外線通信し、私は少女のメルアドをゲット！

「えっと、天野リリコちゃんね。同じ苗字だ。可愛い名前だね！。ところでリリコちゃんはどうして私を訪ねてきてくれたのかな？」

「んーと、日本には八百万の神様がいるのは知ってるよね」

「うん、そうだね」

「その中に妹神様いもうとがみさまってのがいてね、定期的に妹を派遣する神様なの。

神様が派遣しようとした時に日本で一番強く妹が欲しいって願った人に派遣してて、今回の派遣先があなたなの。だからあなたが私のお姉ちゃんなの」

「妹神（笑）」

「（笑）言っな！」

これはちょっと…電波的少女だったか。見知らぬ人の家に押しかけちゃう時点で変な子だと思っていたけど。可愛いからスルーしてた。

私は憤慨したようにほっぺを膨らませるリリコちゃんの可愛さにでれでれしながら、さてどうやってほどよく友好的かつ追い出せるかと考えていた。

「いやー、でも無理がある設定だよ。妹を派遣する意味がわからないし」

「妹神様は妹が大好きで、それを人々に派遣することで人々を妹好きにさせて信仰心を集めてるのよ」

「はーへーほー」

「まあそんなわけで、美少女リリコちゃんが今日からお姉ちゃんの妹だから」

「うんうん。どんどんお姉ちゃんの家遊びにきていいよ。でも今はそろそろお昼だし、お家まで送るから帰ろうねー。」両親に挨拶したらお昼から遊んであげるねー」

「…だから、私は神の使い、つまり天使なの！ この家の子供なの！」

「うんうん、リリコちゃんは本当に天使みたいに可愛いねえ」

「え、あ、ありがと…じゃなくて！」

むむう。強情だな。

別に私はリリコちゃんにお昼をあげて今から遊ぶことだってでき

る。何をしぶっているかと言うと、犯罪者にならないようにだ。

最近はずっと声をかけただけでやれ犯罪者だ誘拐だと騒がれて仕方ない。

私は幸いなことに女だしまだ未成年なので、幼女に話かけて思い切って手を繋いだ時もお母さんに相手してくれてありがとうと感謝されたこともあるだ。

でもさすがに家にあげちゃうのはなー。公園で他に人がいるところで遊ぶならともかく、さすがにさすがに問題だろう。最近はモンペアとかいるし。ごくたまーにうちの子に話しかけないで！って言うお母さんいるし。

私はただ、幼女とたわむれただけなのに！！

よこしまな気持ちなんて全くなってせいぜい抱きしめてちゅっちゅっしたいだけなのに！

……よこしまかも。私女の子でよかったー。男だったら捕まってるわ。

「信じられないなら実家にも連絡してみてよ。あなた以外の人の記憶には私の存在がインプットされてるから」

手のこんだ電波発言ねえ。まあいいか。最近電話してないし、そこまでしたらいい加減嘘って白状するでしょ。そしたら遊ぶぜ。

私は振り向いて、充電中の携帯電話を手にとる。

ぷるるるー

「もしもし、天野です」

「あ、私私」

「私さんなんて知りませーん」

「一人娘の声くらい聞き分けて」

「は？ なに言ってるのよ。あんた勝手に妹消すんじゃないわよ」

「…えお？」

「てかりリコそっち行っただから。あんたはリリコに甘いから心配してないけど甘やかしすぎないようにね」

「……うん、わかったー」

ガチャン

「……まじかつ」

振り返りながらツツこむとリリコちゃんはやれやれと大人びた感じで肩を竦めた。

「てかさあ、確認しなくても信じてよー」

「無茶苦茶言うな。ふつー無理。てか、確認しても無理！ なに！？ 妹様とか馬鹿じゃないの!？」

「もう。少なくとも昨夜は日本一妹が欲しい人間だったくせになんでそうなるのさあ」

「いや欲しかったけどさ。……まあ、いいか」

超現象過ぎて意味わかんないけど、そうだったなら仕方ない。妹が欲しかったのは欲しかった。

ただ昨夜は妹もののエロゲクリアしたテンションで妹超欲しくて悶えてた。昨日の時点で一番って多分そのせいだ。

「ようやく観念した？」

「うん。よろしく、リリコちゃ…妹だしリリコでいいか。よろしく」
「うんつ。よろしく。お姉ちゃん」

「可愛いーっ。あ、妹なんだよね。じゃあもしかして抱きしめてキスしてもいいってことだよね!？」

「う…うー、い、いいよ」

「ぎゅーっ」

ちゃぶ台に乗りあがって反対側にいるリリコを抱きしめた。

「く、苦しいよ」

「こいつほんと可愛いなつ。ペロペロしちゃうペロペロ!」

「ちよつ、ほつぺた舐めないで変態!」

○

とりあえずあれからリリコにキスして抱きしめてあーんしたりして甘やかしまくって、お風呂にいれて一緒の布団に入って今ここ。ぎゅうつと抱きしめると体温高くてちよつと暑いくらいだけど、柔らかにほんのりミルクの匂いがするからよしとする。

「いいんだけどね。いいんだけど、かなりお姉ちゃんって変態ちつくだよね」

「失礼な。可愛い妹を愛でたいというごく普通の感情でしょ」

「愛で方が半端ない。私は赤ん坊か」

確かに? 歩かせない勢いで常に抱っこしてた。でもやりたかったんだもん。

あーんとか、小さな背中流したり、小さな手を握ったり、髪をとかしたり、ぎゅーつと抱きしめるとか、とにかく小さな女の子を遠慮なしに可愛がるというのに憧れてた。まあ逆に? 遠慮なしに可愛

がらりたいという憧れもあるけどね。

「だって好きなんだもん。ぎゅー」

「苦しいって」

とか言いながらリリコの表情は嫌がってない。

「よしよし、可愛いなー」

さらさらの金髪を撫でながら一房とって鼻に当てた。

「むむつ。いい匂いにするぞっ」

「ちよっ…さすがに変態すぎでしょ。まあ、日本一妹が好きなやつなんて変態ばっかだって教わったし、どんなタイプにも対応できるように一応妹学校でてるけど…実際にやられるとひくわあ」

「ていうか、妹学校（笑）」

「あるの。神様ごとに天界があってちゃんと国みたいになってて立派な天使になるために頑張ったんだから」

「へえ。八百万の天界か…考えると胸が熱くなるわね」

妹だらけの天界とか犬だらけの天界とか、はたまた消しゴムだらけの天界…消しゴムの天使は何をするのかちよつとわからないな。

…は！ 妹神がいるなら、委員長神とか猫耳神とかもいるのか……オラ、何だかワクワクしてきたぞ！

「…なに考えてるの？」

「え…なにも？」

「嘘。私以外の女の子のこと考えてたでしょ。お姉ちゃんには私という妹がいるんだから、他の派遣とか考えちゃ駄目だからねっ」

「うーむ…じゃあ女の子以外なら…ロボット神様ロボット神様、私

にガンダムを……いや待てよ。どうせなら美少女ロボがいいなあ。

ばかなのれすか？とか言われてー」

「ロボでも女の子は駄目っ」

「はひはひ……わはっははら、ひっはふな」

頬を引つ張られた。嫉妬か。

リリコは手を離すとふんつと生意気そうに鼻を鳴らす。

「全く……まあ、といっても派遣されるには日本一の情熱を持って対象を愛さないといけないから、いくつも派遣されるなんて有り得ないんだけどね」

「ふーん、残念」

「私がいるでしょーが」

「はいはい。リリコ、お休み」

「……お休み」

○

おつきい犬がいた。

白くつてもふもふした垂れ目の犬だ。ちょー可愛い。

とはいえ、いきなり抱き着くような真似をする私ではない。私はいついかなる時も紳士なのだ。

ということと距離をとったまましゃがみこんで目を覗きこむ。

「わんちゃん、おいでー」
「くうん」

ふんふん、と鼻をならすとわふんとわんちゃんは鳴いて抱き着いてきた。

うはははは、可愛いやつめ！

「わふわふ」

「うはは、くすぐったいぞよ」

べろべろと私の顔を舐めてきた。くせー。でも可愛いから許す！

「わふわふ」

「？ おい、ちよっ」

あれ、おいおい？ ちよ…なんで胸をなめだす？

「あ…んんっ」

ちよっと気持ちいい…いやいや！ さすがに獣姦の気はな………っていうか、この犬どこの犬？

「はっ！？」

あ…夢か。エロい夢を見たことはよくあるけど、途中から急展開でいやにリアルになったな！。

「ん？」

なんかまだ胸に………違和感が……

「リリコ？」

「あ、起きた？」

「…なにしてんの？」

「前戯」

「ぜん…え？」

「前戯」

私のパジャマの前ボタンは全部外されて、上にリリコが乗っかって私の胸を舐めてた。

「…は？　ちよつ、ちよつとやめなさい。…話を聞こうか」

とりあえずリリコをどかせて起きて、じと目で睨む。リリコはきよ
んとしてから、首を傾げた。

「お姉ちゃん、私とえっちなことしたくないの？」

「ねーよ」

「え…妹が好きだよね？　性的な意味でも妹が日本一好きなんだよ
ね？」

「寝ぼけてんの？」

あれ、なんかショックを受けたようだ。

言いすぎた？　いや、でもリアルな話レズっ気あるのは認めるけど、
現実的に考えて会ったばかりの子供に性的興奮はもよおさないでし
よ。

「てかなんでそんなエロ仕様なの？」

「…私たち（妹）はお兄ちゃんの求める妹であるのが使命で、性的
奉仕も義務に含まれてるの」

「お兄ちゃん？」

「あ…ああ、てか、妹は男性に派遣されるのが基本なの。お姉ちゃんなんて前代未聞だよ。だからお兄ちゃんに仕えるべく私は教育を受けたから、…お姉ちゃんにどうすればいいのかよくわかんない」

「…無理しなくてそのままでもいいよ。妹はいないからどう扱えばいいか私もしんないけど、身内として扱ってやつからさ」

「でも、でも…ちゃんと奉仕しないと、落ちこぼれになっちゃう」

「お、落ちこぼれとかあんの？」

「うん。一週間に一度こういうことしたとか報告書書いて成績に繋がるの。妹の使命を果して帰ったら成績によって昇進とか…」

「昇進で…」

会社かよ。

却下却下。妹は成績ドベくらいが可愛い可愛い。とかテキスト言っ
て寝ようと思っただけど、リリコが目をうるうるさせながら私を見つ
めてくる。

「……………」

「…私じゃ、だめかな……………」

あーもー。

「仕方ないなあ」

「エッチしてくれるの？」

嬉しそうに目を輝かせるリリコ。三次元の女の子にそんなこと言わ
れてもなあ……………反応に困る。

「しません」

「ええ……………」

「がっかりすんな。エッチじゃなくてもつまり性的に奉仕すればいいんでしょ？」

「う、うん。フェラだけ…じゃなくて、クンニだけでもとにかくおに、お姉ちゃんを満足させれば得点になるわ」

見知らぬ人間の下世話までしなきゃいけないなんて、天使って本当に大変だなあ。四六時中だしデリヘルより大変そうだ。したことないけど。

「じゃあオナニーして」

「…え？」

「私は他人のオナニーを見て興奮するタイプだからオナニーしてくれたら十分満足だから、して」

まあ嘘だけど。義務だからって会ったその日にエッチできるほど私も淫乱ではない。そういう性癖ってことにすれば、リリコの成績的にも問題ないでしょ。

「……へえ、そうなんだ…」

人の寝込みを襲ってたロリ痴女のくせに私の気遣いからの嘘にドン引きしていた。しばいたるか。

「いいから早くしろ」

「…わかったわよう。……ん、ん……んふう……んん……んうう」

片手で平たい胸の先端をこねくりまわしながらパンツの隙間に余った手を入れたリリコ。ガチだ。ひくわあ………ちよっとドキドキするけど。

「んっ、んんっ」

くちゅくちゃっとな音がしだしてからしばらくしてリリコは睫毛を震わせ、軽く絶頂に達した。

「は…んう…はあ…ね、興奮、した？」

「したした」

「よかったあ…じゃ、ねよっか」

ほっとしたように笑うリリコは鼻をならすように息をはくとばかりと布団に寝転び、開けた服のまま眠りについた。

「…ったく」

仕方ないから服を着せる。というか、そんな規則があるならあるで先に言っておけ。寝てからするな。

妹が出来たと多少浮かれてたけど、果してこれから大丈夫なのかな。ていうか…はあ。ちよっとむらっとした自分が嫌だ。

私は軽くリリコにキスして、寝転がって目を閉じた。

○

「おっはよー、お姉ちゃん！ 朝だよ起きて！」

「ぐあ……な……あ？ お前誰だ？」

「ひど！」

「……ああ、リリコか。悪い、忘れてた。ふわあ……」

「きつ、昨日はお楽しみ、でしたね？」

「ツツコミたいところは色々あるけどとりあえず、お前が言うな」

朝起きると朝ご飯が用意されてた。モーニングサービス完備とは、やっぱり妹もいいじゃない。これなら押しかけ妹も悪くない。

昨日は上に下にしてたからしなかっただけで、言わなかったらご飯も普通につくってくれたのだろうか。

「いただきまーす」

「ちよつと！ ちゃんと顔洗って歯を磨いてから！ あと布団たたんで。あ、埃たてないようにそつてよ」

「……へいへい」

妹というよりおかんだ。家事してくれるならラッキー。しかも可愛いし最高！と思ったけど、早まったかも知れない。

ある日ドアを開けたら女の子が以下略

15 禁注意（後書き）

地元の昔悪戯してた中学生とか高校時代の元彼の男の娘とか、大学の先輩の元カノとか、姉の天使が派遣されるとか色々考えたけどキヤラ多過ぎで出す順番とかで悩んでとまりました。でも設定は嫌いじゃないからいつか書きたい。

彼女の秘密（前書き）

男の娘主人公が女子高に入る話。

彼女の秘密

雨が強い。

ダダダダッマシンガン連射するみたいな音が頭上の布製雨よけからしていて、あたしはため息をついた。

雨が降るのはわかったのに、傘を忘れてしまった。理由はわかっている。あいつが急かすからだ。

全く、少しのんびりしたからだって言うのだ。電車を5分待つ分ゆっくりしてれば、普段鞆にいれっぱなしの折りたたみ傘がまだ入ってるかを確認できたのに。先日使ってから入れ忘れてたのを忘れてた。

「ちえっ」

あーあ、ゆううつー。

雨なんて最悪。桜も散っちゃうし、寒いし、濡れるし。やだもう。

頭の中で愚痴をこぼしながら空を視姦するけど雲が逃げるわけもなく、あたしは何度目かわからないほど繰り返した動作でポケットから携帯電話を取りだしてサブディスプレイを光らせて時間を確認する。

「んーうつ」

もうヤダ！ あー！ 帰りたいー！

もうかれこれ30分はここで立ち往生してる。

誰か知ってる人通らないかなー。や、もう知らない人でいいからさあ。誰かー。傘持ってこーい。

「大丈夫？」

「、え？」

かけられた言葉に驚いた。

この駅は学園関係者しか下りない。何故ならこの駅から一步でたら全て学園の私有地だからだ。無人駅だが学園関係者を示すカードがないと通れないようになってるし、セキュリティはバッチリだ。だからあたしに話しかけるのは全て関係者のはずで、振り向くと制服を着て普通に関係者で、だから余計に驚いた。この微妙な日に駅をつかう生徒がいることもだけど、あたしに話かけたことに驚いた。

「え、と？」

「傘、持っていないの？」

「う、うん」

「じゃあ、はいる？ 学園に行くんだけど、君もそうでしょ？」

「…いいの？」

「勿論」

よくわからなかった。

いつものあたしなら、相合い傘なんかしない。傘を奪って後は無視だ。

でも、向こうから言われたのが初めてでどういえばいいのかわからなくて、気づいたらあたしはその女の子と一緒に駅をでていた。

「僕は保田辰子。やすだ たつこ 君は？」

腹立たしいことに存在する身長差のためあたしは女の子を見上げる。女の子はずいぶん白い肌で、歩くのもゆっくりしてる。

いかにもお嬢様らしいお嬢様なのだろう。それにしては僕っ娘だけど、逆に世間知らずだからか。いかにもか弱そうな外見で男にはどうしたって見えないから、あたしの有りに。ボーイッシュな僕っ娘は嫌いだ。

それにしてもこの僕っ娘はおかしなことを言う。

「あたしのこと知らないの？」

「え？ ……えっと、有名人なのかな？ ごめんね。私、今年入学だからよくわからないんだ」

「なんで？ 中学は別のところだったの？」

どう見ても中学生には見えないけど、中高一貫のここに高校からなんて珍しい。というかあたしは今まで見たことない。

「うーん。まあ、そんな感じかな」

「ふうん」

あたしのこと知らないんだ。なら、そっか。だからか。そうだよな。

「で、名前、聞いていい？」

「…桜さくら」

「桜ちゃんか。可愛い名前だね。これからよろしくね」

「……」

「？ 桜ちゃん？」

「……うるさい。黙って歩けないの？」

「え…あ、ごめん」

楽しそうな気安い態度にいらしてあたしは僕っ娘を黙らせた。

顔は見えないけど僕っ娘はしょぼんと気落ちした声で謝罪した。

いらいらする。ああもう、こんな気分になるのも全部、あいつのせいだ。

あたしは苛立ちまじりに歩調を早めた。濡れたって構わないから離れようとしたのだ。

「あ、と、」

なのに、僕っ娘まで早足、むしろ小走りになってあたしに傘を差しだしてる。

というか前を歩くあたしに差しだしすぎて自分濡れてるし。なにこの女。馬鹿じゃないのっ。

いらいらしながらあたしは立ち止まってバカを睨みつける。バカは追いついた、と小さく言って笑う。

その顔にまた、どうしてかわからないけどお腹の底から怒りが湧いてくる。

「ちょっと、ついてこなくていいから！」

「え、ダメだよ。桜ちゃん濡れちゃうでしょ」

「あんたには関係ないでしょ！」

「関係なくないよ。桜ちゃんが風邪引いたら嫌だもん」

「ばっ」

馬鹿じゃん！ なんなのこいつ！

あまりに予想外で、あたしは一瞬ほおけたようにバカを見た。

初対面なのに、そんなこと言うなんて、変！ 変な女…。あんまりに馬鹿な発言で、あたしの怒りはどっかに行った。

だけどそのかわりに胸が熱くなった。雨に濡れたのに、熱い。何となくこそばゆい熱さで、仕方ないからあたしはため息ながらに白い顔を見上げる。

「…あんだ、名前は？」

「え、辰子…だけど。聞こえなかった？」

「聞いてなかったの。辰子」

「あ、うん、なに？」

「あんだの傘に入ってやるから、有り難く思いなさい」

「…うん。濡れたら寒いもんね」

よくわからないけど、いらいらは収まったからとりあえずまた相合
い傘で歩きだす。

わざわざ追いかけてきたり、あたしの態度にも怒らずにニコニコし
て、変なやつ。

辰子、ね。一応、覚えてやろつと。

○

がたがたと窓が窓枠とぶつかり音をたて、ぴゅっぴゅつと風切り音
が断続的に聞こえる。

雨は昨日に止んだが今日は朝から強い風が吹き、まだ収まる様子
はない。

窓からは舞い散るところか舞い狂うほどに上に下にと飛びかう桜の花びらが見える。

明日は入学式なのに、大丈夫かしら。

昨日もした心配事が頭を過ぎる。

山奥にある全寮制のこの学園の自慢の一つが四季折々の豊かな美しい自然だ。

施設などにも勿論力は入っているし秋も十分に感嘆ものだが、やはり入学時の桜が最も印象的で、卒業生もみな振り返って一番に桜の景色を思い出すと聞く。私も最初に見た桜の美しさはハッキリと覚えてる。

だから是非新生入生にも見て欲しくて、私はつい心配しても仕方ないとわかつてはいるが心配してしまう。

とは言え、全寮制で荷物の問題もあり5日前から入寮が許可されており、大多数がすでに桜を見てはいるのだ。ただ入学式の桜はまた格別だと個人的に思うだけだ。

友人には心配性だと言われるし、全くその通りだ。特に自然に關しては私が心配しようが關係がないのに。自分でも損な性分だと思ふ。

「桃^{もも}」

「え？ … あ、ごめんなさい。なに？」

名前を呼ばれて視線を窓から室内に戻し、友人の苦笑顔に謝罪しながら尋ねる。

「気になるなら見てきたら？」

「え…」

『そうですね、ちらちら見られるとこっちが気になります。仕事なら大丈夫ですからどうぞ』

後輩の双子姉妹にまでいつも通りのユニゾンでそう勧められ、そんなにわかりやすかったかとちょっと頬が熱くなる。

「…そうですね、ありがとうございます。お言葉に甘えて、見回り業務に移らせてもらうわ」

「はいはい、行つてらっしゃい」

『行つてらっしゃいませ』

3人に見送られて私は校舎を出た。

「っ」

玄関扉を閉めた瞬間強い風が吹いた。ぴたぴたといくつか花びらが顔にぶつかって反射的に目を閉じる。

やっぱり風が強い。一周だけ見ておこう。

せめてあの桜だけでも満開のまま明日を迎えてほしいのだけど、大丈夫かしら？

風の強さにどうしても髪が乱れるのでそれはおいて、スカートだけ翻らないように気をつけて歩く。

頬や額にぴたと時折花びらがくっくつのでそれを払いながら、室内からの予想よりは風が穏やかであることに安堵する。

一度地に落ちた花びらが舞い上がるのでたくさんに見えていたが、この調子なら明日もまだまだ満開と言っていいたろう。

それにしても…

「はぁ…」

思わず息がもれる。何度見ても、ここの桜は格別に美しい。

美しくて、美しくて、まるでここだけ現世ではないみたいだ。まるで…

「天国みたい…」

そう、天ご…

「え？」

気配に気づかなかった私は突然聞こえた声に驚いて振り向いた。また強い風が吹いて、私の髪で視界が遮られる。髪を押さえると、そこには少女がいた。リボンの色から一年生だとわかる。

中1には見えないから、高等部の生徒だろう。髪がずいぶん長く膝あたりまでできていて、それにすごく色白だ。それ以外に特に特徴はない。

「……」

だけどその笑顔から目が離せなかった。桜の木を見上げて浮かんでいるその笑みは幸福にまみれていた。どうしてかとても魅力的な、見ているだけで私まで柔らかい気持ちになる、そんな笑みだった。

「…あ、こ、こんにちは」

じっと見ていると少女は私に気づいて恥ずかしそうに私に会釈をした。

「こんにちは」

反射的に微笑みながら挨拶を返す。友人たちには胡散臭いと言われるが私のこの優等生の仮面はやはり便利だ。

「素敵なところですね」

「そうですね。って、あら？　あなたもしかして、保田辰子さん？」

「え、はい…そうですね…どうしてそれを？」

「やっぱり」

高等部からの新入生はとても珍しい。わりと封鎖的な学園なので馴染めるようにと教師からも頼まれたし、彼女の姉から話も聞いている。

「愛子^{あいこ}さんから、ね。ようこそ、桜ヶ丘^{さくらがおか}学園へ」

「ああ、姉の知り合いでしたか。はい、保田辰子です。ありがとうございます。素敵なところで、嬉しいです」

不安そうな不審そうな視線を一変、愛子さんと言うと途端に辰子さんは全幅の信頼を寄せるみたいな満開な笑顔を私に向けた。

少し戸惑いつつも、悪い気分じゃないのでくすぐったく思いつつニッコリと笑いかける。

「ありがとう。私は神宮司桃^{とうもも}よ」

「神宮司先輩ですね」

「桃でいいわ。親しい子はみんなそう呼ぶから」

「え、いいんですか？」

「ええ。かわりに私も辰子さんと呼ばせてもらうわね」

「はいっ、よろしくお願いします！ 桃先輩っ」

会った日に名前を呼ばせたのは彼女が初めてだった。

愛子さんと交流があるのも勿論だし、話を聞いていたというのもある。けどなにより、私は彼女と親しくなりたいと自分で思ったからだ。

彼女の笑顔が素敵すぎて、側で見えていたくなっただ。

こんな思いは初めてだった。

憧れのような、恋のような、刷り込みにも似た憧憬の形をしたこの思い。なんなのがよくわからない、不思議な感情だった。

どうしてかわからないけど、もっと彼女のことを知りたいと、そう強く思った。

○

名前のない世界（前書き）

立身出世ものになろうと思った。男主人公異世界転生。

名前のない世界

ごくありきたりな日本人だったけど転生して移民族みたいなところに生まれてしまった。

「1」

「1」

頻繁に1と俺に向かって言ってきたなんなんだと思っただけの名前だった。

正確には『男1021』でこの集団で1021番目に生まれた男という意味。長いから一桁目で呼ぶらしい。名前のパターンが10個とか笑えない。あつちのおっさんもうちのお母さんも3とかなにそれ。兄も1だしアホかいっつら。

とか思ってたとしてもここは地球でも現代でもなく異世界で、世界的に名前という概念がなかった。正確に言うと固体識別に名前をつける考えがない。区別のために数字をふるだけだ。獣とかでも種族名はあるのに個別になると数字になる。意味わからん。

「1、1」

「なんだよ、ニコにサンタか。俺のことはカズって呼べって言っただろ」

漢字の一は名前だとカズとも読む。一也かずやとかな。だからそう名乗ることにしたんだが全然広まらない。

隣の家の双子は俺の側まで来ると女の子の方がぶーっと頬を膨らませた。

「変な呼び方しないでよ！ あたしは『女1032』、3は『男1

023』なんだからちゃんと名前でも呼べって言うてるでしょ！ 男
1021！」

「その呼び方やめろよ」

「カズ」

「おう、どうしたサント？」

「3おばさんが呼んでた」

「そうそう！ あんた学校さぼるのやめなさいよ！ 一々言いに行くの面倒でしょ！」

「告げ口すんなよ」

「告げ口じゃない！」

唯一名前で呼んでくれるのはサントだけだ。無口無表情だけどひそかに心の友認定してる。

「ニコ、俺が頭いいの知ってたんだろ？ 学校なんか必要ないって」

ちなみに学校というのは長老の家のテント。みんなテントだし学校って建物があるわけではない。受けてる子供は俺と双子にあと3人いる。キュウタとナナコとムックと名付けたけど不評だ。

俺からしたら名前がないとかめちゃくちや違和感なんだけど、その発想がまだないってだけだよな。日本は逆に一昔は数字がなくて漢数字だけで計算しにくいし、アメリカなんて覚えるだけでも難しかったはずだ。

なんで密かにひろめてやろうと画策中だ。前途多難だけど。

「あんたのどこが頭いいのよ！ ろくに文字も書けないくせに！」

「大人文字は覚えつつーの」

何故かは知らないがこの世界、子供文字と大人文字から始まり職

業別にさえ文字がある。基本は大人文字からの派生だが、転職の度に文字覚えなきゃならないとか本当に意味わからん。馬鹿か。

「それだけじゃだめでしょ！」

「大丈夫だっつーの」

この世界の文字というのは暗号のようなものだ。10ある曲線と直線で構成された記号が組合わさって一つの文字になる。アルファベットののような感じ。

で、たとえば商人文字はこれに二つ記号が増えて組み合わせが大人文字とずれたものになる。その法則さえ覚えれば簡単だ。組み合わせは数字パズルみたいなものだ。2個飛ばしだったり倍飛ばしとか。

俺はそっというのは得意だったから多分もうだいたいの文字がいける。

「カズ、これ、なんて読む？」

「ん？」

サンタがおもむろに地面に文字を書いた。子供文字にはないのがあるが、大人文字でもないな。4文字だからヒントが少ないのが辛い。サンタが習ってるレベルならそう難しくないはずだ。

文字を脳内で数字に変換して組み合わせの大人文字との差異にある法則を考え、知ってる単語と該当する組み合わせは…わかった。

「サイドン。これから向かう都市の名前だな」

「…あたり。お姉ちゃん、わかった？」

「えっ、あ、当たり前でしょ！　こんなの楽勝よ！」

相変わらず嘘が下手だなあ。ニコは感情的なタイプだから仕方な

いけど。

「ふうん。ま、どっちにしろサボっててもお前らが今習ってるのがわかったんだから問題ないだろ」

「そうだね」

「ちよつとっ!」

「でも、おばさん、怒ってたよ?」

「……次からはマジでサボっても告げ口しないように姉ちゃんなんとかしろ、弟」

「無理」

なんのために今試されたんだよ。はああ。

「仕方ない。帰るか。ほら、二人とも行くぞ」

「偉そうに!」

ニコはなんか知らんがいつもカリカリしてる。子供の考えることはよくわからん。

○

誰が教えてやるか（前書き）

魔法を教えにきた天使が教えるのを拒否する話。

誰が教えてやるか

神は言った。

「人に魔法をひろめ、さらなる発展をもたらしなさい」

私は応えた。

「わかりました」

確かにそう言った。

その時の私は生まれたばかりで、神がつくられた『人』というのはきつととても優しく可愛く素敵な生き物なのだと思っていたし、そんな人々に益をもたらす己の与えられた使命に誇りすら感じていた。

だけど地上におりた私を迎えたのは人々の笑顔ではなかった。最初にいたのは王を名乗る恰幅のよい男性だった。彼の命令で私は拘束された。

「神から聞いている。だが魔法をひろめるかは私が決める。お前は私に従え」

私は混乱したが、魔法のない彼らの拘束から逃げるのは容易だった。とりあえず人間に化け、私は魔法をひろめるために相応しい最初の人間を探すことにした。

最初に会った人間は私に宿を提供したが、次の日に目を覚ますと奴隷にされていた。

当然逃げた。人間の醜さに私は吐き気がした。

なんてことだ。神が天より地に降ろし自らの手だしを控え自由にさせたくらいだから、人というのは素晴らしいものだと思い込んでいたが、それは間違いだった。

私は人間のための魔法を教えるためつくられた存在なので、基本

構造は人間と同じだ。羽があり力があるだけだ。なので人間に紛れるのに苦労はなかったが、こんな人間と似ていることすら最悪だった。

私は使命を放棄することに決めた。神がどうして人に力を与えようとするのかわからなかった。

天に帰るには神にお伺いをたてないわけにはいかない。黙って帰ってもバレる。それに生まれたての私には、天にも知り合いも居場所もない。

なので仕方なく地上をさ迷うことになった。

ふらふらしているといつの間にか教会に保護され、孤児院を手伝うことになった。その神父はなにやら有名な人のようで私の天の力を無意識に感じてるらしく、嫌に親切にしてくる。

嫌だったが特に行くあてもないし、神に仕える人間なのでとりあえず流されることにした。

「お姉ちゃんお姉ちゃん」

まあ…いかに人といえ、子供に罪はない。私のように生まれた時に完成されているわけではなく、無垢でまさに私が想像した人の姿に近い。

私はしばらく子供の世話をした。

「お姉ちゃん、それどうするの？」

魔法を使うために生まれた私は、共同生活をするからと使わないということとはできない。何故なら無意識に刻みこまれてるからだ。歩くだけでも私は魔法を使い続けている。

そんな私が隠し通せるわけもなく普通に子供たちにバレた。

「…絶対大人には内緒だからね」
「うんっ」

…まあ、まあまあ？ 元々教えにきたわけだし？ 悪用するだろう大人には内緒って約束したし？ 問題ない。
別に子供が可愛いから気を変えたわけじゃない。断じてない。

「できたー！」
「僕も！」

私が担当する子供たちは全部で7人いたけど、みんななかなか飲み込みがいい。うんうん。

私には教える喜びが備えてあるらしく、みんなが学んでくれるのは素直に嬉しい。今はこの子たちだけだけど、悪用しないように約束させて子供たちからひろめて人の醜さを変えていくのも悪くない。いやむしろそのために神は私をつかわしたのだろう。

「リリアよ、お主の担当していた子供たちじゃが、卒業した。次はこの子らを担当しておくれ」

「え…神父様、けどまだ卒業年齢では……」

「養子に行く場合もある。寂しいじゃろうが、あの子らの幸せのためじゃ」

「お姉さん！ よろしくお願いします！」

……おかしい。いきなり全員が養子にいくのもだが、何より次に来た子供たちは前の子供と比べ純粋さが極端に低い。

2、3日新しい子の面倒を見たが、どろどろとした欲望がある。見た目にはかわりはないが、私にはすぐにわかった。なにかがおかしい。

私は思い切って前の子たちを探すことにした。魔法を使える人を探知するだけなので簡単だ。別に、あの子たちが幸せにやってるか確認したいわけではなく、魔法を勝手に吹聴してないか見るためだ。ん？ 意外に近所だ。全員同じ建物か……一緒にとられたなら全員が一気にいなくなるのも仕方がな……なんだ、これは。何気なく遠見をして子供たちの姿を直接見て息を飲んだ。

大きな建物の一室で、子供たちは拷問されていた。側にいる大人の会話によると私から手にいれた魔法を教えるように言っているらしい。そこには神父の姿もあった。

全て仕組まれていたのか。私を油断させるため子供の相手をさせ、それに魔法を教えだしたから次の子供を送ったのか。

なのに新しい子には教えない上、あの子たちが話さないので痺れをきらして拷問を始めたらしい。けどあの子たちは魔法について何も知らない。魔法の存在すら否定する。

何故なら私とそう約束したからだ。私は常に魔法を使っている。意識して使っているわけではなく纏っているとさえいえる。私の存在そのものが魔法の固まりだ。人にある魔法の制約も私にはない。私が簡単にする約束は人にとって絶対の契約で、拷問されようが死のうが、彼らは大人には言わないし悪用をしない。

私はそこにいた神父を殺した。他の大人も殺した。子供たちは体を治し、魔法と私に関する記憶を消して別の孤児院へ送った。

もう人に関わるのはやめよう。絶対に魔法は教えない。子供は未来だ。その未来を自分たちの欲望のため平気で傷つけるような人に魔法なぞ与えられるわけがない。仮によき人がいたとして、教えれば死の危険が付き纏う。

私は人から離れ自然の中で生きることにした。森の奥で出会った私たちは無意識に私が天のものだとわかるらしく、けして襲ってはこなかった。むしろ私に仕えるかのように食物などを捧げてきた。

それは可愛らしく愛おしいものではあったけれど、ほんの僅かでも人間が尋ねてくる可能性がある場所にはいたくない。

私は彼らを置いてさらに遠くへ遠くへ人がいないほうへと進み、ついに世界の果てにある無人の島へ辿りついた。

「お前は…天からの使いか。こんなところへ何の用だ？」

しかしそこに人はいなかったが、竜がいた。

彼もまた、神より使命を与えられ天から降り立ったものだった。

彼の使命は人間に火を与えることだった。彼の口から吐き出された消えぬ炎は今も人々の各都市に存在するという。

私は彼に事情を話した。

使命を果たした後も地上に留まる彼は恐らく人が好きなのだろう。

私は彼がどうして人間を好きになれるのか聞きたかった。

しかし反応は私の予想とは反対だった。

「なるほどな。ならここにいい。ここには人間は来ない。昔から散々脅しているからな」

どうやら彼が降りた時は王なんていなくて誰も迎えがなく、人間の姿を見るより先に使命を果たしたらしく。その後人間がどのように発展するか見届けようと残ったところ、100年ほどたったところから彼を討伐しようとしたり利用しようとしたりしたり、あまつさえ捕獲しようとしてきたので見切りをつけたらしい。

しかし彼はこの世界に元からいた彼に似た種族は気にいったのでその保護のため地上に残っているらしい。その種族も今では進化し

人型になっっているらしく、人の中の竜人と呼ばれる種族らしい。私に似た人より数も少なく交流もほとんどしていないらしい。

人とは気配が違うのでつきり獣の群れだと思っていたが、この島には竜人の里があつたらしい。

「いいのですか？」

「ああ。一人は寂しいからな。お前も生まれたばかりで使わされたのだろう？ よく頑張ったな」

私は竜人の里に客人として招かれた。彼ら竜人にとって竜は神同然らしく、私も天から来たというとても丁寧に扱ってくれた。あの人間らとは全く違う。

一年後、私は彼らに魔法を教えることを決意した。ただし竜人以外には広めないことを子々孫々まで誓わせたが。

しかし竜人はあの人間とは微妙に体のつくりが違ってそのまま魔法を使えるようにはならなかったので、アレンジしたものを教えた。争いなどというくだらないことに使われないよう、攻撃魔法は教えないでおいた。だが竜人は一年足らずで自分たちの力だけで攻撃魔法を作り出してしまった。そして、人間たちと戦争を始めた。

数で圧倒的に劣る竜人だが、元々肉体的には強度に優れた怪力の種族が魔法を独占しているのだ。みるまに近くの島から人間を殺してまわり支配下におきだした。

魔法を新しくつくりだした彼らの発想力も応用力も、なによりその努力も人間が神に愛される理由なのかと少しだけ感心したが、それよりも私は激怒した。

私は彼らを信頼して、悪用をしないとの誓いをしなかったし、魔法を改良しようとした時も止めなかったし、攻撃魔法をつくりだしたのも知的好奇心故だと静観した。

それがどうだ。結局竜人であろうと人は人だった。醜く疎かな下等生物だ。私は自らの軽率さを悔やみ、竜に彼らから魔法を取り上げると伝えた。

しかし竜の返答は予想外だった。

「すまないが、目をつむってはくれまいか。彼らはずっと人間に迫害を受けてきた。その仕返しをしているだけなのだ」

怒りさめぬ私は竜と対決し、負けた方が従うことにした。私は勝った。古代の地におりるにあたり彼には強い体が与えられていたが、魔法には耐性がなかった。肉体的には人とかわらぬ私だが、魔法で強化すれば問題もなく無傷であった。

私は彼を隷属させ、竜人から魔法と私と竜の記憶を消した。そして竜を連れて新たな地へと旅出った。

私は人間に混じるさいに自ら『リリア』と名付けたが、彼は竜神とは呼ばれても名前がない。なので私が勝手につけることにした。『ちび』と名付けた。巨体で似つかわしくないし、なにより悪口だろうと文句を言われたが黙殺した。

唯一の友人だと思っている彼の裏切りに私はまだ怒っているのだ。

ちびは大きく目立つので私の魔法により小さくした。彼は自力で体の大きさを変えられないらしい。

前から思っていたが、彼は態度こそ百戦錬磨の老熟したものだがあまり役に立たない。経験が豊富なのは認めるが私に比べ弱すぎる。

旅だったはいいいものの、人間が全くいない場所というのは難しい。山奥で殆ど人がこないという場所はいくつかあるが、全く人間に認知すらされていない場所は殆どない。

地べたをはいずることしかできない人間だが、数の多さと行動力には呆れてしまう。その行動力をよきことに使えばいいのに、旅から見る限り、より有能であるほど褒められた人間ではない。もちろん、たまにはいい人間というのもいた。

というか、街や村の中で静かに暮らす人間の半数は魔法を教える前の竜人のように善人であった。しかしその善人に影響力を持つものほど有能で、彼らに魔法を教えても竜人の二の舞になるのだろうと予感させられた。

「ちび」

「きゅう？」

彼が『ちび』になって早数年。体が小さくなつた当初は威厳がなくなるのだのと噴飯ものの冗談を呟いていたちびだが、私が抱き上げたり頭に乗せて移動してやるのに味をしめたのか、元の姿には言わなかった。もし窮屈なら別にたまに戻すくらい構わないのだが、気に入ったのだろうか。

あぐく人の言葉を話すと怪しまれるからと獣のごとき鳴き声をあげるようになった。天では音の形に意味はなく、唸るだけで意思疎通は可能だ。なので同じ天の生き物通しである私には余裕でわかるが、愛玩動物のように振る舞う必要はない。道ゆく人に頭を撫でられて喜んでいるのもどうなのだ。彼の趣味にとやかく言いたくはないが、苦言の一つも言いたくなる。

「今は二人なんだから、普通に話したら？」

「きゅう（面倒になった。可愛いしこれでいいだろう）」

自分で可愛いとか、自分が何歳かわかってるのか。ツツコミたくなつたが我慢した。問題があるわけでもない。

「はあ。ちび、そろそろこの街に来て一年たつけど、次はどこか行きたい場所はある？」

「きゆう（潮風にも魚にも飽きたし、肉が食べたい。山だ。いやしかし南国のフルーツも食べたい）」

「……とりあえず、南に行きましょうか」

呑気な相棒にため息がでそうだが、そこに救われている部分もある。だから私は黙って頷いた。

頭を撫でてやるとちびはご機嫌に喉をならした。

誰が教えてやるか2

「おはよう、朝よ」

頭を小突かれて目が覚める。私にこんなことをするのはリリアだけで最初は新鮮だったが、そろそろやめてほしい。そもそも私に睡眠という概念はないのだが、リリアには理解できないようだ。

竜人の裏切りに彼女は立腹し、私をあゝ島から連れ出した。それでようやく私はもうずっとあそこから出ていなかったことを思いだした。

以前戯れに飛び回り狭いと思っていた外は、体が小さくなったのもあるだろうが、とても広がった。上空から見た小さな村の一つ一つにさえ人々が住まい、命を育んでいる。

外は文化の違いもあり、街ごとに食べ物も代わり人々の性質も異なり、見るもの全て当たり前前のことも新鮮だった。

「きゅ（ああ、おはよう）」

鳴き声をひとつあげて応えようと彼女はけだるそうに目を細めた。私はぼんぼんと尾で布団を叩く。それを合図にリリアは私を抱き上げて部屋をでる。

いつものことだ。リリアは私の生活態度に少し不満があるらしいが、私が頼めたいがいのことをしてくれる。根が善人すぎるほどにいい子なのだ。

それを利用して彼女の世話になつてゐる私がいうのも何だが、たまに少し善人過ぎて心配になるくらいだ。

人間を嫌いだと言う割に困っている人間を見捨てることはしないし、私に隷属契約を結ばせたのに命令じみたこともしない。善人と

いうより、それ以外の発想がないともいうが。リリアはまだまだ子供だから頼まれたなら、理由がなければつっぱねるという考えがないのだろう。

「おはよう、リリアちゃん」

「おはようございます、女将さん」

顔を洗うため宿屋の裏の井戸に回るとちょうど女将が水を汲んでいた。

「重いでしょう。手伝いますよ」

「悪いねえ」

「いえ」

リリアは私を頭に乗せて女将から滑車紐を受け取り、細腕からは考えられない速さで引いては降ろし、女将が用意していたタライを満タンにした。

動いても私に全く影響がないのは魔法をつかっているからだ。怪力ももちろんそうだ。リリアはごく平然と魔法を使う。隠す気がないのかと思うが、それでも自重していてバレていないつもりらしい。

実際にはすでに私とリリアが天からの使いであるとは知れ渡り、恩恵を与えてくれる白髪の天使が竜の子（私）を連れ人間にふんして世界を回っている噂にもなっていて、私もリリアも目立つ容姿なのですぐにバレてよく遠巻きにも見られているのに気づかない無理矢理言うことを聞かせるのは不可能と悟ったらしく一昨年くらいから偉そうな人間たちとその手下はリリアに手だしはしなくなったが、常に監視されているのに気づかない。まあそっちは私がちよちよいとしたのだが。無知とは恐ろしい。

この女将もリリアに手伝わせようとタイミングを計っているのに、毎日同じ手口なのに何故気づかないのか。ま、このくらいならわざわざ私が口を出すまでもない。別にお礼だとくれるお菓子が美味しかったから目こぼししているわけではないが。

「きゅ（リリアよ、今日の朝食はなにか聞いてくれ）」

「女将さん、今日の朝食はなんですか？」

「今日は一昨日と同じよ。スープは違うけど」

「きゅう」（確かに美味しいし、朝は簡単なものがここの風習とは言え、いい加減飽きるなあ。リリア、せめてジャムは違う味にしてくれるよう頼んでおくれ）」

「女将さんの料理は美味しいから楽しみです（ちび、うるさい）」

表面だけ女将さんに会話をしながら真意を変えることにより私にだけわかる返事をしてきたリリアだが、なんとつれない返事だ。変なところだけ器用になりおってからに。

「きゅ（リリアのケチ）きゅきゅっ!？」

悪口を言った途端、魔法が切れたのかはたまた別の重力魔法なのか下に体が引つ張られだした。落ちる落ちる。

「きゅ（すまん、私が悪かった）」

謝るとすぐに戻った。危ない危ない。頭にのっついて揺れず落ちずに安全なのはリリアの魔法が補助してるからなのだが、当たり前になりすぎて最近忘れがちだ。

手伝いを終え、食事をとるとリリアはのんびりと散歩をする。当然私も一緒だ。今日は肩にのってみた。

「ちび、髪を踏まないで」

仕方ないので再び頭上へ。物珍しげな視線があちこちから向けられるがリリアは気づかない。

重そうな荷物をもつ人間がいれば手伝い、転んだ子供の傷をいやし、迷子の子供を家まで送ったところで昼食の世話になり、流れるようにその家で寝たきりになっている若者の治療をした。

迷子というのも嘘だったのだろう。毎度ひつかかるのもどうかと思うが、実は医者ですと言って使う瞬間さえ見られなければ魔法で一瞬で治しても大丈夫と本気で思っているのだから、もはや呆れるを通り越して馬鹿かと言いたい。

だが、馬鹿で鈍くて騙されやすいリリアのことが私は嫌いではない。リリアが嫌だと思わないのだから慈善行為も構わない。私はただ見守ろう、とお菓子を食べながら誓いを新たにした。

○

図書館の魔女（前書き）

童話風の異世界召喚。恋愛系。

図書館の魔女

大陸一大きな国の、真ん中にある大きな街、その街のはずれには大きな図書館があります。街の中央のお城と同じくらい大きな図書館です。

そこには古今東西、様々な書物が集められ、所狭しと並べられています。そして本が詰まった山のような本棚の隙間を進んだ一番奥に、管理人が住んでいます。

管理人は王様から図書館の管理を任されている、一人の魔女です。小さな体に見合わない長い年月を生き、図書館の管理を勤めてきました。

魔女は魔法を使います。魔法で本を仕分けて整理し、本を求める人に貸します。返却期限を過ぎると勝手に戻るようにするのも魔法の魔法ですし、破られたり落書きされたのを綺麗にするのも魔法です。

彼女以上に適任はいません。彼女以上に書物を愛する人もいません。

図書館には魔女が住んでいます。本が大好きで、たくさんの魔法が使えて、人々に尊敬されて、だけど淋しがり屋な女の子でした。

魔女はずっと一人でした。だけど我慢していました。賢い魔女にはわかっていたのです。

人々は困った時に魔女に頼ります。魔女を尊敬し、敬っています。けどそれはけして魔女個人を好きなわけではありません。魔法の魔法はとても便利で、尊敬と同時にみんなから恐れられていきます。

魔女に友達はいません。王様たちは魔女を信頼してくれていますが、雇い主なので友達には成りえません。魔女は図書館もこの国

も好きでしたが、この国には友達も家族もないのだけは悲しいことでした。

国の誰もが魔女を知っていて、友達になりたいと言ってくれる人はいないのです。

魔女は寂しかった。毎日寂しかった。

だからある日、こう思いついたのはおかしいことはありません。むしろ遅かったくらいです。

私を知ってるから友達にならないなら、知らない人を連れてくればいいんだ。

魔女は図書館の中でも滅多に足を運ばない書庫に行き、魔法の本を引っ張りだし、召喚魔法を唱えました。

それはとてもとても難しく、今まで使ったことのない魔法でしたが、なんとか成功しました。

「ここはどこ？」

現れたのは少年でした。

魔女は説明しようとして、自分が魔女だと知られては嫌われてしまうと思い、嘘をつきました。

「あなたは突然ここに現れたの」

少年は全く別の世界の人間で、魔女のことも何もかも知らなかったのです。だから魔女の言うことを信じました。

○

三角の黒い帽子と黒いローブを来た小さな女の子がうんとこしょと本を運んでいました。

「キキ、危ないよ」

そこに男の子が近寄り、本を半分持ちました。

「シン、洗濯は終わったの？」

キキと呼ばれた女の子は頬を僅かに紅潮させながら男の子、シンに問い掛けます。それにシンはにっこり自慢気に笑いました。

「とつくに終わったよ」

シンの笑顔にキキは嬉しくて笑顔になります。

「じゃあ、キキを手伝って」

「もちろん」

召喚された少年はシンと言う名前でした。魔女には名前がなかったのですが、少年がキキと名付けました。魔女はそれが嬉しくて、自分のことをキキと呼ぶようになりました。

魔女は図書の整理も片付けも掃除も洗濯も、身の回りの何もかもを魔法で行っていました。何せ魔女ですから。

だけど今は違います。魔女はキキになったのです。キキはシンの前ではただの女の子のキキで、魔法なんて使いません。

今まで魔法で一瞬で終わったことも、手作業で時間をかけてやります。けどちっとも面倒ではありません。シンと手分けしてお仕事をすることは、キキには楽しくて楽しくて、シンを召喚してよかったと心から思いました。

キキはシンのお陰で寂しくなくなりました。

「キキ、今日はいい天気だし、サンドイッチをつくって外でお昼にしようか」

「うん」

だけど、シンはどうでしょうか。

○

キキはちゃんんと知っています。

シンがこっちに來て一週間、毎夜泣いていたことを。一年たった今もふいに寂しそうな顔をしていることを。ちゃんと知っています。

シンがいてくれてキキは幸せです。毎日が楽しくて、嬉しくて、わくわくとドキドキに満ちています。

だけどシンは、どうでしょうか。

キキの名譽のために言うと、何も夜に魔法で監視しているわけはありません。

シンが来たその夜に、浮かれたキキはシンの元にお話しようと訪ねたのです。ずっとずっと求めていたお友達が出来るかも知れないのです。キキは有頂天でした。

だけどドアをノックしようとして、シンに与えた部屋の中から聞こえる泣き声に気づいて手を止めました。

「…帰りたいよう」

キキは自分のことしか考えていませんでした。キキはシンがどんな気持ちか考えていませんでした。

突然、何の前兆もなく家族も友達も家も故郷も好物もなににもない知り合いのいない全く違う世界に連れてこられて、どんなに辛いかなんて、全く考えていませんでした。

今すぐドアを開け、謝罪して、家に帰してあげようかと思いました。だけど、出来ません。

今日、よろしくと握手をしました。シンの手の暖かさを知りました。名前をもらいました。笑顔を向けられる嬉しさを知りました。誰かと食べるご飯のおいしさを知りました。

たった数時間、半日にも及ばない時間しかたっていないのに、もはやキキにはシンがいない元の生活なんて考えられなくなってしまっていたのです。

キキは声を殺して泣きながら、心の中で謝りながら、シンの部屋の前にいました。そのまま眠りにつきました。幸い、シンはキキより遅く起きるようで気づかれませんでした。

次の日も、シンが心配で、一人で泣かせたくなって、何の意味もなく何の慰めにもならないとわかっていたけれど、シンの部屋の前に行って泣きました。

一週間続きました。一週間たった朝、シンは気持ちの変化があっ

たらしく、少しいつもより元気でした。その夜、泣き声は聞こえませんでした。キキは一週間ぶりに自分の部屋で寝ました。

それからキキは夜にシンの部屋を訪ねていません。もしかしたらまだ、泣いている日もあるかも知れません。

一人だと油断して物憂気なシンの顔を目撃した時は胸が締め付けられます。罪悪感で震えます。その度、正直に話そうかと葛藤します。

だけど時間がたつほど、シンと一緒にいればいるほど、キキはシンが大好きになって、離れたくなくて、結局魔女とは言えません。

「キキ、どうかしたの？　もしかしてマスタードいれすぎた？」

「う、ううん。そんなことないわ。シンのサンドイッチ、とても美味い。世界一美味しい。大好き」

「…褒めすぎだよ」

照れて笑うシンを見ると何だかドキドキします。

お世辞なんかじゃありません。シンの料理はキキにとって世界一です。シンの全てが世界一です。シンは、キキの世界です。

凄く凄く好きで、好きな分だけ、罪悪感がキキの身を締め付けます。だけど今更、そんなこと言えません。

嫌われたくありません。離れたくありません。ずっと一緒にいたいのです。

最近シンが好きすぎて、変になってしまったのか、妙に恥ずかしかったり、心臓が早くなったりさえします。

きっと友達さえこえて家族なほどシンと親しくなって、家族のよう大好きだからでしょう。これが家族なのだと思うとキキは胸が暖かくなります。

「シン、いつもありがとう、大好きよ」

「…うん、僕も大好きだよ」

お礼を言っと、シンは笑いました。

ドキドキと心臓がうるさいくらい早くなって、熱いくらいに胸が暖かく、とても幸せな気持ちになりました。

キキはシンが大好きです。とってもとっても、大好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3411w/>

思いついたはいいいけど止まってる小説集

2011年11月11日03時18分発行